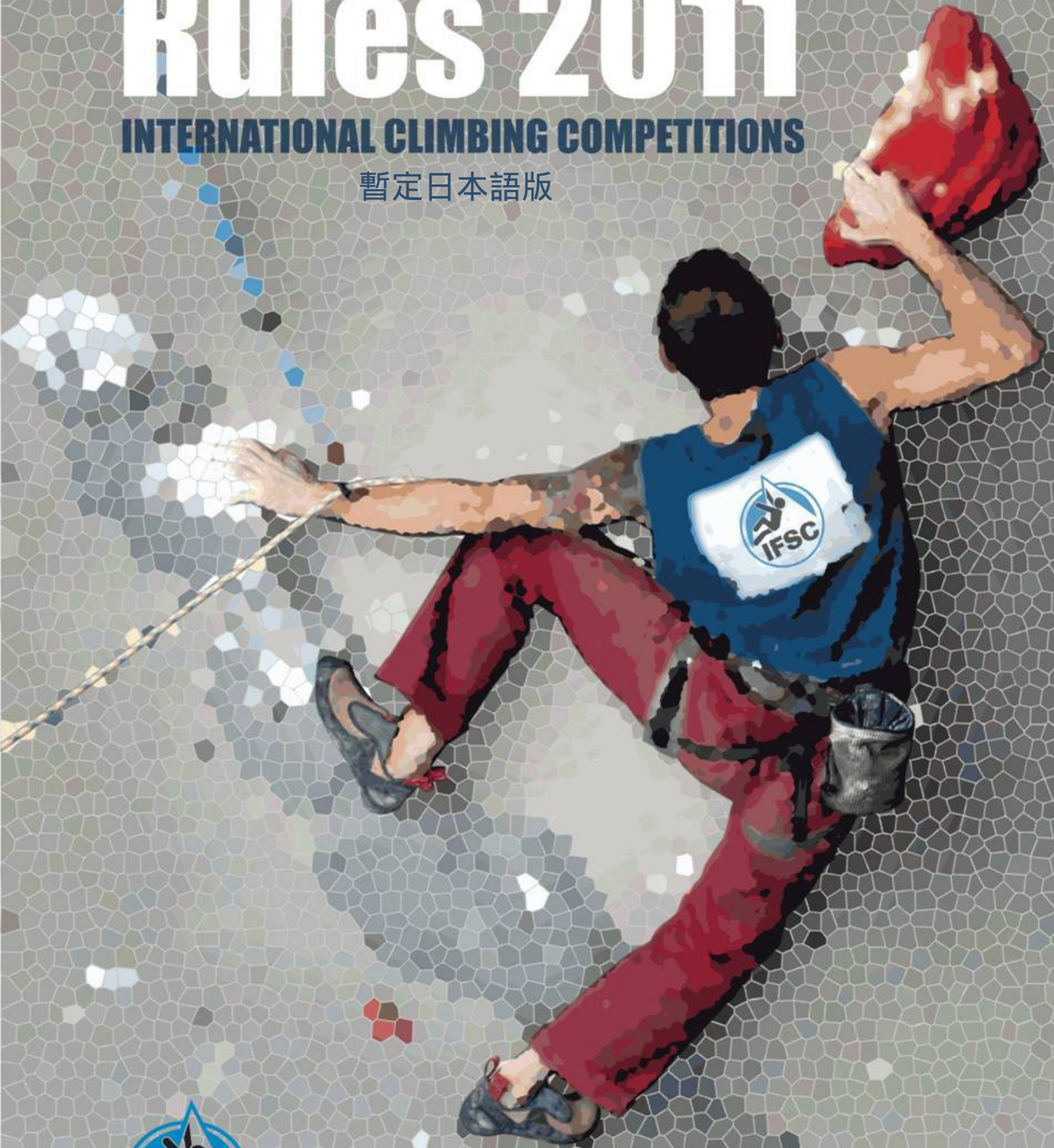


Rules 2011

INTERNATIONAL CLIMBING COMPETITIONS

暫定日本語版



International Federation of Sport Climbing

はじめに

この IFSC ルールは、協同作業の成果である。選手、大会主催者、経験を積んだ審判が、このルールブックに協力している。追補は IFSC のウェブサイトに掲載されることになっている（1.2.1e を参照）¹⁾。

IESC ルール委員会 委員長
Wim Verhoeven

IESC ルール委員会 書記
Rutger Elink Schuuman

¹⁾2008 年版発行時には当面は 2 年ごとの改正、そして将来的には 4 年ごとの改正を目指すと言われ、2010 年版では前文で 4 年ごとの改正を宣言したにもかかわらず、2011 年にもう改正となった。この背景には、ヨーロッパが大陸別の選手権とユースシリーズを独自に管理することになったことがある。これにより、大陸別選手権とユースシリーズに関するセクションが削除された。またそれとは別に「チーム・スピード」という新種目が追加されている。これだけの大きな変更となれば、追補による対応の限度を超えている、という判断となったのだろう。実際、表紙も年号が書き換えられたのみで背景画像は同じものを使用している。

目次

1.	国際スポーツクライミング連盟（IFSC）	1
1.1	イントロダクション	1
1.2	事務的作業	1
1.3	競技会	2
1.4	IFSC 競技会役員	2
2.	加盟団体	4
2.1	イントロダクション	4
2.2	加盟連盟/協会と選手団の義務	4
2.3	選手団派遣資格	4
2.4	選手団の定員	5
2.5	テクニカル・ミーティング	5
2.6	選手の登録と確認	5
2.7	国際資格	5
2.8	手数料	6
3.	一般規則	7
3.1	競技種目、カテゴリー、ルートのタイプ	7
3.2	クライミングウォール	7
3.3	安全性	8
3.4	競技順リスト	9
3.5	受付とアイソレーション	10
3.6	オブザベーション	11
3.7	クライミングに先立つ準備	11
3.8	選手団の服装と用具	12
3.9	壁のメンテナンス	13
3.10	テクニカル・インシデント	13
3.11	判定用ビデオ記録の使用	14
3.12	リザルト表	14
3.13	順位と記録	15
3.14	アンチ・ドーピング検査	16
3.15	式典	16
4.	リード	17
4.1	概説	17
4.2	競技順リスト	18
4.3	フラッシュ	19
4.4	オブザベーション	19
4.5	安全性と確保	19
4.6	クライミング中の規定	20
4.7	テクニカル・インシデント	22
4.8	成績判定	23
4.9	ラウンド終了後の順位	24
4.10	各ラウンドの定員	25
4.11	アテンプトの終了	25
4.12	ビデオ記録の使用	26

5.	ボルダリング	27
5.1	概説	27
5.2	競技順リスト	28
5.3	オブザベーション	29
5.4	競技中	29
5.5	アテンプトの開始と終了	30
5.6	テクニカル・インシデント	31
5.7	各ラウンド後の順位	31
5.8	各ラウンドの定員	32
5.9	抗議手続きとビデオ記録の使用	32
6.	スピード	33
6.1	概説	33
6.2	安全性	33
6.3	ルート・タイムの計時	34
6.4	ルートの完登	35
6.5	リザルトの提示	35
6.6	予選ラウンド クラシック・フォーマットの場合	35
6.7	予選ラウンド レコード・フォーマットの場合	35
6.8	決勝ラウンド クラシック・フォーマットの場合	36
6.9	各ラウンド後の順位付け	38
6.10	競技順と順位 - レコード・フォーマット、4レーン	39
6.11	競技順および順位付け レコード・フォーマット 他のレーン数の場合	41
6.12	デモンストレーションおよびオブザベーション	41
6.13	クライミングの手順	42
6.14	テクニカル・インシデント	42
6.15	スピード世界記録	43
7.	チーム・スピード	44
7.1	概説	44
7.2	競技順と順位付け	44
7.3	デモンストレーションとオブザベーション	47
7.4	競技中	47
7.5	テクニカル・インシデント	48
8.	ワールドカップ・シリーズ	49
8.1	イントロダクション	49
8.2	ワールドカップ・ランキング	49
8.3	選手の登録	50
8.4	賞金	51
9.	世界選手権規則	52
9.1	イントロダクション	52
9.2	選手登録	52
10.	世界ユース選手権規則	53
10.1	イントロダクション	53
10.2	年齢別グループ	53
10.3	形式	53
10.4	加盟連盟/協会による選手登録	54
11.	競技中における罰則規定	55
11.1	イントロダクション	55

11.2	選手	55
11.3	選手団役員	57
11.4	その他の人々	57
12.	抗議	58
12.1	概説	58
12.2	抗議審査団	58
12.3	選手のアテンプトに関するジャッジの決定に対する抗議	58
12.4	公表されたリザルトへの抗議	58
12.5	抗議後の抗議	59
12.6	安全性に関する問題	59
12.7	懲罰委員会への申告	59
12.8	懲罰委員会	59
12.9	供託金	59
13.	アンチ・ドーピング	60
13.1	採用	60
13.2	適用	60
13.3	IFSC 内部の管轄部門	60
13.4	違反と制裁	60
	資料1：IFSC WORLD RANKING (WR) について	61
	資料2：リード競技でのホールドの番号付けについて	63

1. 国際スポーツクライミング連盟 (IFSC)

1.1 イントロダクション

1.1.1 国際スポーツクライミング連盟 (IFSC)²⁾はクライミングの競技分野を統括し、その発展に努める³⁾国際連盟 (IF) である。

IFSC は競技クライミングに関する全てのことがらに対する、最高権限を有する。

IFSC は IOC から承認されており、IOC 承認国際競技団体連合 (ARISF⁴⁾)、国際競技団体連合 (GAISF⁵⁾) 及び国際ワールドゲームズ協会 (IWGA⁶⁾) に加盟している。

1.1.2 IFSC は後のセクション 1.3 で規定する、全ての国際クライミング競技会に関する権限を持ち、以下のことをおこなう。

- a) 技術面その他において、この競技を統括する。
- b) 加盟国からの、国際競技会開催申請の受付。
- c) これらの申請を審査し、それがこの競技に寄与するもので、競技会に関する IFSC の規則に則ったものであると評価された場合、それを認可する⁷⁾。

全ての IFSC が公認する競技会は、競技会に関する IFSC の規定⁸⁾に厳密に従ってのみ組織され開催⁹⁾されねばならない。

1.1.3 IFSC の組織構成は、その「規則」と「内規」¹⁰⁾に詳述する。

1.2 事務的作業

1.2.1 国際クライミング競技会の開催に関して、IFSC の担当事務¹¹⁾は以下の通りである。

- a) IFSC が公認する競技会開催申請の受領。
- b) 全ての問い合わせへの対応¹²⁾ 一般的な事柄と公認競技会に関することの双方。
- c) IFSC が公認する競技会についての全ての情報の発信。
- d) 特に、各競技会に係る加盟山岳連盟/協会への競技会に関する全ての情報と、申込書式の発行。選手への競技会への登録を希望するあらゆる加盟山岳連盟/協会は、その申し込み書をコピーして、IFSC と競技会を主催する山岳連盟/協会に送付しなければならない。全ての選手とその所属する選手団の役員は指定された締め切り日までに、その属する加盟山岳連盟/協会によって登録されねばならない。
- e) IFSC ルール、規定、その他の注意事項を作成する。これらの文書に対しては修正版が公表されるが、それは原文書に併せて、かつ優先的に参照されるものである。各修正版には発効する日付が記載されねばならない。

²⁾2006 年には「ICC」が「UIAA CLIMBING」に変わった……と思ったのも束の間、2007 年には UIAA から競技部門が独立し IFSC を名乗ることになった。裏には様々な事情があるようだ。純粋な競技団体となることでより動きやすくなるということであれば良いのだが。

³⁾原文は「responsible for the administration and development of all aspect of the sport of all international aspect of the sport of climbing」。

⁴⁾the Association of IOC Recognised Sports Federation

⁵⁾the General Association of International Sports Federation

⁶⁾the International World Games Federation

⁷⁾原文は「Approving those applications that it deems in the interest of the sport and which it assesses as being in accordance with the IFSC rules and regulations governing such competitions.」。

⁸⁾原文は「rules and regulations」。あえて区別するならば、「ルールと規定」だろうか。だが日本語で考える時、この中で言及されている範囲であれば、両者を区別する必要性は薄いと思う。

⁹⁾原文は「organise and undertaken」。

¹⁰⁾「Statutes and Bylaws」。ともに IFSC のサイトからダウンロード可能 (http://www.ifsc-climbing.org/?page_name=statutes-guidelines)。

¹¹⁾原文は「executive task」。

¹²⁾「dealing with all inquiries」

- f) 全ての競技会の成績、ワールドカップ・ランキングと世界ランキング (WR)¹³⁾、総合ランキング、国別チームランキング、大陸別ユースシリーズランキング¹⁴⁾、その他の公式情報の公式な発表。
- g) 公認競技会における、全ての IFSC 役員の指名。

1.3 競技会

1.3.1 IFSC の加盟団体あるいは特別に IFSC が認めた組織だけが、IFSC が公認する競技会の開催を申請することができる。

1.3.2 IFSC の加盟団体だけが、その選手のこれらの競技会への参加申請をおこなう資格を有する。

1.3.3 国際クライミング競技会の中で IFSC の公認が必要なものは以下の通り。

- a) ワールドカップ・シリーズ (The World Cup series)
- b) 世界選手権 (The World Championship)
- c) 世界ユース選手権 (World Youth Championships)

1.4 IFSC 競技会役員

1.4.1 IFSC は IFSC が公認する各競技会において、以下の役員を公式に指名することができる。

a) ジュリー・プレジデント¹⁵⁾

ジュリー・プレジデントは競技エリア アイソレーション・ゾーン、コール・ゾーンと競技ゾーン 後者はクライミングウォールとその前方及び隣接するエリア、ビデオの記録と再生のために必要なエリアのように、競技会の安全性と公正な運営のために特に決められた他の全ての場所を含む について全面的な権限を有する。¹⁶⁾この権限は、報道関係者や主催者の指名したその他の人々全ての活動にも適用される。ジュリー・プレジデントの全面的な権限は、競技の進行に関する全ての面に及ぶ。ジュリー・プレジデントは IFSC 役員の全てのミーティング、さらに競技会主催者、選手団役員、選手の出席する全ての運営会議やテクニカル・ミーティングを主宰する。しかしながら、ジュリー・プレジデントは通常、ジャッジの任にあたることはないが、どのような場合であれ必要と判断されれば、一般に IFSC ジャッジ、あるいはその他のジャッジが担当する判定業務を遂行することを選択してよい。¹⁷⁾ジュリー・プレジデントは競技会の開始に先立ち、審判を務める全てのナショナル・ジャッジに、IFSC の規則の適用について説明する責任を持つ。ジュリー・プレジデントは競技会と、養成過程¹⁸⁾の最終段階にあるアスピラン¹⁹⁾・ジャッジについての詳細な報告の提出を要求される。

b) IFSC ジャッジ

IFSC ジャッジは IFSC が指名したインターナショナル・ジャッジ²⁰⁾で、ジュリー・プレジデントを補佐して、競技会の判定の全ての面を引き受ける。IFSC はまた、IFSC ジャッジの補助を行う養成課程の最終的な実習段階にあるアスピラン・ジャッジを指名することができる。IFSC ジャッジは、競技順及び成績の一覧の発表の告知²¹⁾、抗議、及び競技会のプログラムに関するあらゆる重大な変更の責任を負う。

¹³⁾”the World Ranking”. P.61 参照。

¹⁴⁾これは削除忘れと思われる。あるいは開催は各大陸の協会がおこない、ランキングの管理は IFSC がおこなう、と言う可能性

¹⁵⁾”Jury President”. Jury は「審判団」と訳すしかないだろう。従って「審判長」が日本語としてはふさわしい。

¹⁶⁾”call zone”は、2005 年に登場した新語。従来のトランジットゾーンにあたるようだ。直訳すれば「呼び出しゾーン」になるのだろう。競技ゾーンは壁の前の、選手、役員以外の立ち入り認められない場所を指す。

¹⁷⁾原文は”Although the Jury President does not normally have a judging role, he/she may at any time elect to carry out any judging task generally assigned to the UIAA Climbing Judge or other judges should he/she deem that necessary.”。

¹⁸⁾”international training programme”。

¹⁹⁾”aspirant”、見習い。

²⁰⁾”IFSC Climbing Judge”は競技会における役割 (役職) ”International Judge”は IFSC の公認する資格。

²¹⁾原文は”announcing the publication of starting and result lists”。

IFSC ジャッジは大会主催者または加盟連盟/協会の指名したナショナル・ジャッジ (ルート・ジャッジまたはボルダー・ジャッジ²²⁾) の補佐を受ける。ナショナル・ジャッジの主な役割は、ルートとボルダーにおける選手の成績を、それぞれ判定することである。彼らは専門的なルール²³⁾と、IFSC が公認する競技会に関する諸規定²⁴⁾を熟知し、IFSC ジャッジの指示の元でその任を果たすものとする。

c) チーフ・ルートセッター²⁵⁾

チーフ・ルートセッターは、主催者の指名したルートセッター・チームのメンバーと、競技会に先立ち、ルート設定とメンテナンスに関する全ての問題 それぞれのルートやボルダー・ボルダーのデザイン、ホールドとプロテクションその他の器具類を IFSC の規定に照らして設置すること、ルート及びボルダーの補修とクリーニング、ウォームアップ設備のデザイン、設置、メンテナンスを含めて を計画し調整するために打ち合わせをしなければならない。また、競技会のそれぞれのルートやボルダーの技術的標準と安全性を確認し、競技エリアにおける技術的問題について、ジュリー・プレジデントに助言をおこない、リード・ルートにおけるルート図²⁶⁾の作成を補助し、ビデオカメラの設置場所の決定について、ジャッジに助言をおこなう。チーフ・ルートセッターは競技会と、養成過程の最終段階にあるアスピラン・チーフ・ルートセッターについての詳細な報告の提出を要求される。

d) IFSC デリゲイト²⁷⁾

IFSC デリゲイトは、競技会開催中の IFSC の組織に関係したことがらを担当する。競技会主催者の用意した設備 facilities とサービス (選手その他の受付登録、成績判定とリザルト・サービス、医療、報道その他の設備) が IFSC 規則に則っているかどうかを確認する権限を持つ。IFSC デリゲイトは抗議審査団²⁸⁾の構成員であり、競技会主催者との全ての会議に出席し、競技会の審判団の会議に、アドバイザーの立場で参加する権利を持つ。ジュリー・プレジデントが不在の場合また、競技会場に未到着の場合、IFSC デリゲイトは競技エリア内における競技運営についてジュリー・プレジデントの代理を務める。特別な場合において IFSC デリゲイトは、例えば競技会の形式を変更するような緊急措置の適用を決定する権限を有する。これらの措置は、IFSC により別途定められる。また、IFSC デリゲイトは競技会に関する詳細な報告を提出しなければならない。

IFSC デリゲイトが指名されていない大会、また IFSC デリゲイトが欠席している場合にはジュリー・プレジデントが IFSC デリゲイトの職務を代行する。²⁹⁾

ジュリー・プレジデント、IFSC ジャッジ、チーフ・ルートセッター、IFSC デリゲイトをもって審判団³⁰⁾は構成される。

²²⁾言うまでもなく、前者はリード、後者はボルダー。

²³⁾technical rules

²⁴⁾regulations governing competitions aproved by IFSC

²⁵⁾04 年まで、ここは”Forerunnner”だった。フォアランナーの役目は、実際にルート設定をおこなうことではなく、使用するルートの適否を判断することにある。両者は、わが国では同一視されているが、もともと別物である。ただ事実上、フォアランナーがチーフ・ルートセッターを兼ねることがほとんど(全て?)であり、実態に合わせたと言うことだろう。

²⁶⁾06 年まではルート図を TOPO と表記していたが、the route sketch に変更された。よりわかりやすい表現ということだろうか。

²⁷⁾”Delegate”。カタカナ語を避けるなら「IFSC 代理」か「IFSC 代表」だろうが、今一つしっくりこないでカタカナ語とする。

²⁸⁾P.58 参照。

²⁹⁾2010 年の改訂で追加。もともと、デリゲイトがジュリー・プレジデントの代行をおこなう規定はあったが、逆はなかった。スタッフ減によるコストダウンの意図もあるのかもしれないが、抗議の処理がジュリー・プレジデント 1 人の責任になってしまうのは、問題かも知れない(13.2.1 参照)。

³⁰⁾Competition Jury

2. 加盟団体

2.1 イントロダクション

2.1.1 IFSCはその加盟連盟/協会が、その国内での活動を自由におこなう権利¹⁾を全面的に尊重する。

2.2 加盟連盟/協会と選手団の義務

2.2.1 以下は、加盟連盟/協会、全ての競技会主催者、そして、直接 IFSC のもとで従事するか、加盟連盟/協会、あるいは競技会主催者に属するかを問わず、IFSC 公認競技会に関与する者の遵守すべき義務である。²⁾

- a) 国際クライミング競技会の普及、展開、統括は IFSC のみによる独占的管理のもとにあることを無条件に容認すること³⁾。
- b) IFSC の書面による認可なしに、IFSC 自身の契約と合致しない一切の金銭上、その他の契約を外部団体（テレビ局、競技会スポンサー等）との間に締結してはならない⁴⁾。
- c) この競技にとって最善と思われない決定に関しては、常に IFSC の助言と同意を求めること。⁵⁾

2.2.2 以下は、IFSC 加盟の協会/連盟の義務である。

- a) その国内においてこの競技を統括し、普及し、発展させる。オリンピック憲章、IOC 医事規定、国際クライミング競技に関する IFSC のルールと規則を固く支持する。
- b) 競技規則を理解し遵守する。そしてすぐれたスポーツマンシップを普及させ、選手と役員がそれを守るように努める。
- c) その選手と役員による、麻薬その他禁止された物質の使用に対して、絶え間ない積極的な対策をおこなう。要求のある時は、全ての規則とガイドラインに従い、競技外検査を保証しなければならない。
- d) 選手の健康や成長に悪影響のある方法や練習を禁止する。
- e) その選手や選手団役員に有利になるようにルールと規則を操作することへの誘惑に対し断固とした態度をとる。
- f) 競技中とそれ以外を問わず、その選手と役員が、他の選手と役員その他の競技に関わり合う人々に対し、常に大きな尊敬の念を持って接する。

2.3 選手団派遣資格

2.3.1 IFSC の各加盟連盟/協会は以下の条件のもとで、男子、女子それぞれの選手団を派遣する資格を有する。

- a) 選手の指定と登録に関する規則に従う。
- b) IFSC に対する金銭的負担に関する規定の不履行がない。
- c) 決議事項や、IFSC の懲罰手続きに基づいた決定の結果として起こる要求された行動の不履行がない。
- d) 登録されたすべての選手が、国際競技ライセンスを保持しているか、あるいは IFSC がそのライセンス申請書を受理している。

¹⁾原文は"autonomy"。「自治(権)」と訳したのでは日本語としてしっくり来ないため、「自由」とした。

²⁾"It is the obligation of member federations, all competition organisers and those associated with a competition approved by IFSC, whether working directly with the IFSC or in association with a member federation or with a competition organiser, to "

³⁾アメリカ合衆国がクライミング競技で独自の動きを見せているといわれている。それに対する牽制と理解すると、この強引な表現が納得できる。

⁴⁾原文は"Ensure that no financial or other agreement shall be entered into with an organisation (e.g. television, competition sponsors, etc.), which may conflict with the IFSC's own agreements, without written approval of the IFSC;"。問題なのは"IFSC's own agreements"。これは、IFSC 自体がテレビ局、スポンサーなどと契約を結んでいることを表すものと思う。その契約先と利害関係のある相手の契約、または同じ契約先でも、内容的に異なる契約を禁じる規定と解釈した。

⁵⁾原文は" At all times seek the advice and agreement of the IFSC in respect to any decision which might conflict with the best interest of the sport"。

2.3.2 一国に一団体を越える IFSC 加盟団体が存在する場合、(全ての)加盟団体で、その国に認められた定員内で男女選手それぞれ一つずつの代表選手団のみを派遣する権利を有する。

2.4 選手団の定員

2.4.1 選手団の定員は、ワールドカップ、世界選手権など、競技会の種類によって別に定める。

2.4.2 加盟連盟/協会は最大 5 名までの、競技会場への自由な入場が認められる選手団役員を登録することが許される。これらの役員は登録書式に氏名を記載の上、以下の役割を明らかにすること。

- a) チーム・マネージャー 1 名
- b) コーチ 2 名
- c) 医療担当者または準医療担当者⁶⁾ 2 名

選手団役員は選手と同じ条件で、アイソレーション・ゾーンへの出入りが許される。

2.5 テクニカル・ミーティング

2.5.1 テクニカル・ミーティングは競技会初日の前日におこなわれる。テクニカル・ミーティングの目的は

- a) 大会日程の確認
- b) 予選の公式競技順の配布
- c) 競技会のルールの適用に関する特例的な情報の確認
- d) IFSC のウェブサイトから取得できない大会運営上の情報⁷⁾の伝達

2.6 選手の登録と確認

2.6.1 各加盟連盟/協会は IFSC が配布する大会インフォメーション文書で公表される選手登録の期限に注意すること。

2.6.2 大会に登録された各選手団は少なくとも、選手もしくはコーチ 1 名が直接大会会場に、主催者から好評された大会インフォメーション文書に指定された時刻(そうした時刻指定がない場合は、テクニカル・ミーティングが始まる 30 分前)までに、そのチームの登録選手の参加確認のために行かなければならない。テクニカル・ミーティング開始前までに参加確認をおこなわれなかった登録選手は、競技順リストから削除される。

2.6.3 特別な事情のある場合(航空会社のストライキ、交通渋滞……)は、ジューリ・プレジデントまたは IFSC デリゲイトに登録選手の参加確認の SMS⁸⁾を送ることができる。

2.6.4 競技会に不参加となった登録選手の登録料は、テクニカル・ミーティングまでに IFSC へ通知があった場合を除き、加盟連盟/協会に課せられるものとする。

2.7 国際資格

2.7.1 各加盟連盟/協会は IFSC 公認競技会に参加登録する選手が、有効な⁹⁾IFSC 国際競技ライセンスを保有する、あるいはそうしたライセンスの申請が IFSC に受理されていることを保証しなければならない。加盟連盟/協会だけが、IFSC 国際ライセンスの発行と更新の申請書式の提供を認められる。

⁶⁾原文は"qualified medical or para-medical personnel".

⁷⁾原文は"any logistics information"で、この logistics のニュアンスが訳せない

⁸⁾Short Message Service。国内の携帯キャリアの呼び名はドコモ mova = ショートメール。ドコモ FOMA、ソフトバンク、イーモバイル = ショートメッセージサービス。au = C メール。ウィルコム = ライトメール、P メール。

⁹⁾原文は"current".

2.7.2 国際ライセンス取得のため、各連盟/協会がそれぞれの選手について提出すべきものは¹⁰⁾

a) 完全な申請書式

b) 関連書類受領後の¹¹⁾、新ライセンスの発行のための IFSC の指定する手数料

である。

2.7.3 各ライセンスは、1月1日から12月31日までの1年間有効である。各連盟/協会はその選手の代理として、毎年、更新のために公式申請書式を作成し IFSC に送付することができる。

2.7.4 各選手は、そのパスポートを取得した国の連盟/協会に所属していなければならない。二つの国籍を持つ選手の場合、IFSC 公認競技会において所属する¹²⁾連盟/協会を選ばなければならない。シーズン中の所属変更は認められない。¹³⁾

2.8 手数料

2.8.1 すべての手数料（加盟費、競技会参加費、国際ライセンス料、抗議の際の供託金など）と、全てのその他の費用は、加盟連盟/協会の負担となる。

2.8.2 加盟連盟/協会は IFSC に、請求された金額を請求書の日付から 90 日以内に支払わなければならない。これを守らない場合、下の 2.8.4. の規定が適用される。

2.8.3 抗議の際の供託金は、抗議をおこなった際に IFSC デリゲイト¹⁴⁾に直接支払われる。抗議は、供託金を受領するまで認められない。

2.8.4 手数料支払いに関する IFSC 規則を守らない連盟/協会は、「規則と付則」に従ってその加盟は保留され、最終的には除名される。

2.8.5 手数料の額は、IFSC が毎年決定し公表する。

¹⁰⁾原文は”In order to obtain an international licence, each federation must submit for each competitor”。わかるようでわからない。

¹¹⁾原文は on receipt of the relevant invoice

¹²⁾原文は”represent”。その国を”代表して”出場するということだからだろう。

¹³⁾2007 年までは、両国及び IFSC の承認で変更が可能だった。

¹⁴⁾07 年にジュリー・プレジデントから IFSC デリゲイトに変更。

3. 一般規則

3.1 競技種目、カテゴリー、ルートのタイプ

3.1.1 国際競技クライミングは以下の種目¹⁾がある。

- a) リード²⁾：下方から確保された選手が、ルートをリードで各クィックドロウに順番にクリップしながら登り、ルートのライン³⁾に沿った最長到達距離で選手の順位が決定される。
- b) ボルダリング：複数個の別個の短いテクニカルなルート（ボルダー）⁴⁾を、ロープは使用せず、安全のための着地マットを使って登る。選手が達成した得点の合計とアテンプト⁵⁾数の合計で順位が決定される。
- c) スピード：下方から⁶⁾確保された選手が、ルートをトップロープで登り、完登した選手の所要時間で選手の順位が決定される。

3.1.2 国際競技会は、リード、ボルダリング、スピードの独立した大会から構成される。個々の競技会が、全ての種目を含んでいなくともよい。

3.1.3 各国際競技会は、男子、女子の各カテゴリーからなる。

3.1.4 各国際競技会での、各ルート／ボルダーのアテンプトの方法は以下のとおり

- a) オンサイト：規定に基づくルートのオブザベーションの後、選手は自身の競技前は、他の選手の競技を見ることができない。⁷⁾
- b) フラッシュ：フォアランナー⁸⁾によるルート／ボルダーのデモンストレーション、と他の選手の競技の一方または両方を⁹⁾見ることができる。¹⁰⁾

3.1.5 国際競技会のルート／ボルダーでの競技は、特に指定のない限りオンサイトで行われる。

3.2 クライミングウォール

3.2.1 以下の例外を除き、クライミングウォールの表面全てを使用して登ることが認められる。¹¹⁾

- a) ボルト・オン・ホールドの設置用にクライミングウォールにあけられた穴を、選手は手で使用してはならない。
- b) 壁の両側と上端の縁¹²⁾は登るために使用してはならない。

¹⁾原文は disciplines.

²⁾2005 年の改訂で、Difficulty から Lead になった。他種目の名称に比べ、Difficulty はわかりにくいので、当然と言えば言えるだろう。

³⁾これを"axis"と呼ぶ。一般的には大ざっぱに、ルート中の各クィックドロウを結んだラインと考えて良い。

⁴⁾原文は"a number of individual,short, technical route(boulders)". 06 年までは「プロブレム」としていたが、2007 年に「ボルダー」に変わった。

⁵⁾"attempt". 「選手がルートを登ろうと試みる」というのが直訳。以前コンペで、選手が取り付くことをアナウンサーが「アタック開始」としていたことがあるが、その「アタック」はまさにこの"attempt"である。「競技」あるいは「試技」と訳す以外にないが、それではこの言葉のニュアンスがとらえきれないので、「アテンプト」と表記する場合がある。

⁶⁾原文 (with the competitor belayed from below.) のまま。リードもトップロープも、確保は below からと言うのはよくわからない。above の誤り？フォローでなければ全て below ?

⁷⁾原文は"competitors are not allowed to view other competitors on the route/boulder". 「ルート上にいる他の選手を見ることが許されない」という婉曲な言い方。

⁸⁾選手の競技に先立って登って見せるから先に (fore) 走る者 (runner) と呼ぶらしい。

⁹⁾ここは"and/or".

¹⁰⁾この形式のフラッシュは従来、国際コースの予選でおこなわれてきた。参加人数が膨大なため、現実問題としてアイソレーションができないからである。そして 2009 年からは通常のワールドカップでもこの形式で実施されている。

会場に恵まれない、と言うより、壁はあっても大きなアイソレーションの確保できない我が国でも、参加者数の多い大会ではフラッシュは有効であるが、時間もそれなりにかかるというデメリットもある。

¹¹⁾クライマーはセッターの意志を無視して、壁の表面にあるものは (ハンガーとクィックドロウを除き) どのように利用してもかまわない。ベニヤ壁ではあまり関係ない規定。FRP パネルでは予期せぬホールドをクライマーが使って登ってしまうのは、お約束である。

¹²⁾原文は"edge". この"edge"と、次に出てくる"demarcation"とは別の概念である。"demarcation"が「3.2.1」の規定に関わらず、壁

3.2.2 ホールド、壁の一部、はりぼて¹³⁾を、登るために使用することを認めない必要がある場合、限定部分¹⁴⁾を、連続的¹⁵⁾、かつ明確に見分けられるように黒でマークしなければならない。

もし、上記以外の限定が設定される場合は、それは全選手に告知されねばならない。¹⁶⁾

3.3 安全性

3.3.1 競技会主催者は、競技エリア、競技会場の公共部分と、競技の進行に関わる全ての活動についてのあらゆる安全の確保について責任を負わなければならない。

3.3.2 ジュリー・プレジデントは、競技エリアについての安全性について何らかの疑問がある時、チーフ・ルートセッターとの協議のもと、そのいかなる段階にせよ、競技の開始や継続を許可しないことも含めた決定をおこなう、全面的な権限を有する。役員であれ、それ以外であれ、ジュリー・プレジデントによって安全確保の妨げになると見なされた、あるいは妨げになることが予想されると判断された者は全て、即座にその役目を解かれ、また競技エリアから退去させられる。

3.3.3 主催者から指名されるプレイヤーは、競技会におけるビレイの方法について習熟していなければならない。IFSC ジャッジは、どのプレイヤーでも、競技会中いつでも、その交替を主催者に指示する権限を有する。交替させられた場合、そのプレイヤーはその競技会のどの選手のビレイも担当することを認められない。

3.3.4 各ルート、ボルダーは、選手の墜落によってその選手が負傷したり、あるいは他の選手や第三者を傷つけたりその妨げとなることを避けるように設計/設定されねばならない。

3.3.5 ジュリー・プレジデント、IFSC ジャッジ、チーフ・ルートセッターは競技会の各ラウンドに先立ち安全確保の基準を満たしていることを確認するために、各ルート、ボルダーを点検しなければならない。特に、IFSC ジャッジとチーフ・ルートセッターは、全ての安全のための用具と進行手順が、IFSC 規格 (EN 規格、または相当する国際規格)¹⁷⁾に則っていることを確認しなければならない。

3.3.6 競技会で主催者及び選手に使用される全ての器具は IFSC 規格 (EN 規格、または相当する国際規格) を満たしているか、さもなければ、IFSC または、例外的な状況でジュリー・プレジデントが IFSC の代表としての権限を持って指定したものでなければならない。一般的なものとして、リードとスピードでは、主催者が用意したシングル・ロープを使用しなければならない。ロープ交換の回数は IFSC ジャッジが決定する。

3.3.7 ルート上の用具について、以下の安全対策が留意されねばならない。

の中に設けられた使用禁止の部分を目指すのに対し、壁の縁はどんな場合でも、絶対的にア・プリオリにアンタッチャブルである。だから、"demarcation" は明確にマーキングすることが求められるのに対し「縁」は特に壁が狭い場合などを除き、マーキングしないことが多い。

またそれがパネルの「縁」でなくコーナー（カンテ）で向こう側に壁が続いている場合は別で、その向こう側の壁も含め、"demarcation" 設定がされていない限り、自由に使うことができる。選手はオブザベーションの時に良く確認しておくこと。カンテの裏にホールドがあるかもしれない!!

それから、bottom edge と書いていない以上、下の縁は規制されていない (!)。FRP パネルの壁で、下の縁と床面との間に隙間がある場合、そこにフックしたりすることは OK ということになるのだが、.....

¹³⁾原文は"feature"

¹⁴⁾原文は"demarcation"。これは従来のバウンダリに替るもの。06年の改定でバウンダリに替わってデマケーションという言葉が使われるようになり、従来のバウンダリと同じように一切触れてはならない限定を赤で、触れても良いが使用してはならない部分を黒でマーキングすべし、と言うことになった。そしてさらに07年に、完全な使用制限をする赤のデマケーションが規定上は廃止された。国内では「限定」が用語としても定着しているので「限定」もしくは「使用限定」と訳すことにする。

¹⁵⁾破線、点線状のラインは不可。

¹⁶⁾この「上記以外の限定」は、特定の明瞭に判別できる張りぼてについては、マーキングはないがデマケーションとする、というようなケースが考えられるかもしれない。また、06年までの赤のデマケーションが必要な場合は、この文言がカバーしていると考えられる。また通常の黒のデマケーションの設定については、あえて選手に説明する必要はない。その限定を守るのは選手の自己責任と言うことである。

¹⁷⁾2007年まではここに"UIAA standards"が含まれていたが、2008年にこの表現に変わった。実態として"IFSC standard"が存在しているようには思えないし、良く読むとカッコ内の「EN規格、あるいは相当する国際規格」(原文は"EN standards or international equivalent")を満たすことが「IFSC規格」である、という風に解釈できる。また「相当する国際規格」には当然、UIAA規格が含まれるだろう。単にUIAAという文言を排除したかっただけのことと思われる。

- a) 競技会中に使用される各確保支点（終了点も含め）は、認可を受け適切に閉じられた、8mmまたは10mmのマイロン・ラピッド¹⁸⁾に、もう一方の端には選手がロープを通すカラビナをつけた、連結されていない¹⁹⁾ミシン縫いのスリングを接続したクイックドロースリングを備えていなければならない。

カラビナへの横向きの負荷²⁰⁾の可能性は最小限でなければならない。

- b) 通常のクイックドロースリングより長いものが必要な場合は、少なくとも同等の強度を持つ、1本のテープでできた²¹⁾（ミシン縫いの）テープスリングを、通常の短いクイックドロースリングに替えて使用しなければならない。輪になったスリングは粘着テープでまとめておくべきである²²⁾。どのような場合でも、通常の長さのクイックドロースリングを（マイロン・ラピッドや安全環の有無を問わずカラビナで）連結したものを使用してはならない。また、ロープやテープを結んだスリングは使用を認められない。

3.3.8 ジュリー・プレジデントは、適切な資格のある医師（競技会専属医師²³⁾）が、選手と競技エリアやアイソレーション・ゾーン内で働く役員の事故や負傷に対して速やかに対応するために待機²⁴⁾していることを確認しなければならない。

競技会専属医師はアイソレーションまたはウォーミングアップ用ウォールのオープン予定時刻から、その競技会のすべてのラウンドの最後の選手の競技が終わるまで、駐在しなければならない。

3.3.9 負傷、その他の病気など、どのような理由であれ、選手が競技をおこなうにふさわしい状況にないと信ずるに足る理由がある場合、ジュリー・プレジデントは以下の身体テストの後、選手の検査を競技会専属医師に依頼する権限を有する。²⁵⁾

- a) 足:選手が連続して5回、それぞれの足で片足跳びをおこなう。

- b) 腕:選手が連続して5回、両手で腕立て伏せをおこなう。

この検査の結果に基づき、競技会専属医師が当該選手は競技を続けられる状態にないと判断する時、ジュリー・プレジデントは当該選手の競技参加を停止させねばならない。その後、当該選手が回復したと言う確証があれば、彼/彼女は所定の再検査を要求できる。検査の結果に従い、競技会専属医師は選手が競技に適した状態にあると判断すれば、ジュリー・プレジデントはその選手の競技を許可することができる。

3.3.10 いかなる場合も、選手からの要求によって、特別な措置（たとえばボルダーの上からはしごで地面に降りる、など）を用意することがあってはならない。

3.4 競技順リスト

3.4.1 競技会予選ラウンドの参加選手名簿は、少なくとも競技会に先立つ4日間IFSCのウェブサイト上で公表され、オンライン登録の進行に従い更新されねばならない。

予選の公式競技順リストは競技会に先だって作成され、テクニカル・ミーティングで配布されねばならない。

¹⁸⁾ "Maillon rapide"はフランス語。鎖やワイヤーを連結する一般的な金物の一つである。国内でも、ほぼ同形状の国産品がリング・キャッチの名称で流通している。ただしヨーロッパのENあるいはUIAA準拠のものは、安全強度(SWL)表示が国産に比べ非常に高い。材質、形状から考えるとその差は異常であるが、両者が全く別物であるかのような言説は、必ずしも正しくない。これは必ずしも実際の強度の差ではなく、規格、保証上の問題である可能性があるからだ。国内品でもきちんとした製造管理と検査を経れば、今流通しているものと同等品が、ヨーロッパ製並のSWL表示を得られるものと思われる。

¹⁹⁾ 原文は"continuous"

²⁰⁾ 原文は"cross loading the karabiner"。当初はZクリップかと思っていたが、どうもおかしいので改めて辞書を調べると、crossには直交、縦に対する横という意味合いがある。そうすると、カラビナの長軸と直交する方向の荷重と解釈するのが妥当だろう。要するにクイックドロースリング末端のカラビナが回転し、中途半端な引っかかった状態である。

仮に180度回転してしまえば、危険性はないがクリップはやりずらく、テクニカル・インシデントになる。カラビナは固定のためのパーツ（ペトルのストリングなど）を用いるなり、粘着テープでスリングを絞り込むようにするなりして固定してしまうことをお勧めする。

²¹⁾ 原文は"continuous"。後半にある「連結したものに」に対する表現だろうと思う。

²²⁾ リング状のスリングはそのままだと、選手が足を突っ込む危険性がある。

²³⁾ the Competition Doctor

²⁴⁾ 原文は"are in attendance"

²⁵⁾ 原文は"the Jury President has the authority to request a check-up of the competitor by the Competition Doctor who will proceed with the following physical test:" 何故ここでproceedを使うのか、よく分からない。単に「医師にテストを行わせる」ということかもしれない。

競技会予選当日の、3.5.1の規定にもとづく選手の参加確認の受付終了後、欠席選手の氏名は公式競技順位リストから削除される。選手の競技順及びグループ分け（必要がある場合）は変更しない²⁶⁾。

公式競技順位リストは、競技会の公式の掲示板とアイソレーション・ゾーンに掲示され、競技会の審判団のメンバー、チーム・マネージャー、競技会の広報担当、メディア関係者の代表に公開されねばならない。²⁷⁾

3.4.2 競技会の以降の各ラウンドの競技順位表は、競技会の先立つラウンドの公式リザルトが発表され、抗議に対する処理が終了した後、前項と同じ形で公表されねばならない。さらに加えて、例えばチーム・マネージャーと選手の宿泊する主なホテルなど適切なその他の掲示板でも発表されねばならない。

3.4.3 各競技順位リストには以下の内容が含まれねばならない。

- a) 競技順
- b) 各選手の氏名と IOC の国別コード
- c) 各選手の世界ランキング（保有する選手について）
- d) アイソレーション・ゾーンのオープンとクローズの時刻（必要な場合）
- e) オブザベーションまたはデモンストレーション及び競技の開始時刻（必要な場合）
- f) IFSC または ジュリー・プレジデントの認めたその他の事項。

3.4.4 各種目の競技順の作成方法は、リード競技会は 4.2、ボルダリング競技会は 5.2、スピード競技会は 6.6、6.7、6.10 に定める。

3.5 受付とアイソレーション

3.5.1 競技会のラウンドに参加資格のある選手はジュリー・プレジデントが定め、大会主催者が公表した時刻までに受付場所で受付をすませ²⁸⁾、アイソレーション・ゾーンに入らねばならない。

3.5.2 以下の者だけがアイソレーション・ゾーンに立ち入ることが認められる。

- a) IFSC 役員
- b) 主催者役員
- c) 当該ラウンドに参加資格のある選手。
- d) 公認された、選手団の役員。
- e) ジュリー・プレジデントが特に認めた者。この場合、これらの者はアイソレーションにとどまる間を通して、アイソレーション・ゾーンの守秘性を保ち、不要な混乱や選手に対する妨害を防ぐために、競技会役員の付き添いと監視のもとにおかれる。

3.5.3 動物はアイソレーション・ゾーンに入ることができない。ただしジュリー・プレジデントが認めた場合はこの限りではない。

²⁶⁾原文は”The order of the competitors and the allocation to starting groups(when relevant) shall remain unchanged”。当日の受付終了後に、グループ分けは変更しないということになる。当日の欠席は極めて少ないので、仮に欠席者が出てもグループ間の選手の能力差の大勢などには影響しないということだろうか。

²⁷⁾2007年までは”be handed out to”だったが、2008年に”be available to”に変わった。つまり必ずしも印刷して直接配布する必要はなく、何らかの形で入手できるようにしてあれば良いと考えることができる。

²⁸⁾register at the registration desk

3.5.4 喫煙は、特別に指定された喫煙所でのみ認められ、その場所は通常、アイソレーション・ゾーンへのドアの外側に隣接した場所とするが、最終待機所²⁹⁾や競技ゾーンの中または近接したところであってはならない。指定された喫煙エリア内にある時は、選手も選手以外の者もアイソレーション状態にあるものとする。

3.5.5 選手は競技ゾーンと最終待機所を含め、競技エリアにいる間を通じて³⁰⁾、アイソレーション状態にある。これは、ジュリー・プレジデントが特別に認めない限り、いかなる方法であれ、競技エリア外にいる者に情報を求めることがあってはならないことを意味する。この規則を遵守しなかった場合、ただちにその競技会において失格となる。

3.5.6 全ての選手も選手団役員も競技エリア内にある間に、ジュリー・プレジデントの許可した機器を除いて、いかなる電子通信機器も所持または使用することは認められない。³¹⁾

3.5.7 選手は、オブザベーション中、及びクライミング中にいかなるオーディオ機器も所持または使用することはできない。

3.6 オブザベーション

3.6.1 オンサイトによるラウンドあるいはアテンプトに先だて、競技会のそのラウンドに参加登録された選手は、競技会開始に先立ち、その間にルートやボルダーについて検討することが許されるオブザベーション期間³²⁾が認められる。このオブザベーションの具体的な規則は、リード、ボルダリング、スピード各競技それぞれのセクションで規定されている。

3.6.2 オブザベーション・エリア内では、全ての選手にはアイソレーション内における規定が適用される。オブザベーション期間の間は、選手団役員が選手に同行することは認められない。選手はオブザベーションを、定められたオブザベーション・エリア内でおこなわねばならない。クライミングウォールに登ることや、道具や家具類の上に立つことは許されない。選手はいかなる方法によっても、オブザベーション・エリア外の何人とも連絡をとってはならない。質問は、ジャッジに対してのみ認められる。

3.6.3 オブザベーションの間、選手はルート/ボルダーの観察に双眼鏡の使用と、手書きのスケッチと記録が許される。それ以外、いかなる観察や記録のための機器の使用も認められない。

3.6.4 選手は公式のオブザベーションの間に得たもの、そしてジュリー・プレジデントまたはジャッジから伝えられた以外の、ルートあるいはボルダーに関するいかなる情報も持つてはならない。

3.6.5 各選手はその自己責任において、ルートあるいはボルダー観察中の全ての指示に注意を払わねばならない。³³⁾

3.7 クライミングに先立つ準備

3.7.1 アイソレーション・ゾーンから、コール・ゾーンへの移動の指示を受けた後は、選手は競技会役員以外の何人とも行動をともにしてはならない。

²⁹⁾call zone

³⁰⁾この部分では、“zone”は“area”よりも限定された範囲を指しているが、3.6.2の“observation area”と言う表現を見ると、一貫性に欠く印象がある。

³¹⁾06年までここにはカメラやビデオカメラも具体的にあげられていたが、07年にこの表現に改められた。具体的に機器の類例をあげていてはきりがいいからだろう。同時にこの表現からすると、通信機能を持たない機器については、オブザベーション中に使用しない限り持ち込んでも問題はないと考えられる。別に日本の国体で問題が出たからこうなったわけではあるまいが.....

³²⁾observation period

³³⁾原文は“It is the sole responsibility of each competitor to fully inform him-/herself with respect to all instructions regarding the route or boulder.”回りくどい表現でいまち意味が不明だが、要するに説明が聞こえなかったなどと、後からクレームをつけるな、ということか。

3.7.2 コール・ゾーンに到着したら各選手は、競技種目に応じてクライミング・シューズをはき、ロープを認められた結び方で結ぶなど、アテンプトの最後の準備をしなければならない。

3.7.3 選手がルートまたはボルダーにおいてその競技を開始する前に、リード競技におけるロープの結び方を含め、使用する全てのクライミング用具について安全性に問題がないかどうか、また IFSC 規則に準拠しているかどうか、競技会役員から検査を受けなければならない。各選手は競技をおこなう間に身につける用具と衣服について全面的に責任があるとみなされねばならない。

3.7.4 各選手は指示を受けたらコール・ゾーンを離れ、競技ゾーンに入る用意をしなければならない。いかなる不法な遅延も「イエロー・カード」の対象となり、さらにそれ以上の遅延はセクション 11 に従い、ただちに失格となる。

3.8 選手団の服装と用具

3.8.1 選手が使用する全ての用具は IFSC が別途指定した場合を除き、IFSC 規格 (EN 規格、または相当する国際規格) に従ったものでなければならない。認められていない用具、結び方、衣服の使用、またはそれらの認められていない変更、広告に関する規則への不服従、いかなるものにせよ IFSC 規則と規定及び選手団の服装と用具に関する規定への違反があった場合、選手はセクション 11 に照らして制裁を受けねばならない。

3.8.2 選手は競技中、その国の選手団であることを表すために³⁴⁾ (1) 国旗を表す、あるいは国旗の色またはその国のスポーツカラーの、(2) 3 文字の IOC の国別コード³⁵⁾ の入った、選手団の公式の上衣³⁶⁾ を着用すること³⁷⁾。上衣は男女で異なっていてよい³⁸⁾。公式の競技順の入ったゼッケンは、競技会主催者から提供される。これには切断その他の変更を加えてはならず、上衣の背中側にはっきり見えるようにつけなければならない³⁹⁾。競技順ゼッケンの大きさは 18 × 24cm (横長) を越えてはならない。競技会主催者は、加えて選手のズボンの脚の部分に競技順ゼッケンをつけさせることができる。

3.8.3 ハーネスの装着はリード、スピード競技では必須である。各選手は任意で、チョーク・バッグ、クライミング・ヘルメット、衣類 (選手団上衣に加えて) を自由に使用することができる。全ての用具、服装は、以下の広告に関する規則に従ったものとする⁴⁰⁾。

- a) ヘッドウエア⁴¹⁾ : 製造者名またはロゴのみ。
- b) 選手団上衣 : スポンサーのラベル 合計で 300 平方センチ以内。
- c) ハーネス : 製造者の名称とロゴ、スポンサーのラベル 合計で 200 平方センチ以内。
- d) チョークバッグ : 製造者の名称とロゴ、スポンサーのラベル 合計で 200 平方センチ以内。
- e) 脚部 : 製造者の名称とロゴ、スポンサーのラベル 片足あたり合計で 300 平方センチ以内。
- f) 靴と靴下 : 製造者の名称とロゴのみ。

³⁴⁾原文は”Competitors representing their national teams shall, when climbing, wear a uniform……”。

³⁵⁾the three letter IOC country code

³⁶⁾uniform official team top

³⁷⁾この規定は「公式」とは言っても、そのデザインを申告するようなことはないで、ここに規定された要素を満たしていれば、全員が同じものを着ていれば大会ごとに違うものでもかまわないのだろうと思う。仮に選手が一人ならば、個人の T シャツに日の丸と”JPN”を入れればそれでよい、と考えられる。

³⁸⁾この一文は 07 年に追加。

³⁹⁾「ゼッケン」の原文は”bib”。後半の”(it) shall be displayed prominently on the back of the top”という記述から考えると、ベストのようなものではなく競技順をプリントした単なる布/紙で、裏面に粘着剤がついているか、安全ピンでつけるかするようなものと考えた方が良さそうだ。bib は胸あて、よだれかけの意味だが、日本語では身体の前側につけるものに限定したニュアンスがあるので、最も近いと思われる日本で通じる単語としてゼッケンと訳した。

⁴⁰⁾ここで「ラベル」とあるのは、後から付ける粘着式などのシール状のものを指すと思われる。

⁴¹⁾ヘルメット、バンダナ、鉢巻き … etc

各用具、服装における選手の所属する山岳連盟/協会や国を表す語句やロゴは、上の各項に規定されたサイズの上限に加えて認められる⁴²⁾。

刺青など選手の身体に直接表示されたいかなる広告用の名称、ロゴも、上記にそれぞれ規定された身体部分のサイズ上限に含めて計算するものとする。

これらの規則に従わなかった場合、選手はセクション 12 に照らして制裁を受けることになる。

3. 8. 4 可能であれば常に、そして特に表彰式においては、選手と選手団役員は、それぞれの⁴³⁾ユニフォームを着用のこと。

3. 8. 5 ルートまたはボルダーのアテンプト中に、選手はチョーク（粉末または液状）のみをその手につけることが認められる。⁴⁴⁾

3. 9 壁のメンテナンス

3. 9. 1 チーフ・ルートセッターは競技会の各ラウンドを通じて、IFSC ジャッジからの依頼に応じて壁の保守と修理を能率的かつ安全におこなう、熟練した保守チームを確保しなければならない。安全性は、常に最優先されねばならない。

3. 9. 2 IFSC ジャッジの指示があったら、チーフ・ルートセッターは直ちに補修作業をおこなわねばならない。補修終了後、チーフ・ルートセッターが点検し、ジュリー・プレジデントに対し補修の結果、以降の選手に有利または不利になることがない旨を告知しなければならない。競技会のそのラウンドを継続するか、中止し再スタート（再試合）するかのジュリー・プレジデントの決定は絶対で、この決定に関するいかなる抗議も受諾されない⁴⁵⁾。

3. 10 テクニカル・インシデント

3. 10. 1 テクニカル・インシデントは、その選手の行動によるものではない何らかの事象によって、ある選手に不利または不公平な結果が生じることと定義される。その発生後の処理の詳細は、後のリード、ボルダリング、スピード各種目それぞれのセクションに規定する。

3. 10. 2 一般に、テクニカル・インシデントは以下のように分けられる。

a) 選手がレジティメイト・ポジション⁴⁶⁾にないテクニカル・インシデント

選手がテクニカル・インシデントの可能性のある事態の結果として⁴⁷⁾、レジティメイト・ポジションをはずれた場合、選手のアテンプトは終了となる。IFSC ジャッジは、テクニカル・インシデントを宣言し、該当するテクニカル・インシデントに関する規則に照らして⁴⁸⁾、選手に再アテンプト⁴⁹⁾を認めるかどうかを、直ちに決定しなければならない。

b) 選手がレジティメイト・ポジションにあるテクニカル・インシデント

⁴²⁾従来は、広告類と所属関係のロゴなどを含めての面積規定だったが、2006 年から後者は別扱いになった。

⁴³⁾原文は”distinctive”だが、日本語に直すと奇抜な服装ととられかねない表現になる。

⁴⁴⁾2005 年までは、ボルダーの項でポフ（松ヤニ）の使用について言及があった。またジュリー・プレジデントが認めた場合、チョーク以外の使用を認める旨の記述があった。

⁴⁵⁾これは主に、ホールドが破損したときに使われていたものと全く同じホールドの予備がなかった場合のことと考えていただきたい。代替ホールドによって、交換前とムーブ、グレードに問題となる変化が生じてはならないわけだ。その判断はチーフ・ルートセッターがおこなうが、もし交換前との差が大きなものとならざるを得ない場合、そのラウンドを無効にして新たなルートでやり直すことになる。しかし国内大会ならともかく（いや、それだってとんでもない事態だ）、国際大会でのそれは、想像もしたくないことだ。従ってチーフ・ルートセッターも、よほどのことがない限り、OK を出すのだと思うのだが……。

⁴⁶⁾”legitimate position”。「正当な」あるいは「正常な」場所/状態ということで、選手がアテンプトを何の違反事項もなく継続している状態を指す。これも訳しにくいので、以後この表記とする。

⁴⁷⁾”due to a possible technical incident”

⁴⁸⁾”in accordance with the rules governing technical incidents for that particular discipline”

⁴⁹⁾”a subsequent attempt”

- (i) IFSC ジャッジが指摘したテクニカル・インシデント後に、選手がなおレジティメイト・ポジションにある場合、クライミングを続けるか、中止するか選ぶことができる。もし選手が登り続けることを選んだら、そのテクニカル・インシデントについての、それ以上の申告は受け入れられない。
- (ii) 選手がテクニカル・インシデントの可能性のある事態を指摘した後に、選手がなおレジティメイト・ポジションにある場合、選手はテクニカル・インシデントの性質を明らかにし、IFSC ジャッジの同意のもとにクライミングを続けるか、中止するか選ぶことができる。もし選手が登り続けることを選んだら、そのテクニカル・インシデントについての、それ以上の申告は受け入れられない。

3. 10. 3 テクニカル・インシデントの確認及び却下⁵⁰⁾は IFSC ジャッジが、必要に応じてチーフ・ルートセッターと協議の上でおこなう。

3. 11 判定用ビデオ記録の使用

3. 11. 1 全種目で各選手のアテンプトの、公式ビデオ記録が作成されねばならない⁵¹⁾。

3. 11. 2 リードでは 1 ルート当たり少なくとも 1 台、できれば 2 台のビデオカメラを、ボルダリング競技では全てのボルダリング、スピード競技では全ルートをカバーする最低 2 台の (固定された) ビデオカメラを使用しなければならない。クライミング競技会のビデオ記録の適切な経験を有する撮影者が、ナショナル・ジャッジによって補助されることが推奨される。ラウンドに先立ち、IFSC ジャッジ又はジュリー・プレジデントは撮影者に、適切な技術と手順を簡潔に説明しておかねばならない。⁵²⁾ ビデオ・カメラの位置はジュリー・プレジデントが、IFSC ジャッジとチーフ・ルートセッターとの協議の上で決定する。とりわけ、撮影者がその作業を妨げられることがないように、また何者もカメラの各ルートの視野を遮ることがないように注意を払わねばならない。

3. 11. 3 判定のために、いかなるできごとであれ再確認するための、ビデオ再生システムに接続されたモニター・テレビが用意されなければならない。再生モニターの設置場所は、ビデオの再生とその検討を、許可を得ていない者やジャッジ以外の者が見たり聞いたり、あるいは妨げたりすることない場所とし、また利用しやすいようジャッジ席に近くでなければならない。

3. 11. 4 公式ビデオ記録のみが判定に使用され、ビデオ記録を見ることができるのは、ジュリー・プレジデント、IFSC ジャッジ、ルート・ジャッジ、チーフ・ルートセッター、IFSC デリゲイトのみに限られる。⁵³⁾

3. 11. 5 ビデオ記録は競技会の各ラウンド終了時に、要求があればビデオ記録の複製がジュリー・プレジデントに渡さねばならない。⁵⁴⁾

3. 12 リザルト表

3. 12. 1 競技会の各ラウンド終了時に、各選手の順位と成績を記載した暫定リザルト表⁵⁵⁾をジャッジの作業をもとに作成しなければならない。この暫定リザルト表は、公式のリザルト表の確定に先だつ非公式な情報として公表され、チームマネージャーや選手によるコメントも非公式なものとなる⁵⁶⁾。暫定リザルトは競技会の

⁵⁰⁾ "The confirmation or non-confirmation of a technical incident"

⁵¹⁾ 2005 年まではリードのみだったが、ボルダリングは 2006 年から、スピードも 2010 年から必須となった。

⁵²⁾ この部分直訳。要するにどう撮るか、あるいはルートの性格上留意すべき点などを説明しておけということか？

⁵³⁾ ビデオなしの競技会運営はあり得ないといえるだろう。一つにはウォール・ジャッジの廃止が大きく影響している。かつてのウォール・ジャッジの役割を、ビデオが担っているのである。

だが経験的にいえば、ビデオは必ずしもベストアングルからの記録ではない。少なくとも、ルートの全てのポイントをベストの方向から撮影できるわけがない。特にホールド/タッチの区別は、下方からの撮影では事実上判定不可能な場合が多いというのが実感である。

将来的には、ウォールに平行に設置されたボール上を上下に移動する、リモートコントロール・カメラなどが開発されるのかもしれない。だが、現状ではビデオは、選手を納得させる一つのポーズとしての性格が強いように思われる。

⁵⁴⁾ 2009 年まで、ビデオ記録は必ずオリジナルを IFSC に持ち帰ることになっていたが、2010 年に改められた。

⁵⁵⁾ "a provisional result list"

⁵⁶⁾ "This provisional result list may be published as unofficial information awaiting the finalisation of the official result list, and unofficial comments may be made by team managers and competitors." 意味不明。とにかく早くリザルトを公表しろ、ただしそれは非公式なものとしてあつかう。チーム・マネージャーや選手がそれに異議をとなえても、それは非公式なもので、正式な抗議にはならない、と言う意味か？つまりこの段階での異議は、非公式だから fee 無しで可能と言うことか？

全ラウンドを通じて、スクリーンに投影されることが推奨される⁵⁷⁾。

3. 12. 2 暫定リザルト表の公表後に、その確認と、必要があれば修正を経て、IFSC ジャッジのサインによって公式に認められ⁵⁸⁾、公式リザルト表として公表される。

3. 12. 3 競技会の終了時に、全選手の最終順位とその競技会各ラウンドでの成績を記載した公式の確定リザルト表⁵⁹⁾が用意され、IFSC ジャッジとジュリー・プレジデントがサインをした後、公表されねばならない。

3. 12. 4 全ての公式リザルト表は、IFSC の規定する様式で作成され、競技会の公式の掲示板に掲示され、その複写は競技会の審判団のメンバー、チーム・マネージャー、競技会の広報担当、メディア関係者の代表に公開されねばならない。

3. 13 順位と記録

3. 13. 1 競技中の選手の個々の順位の決定手順は、リード、ボルダリング、スピード各種目それぞれのセクションで規定する。

3. 13. 2 各国選手団の順位と、個々の選手のその大会の全ての種目を含めた総合順位が以下の大会において作成されねばならない⁶⁰⁾。

- a) ワールドカップ
- b) 世界選手権
- c) 世界ユース選手権

3. 13. 3 各国選手団の順位は、各国選手団のその競技会に参加し上位を獲得したメンバー⁶¹⁾の順位ポイントを(8.2.1 に従って)種目毎に合算して計算する。⁶²⁾ポイントを計算に使用する選手の数(以下の通り)

- a) ワールドカップ大会では各カテゴリー 3 名
- b) 世界選手権では各カテゴリー 5 名
- c) 世界ユース選手権では各カテゴリーの年齢別グループ毎に 1 名

3. 13. 4 複数の種目を含む競技会での全種目の総合順位⁶³⁾は、その競技会の全種目に参加した選手の、それぞれの種目での順位ポイント(8.2.1 によるもの)を合算して決定する

⁶⁴⁾(各大会で)総合順位を決定するか否かは、それが必須である世界または大陸別選手権を除き、大会主催者または IFSC から事前に告知されねばならない。⁶⁵⁾

⁵⁷⁾国内でも、2004 年のさいたま国体、及び同じ会場で行われた 2005 年のリード、2006 年のボルダリングの両ジャパンカップでおこなっている。

⁵⁸⁾原文は"officially approved in writing by the IFSC Judge"

⁵⁹⁾"an official consolidated result list"

⁶⁰⁾"A national team ranking, and a combined individual ranking for all disciplines included in a particular competition, shall be prepared, as relevant, for the following competitions"

⁶¹⁾原文は"the highest ranked individual national team members".

⁶²⁾"The national team ranking shall be calculated by adding the ranking points of the highest ranked individual national team members participating in the competition."

⁶³⁾原文は"A overall competition ranking for a competition where more than one discipline"

⁶⁴⁾Rules2008-2009 の Amendment 2 (2009/3/21) で「一つ以上の種目に参加した選手」から「全種目に参加した選手」に変更された。しかし同時に、2009 年からはボルダリングとリードはシーズンが完全に分けられている。ワールドカップの場合は、スピードとボルダリングまたはリードのいずれかを組み合わせた形のみで 3 種目全てにはならない。

⁶⁵⁾原文は"The decision to prepare an overall competition ranking shall be announced beforehand by the competition organiser or the IFSC..."。

3. 13. 5 IFSC は以下の確定順位を公表する。

- a) ワールドカップ・ランキング
- b) 世界ランキング (WR)

ワールドカップ・ランキングの算出方法は、8.2 に定める。

世界ランキングは IFSC が認めた全ての競技会での選手の獲得した成績をもとに、先立つ 12ヶ月間の順位を計算する。世界ランキングを作成する方法の詳細は、IFSC のウェブサイト公表されている。

3. 13. 6 IFSC はスピード競技の世界記録を公表する⁶⁶⁾。

3. 14 アンチ・ドーピング検査

3. 14. 1 加盟山岳連盟/協会は、その国の国際スポーツに関する規則、世界アンチドーピング規定⁶⁷⁾、IFSC のアンチドーピングの指針、手続き、制裁に関する規則⁶⁸⁾の求めるところに従っておこなわれるアンチドーピング検査の準備をしなければならない。

3. 14. 2 ワールドカップ、世界選手権、大陸別選手権、世界ユース選手権、大陸別ユース選手権⁶⁹⁾、そして国際的な競技会の優勝者と、スピード競技で世界新記録を達成した全ての選手は、アンチ・ドーピング検査の対象となる。

3. 15 式典

3. 15. 1 ジュリー・プレジデントの特別な許可がない限り、全選手は開会式に出席しなければならない。この規則に従わない場合、選手はセクション 11 に従って制裁の対象となる。

3. 15. 2 競技会の最後に、決勝ラウンド終了後ただちにおこなわれる表彰式は、こうした催しに関する IOC の手続きに従っておこなわねばならない。国歌演奏と国旗掲揚は IFSC の選手権大会およびワールドカップの最終大会⁷⁰⁾において必須である。

3. 15. 3 ジュリー・プレジデントの特別な許可がない限り、全ての決勝参加選手のうち上位 3 位までは表彰式に出席しなければならない。この規則に従わない場合、選手はセクション 11 に従って制裁の対象となる。

⁶⁶⁾05 年度からスピードは、年間を通じてどの会場でも同じ壁、同じルートを使用することになったので、これが可能になった。

⁶⁷⁾"the World Anti Doping Code"

⁶⁸⁾"the IFSC Anti Doping Policy and Procedure and Disciplinary Rules" 各語の頭が大文字なので、こういう文書が存在するの
だろう。

⁶⁹⁾削除忘れと思われる

⁷⁰⁾"World Cup final events"とあるので、リード、スピード、ボルダールの各種目の最終戦となる大会において、ということだろう。

4. リード

4.1 概説

4.1.1 この規則はセクション3の一般規則を併せて参照すること。

4.1.2 リード競技は、専用に設計され¹⁾、最低12mの高さを有し、かつ各ルートの長さが最低15m、幅が最低3mでの設定が可能な人工のクライミングウォールで開催するものとする。ジュリー・プレジデントの裁量において、壁の一部が幅3mに満たないものも認められる²⁾。

4.1.3 全てのリード競技では、選手はルートを下から確保されて、リードで登らねばならない。

4.1.4 現行の規則に従ってルートを登り、ロープが選手によってレジティメイト・ポジションから最終クィックドロウのカラビナにクリップされたときにルートは完登されたと思なされる³⁾。

4.1.5 リード競技は通常、次のような構成からなる。

- a) 2本の、異なるルートを使用する予選ラウンド。両ルートは同じグレード、似通った性格のルートでなければならない。フラッシュで競技をおこなう。
- b) 準決勝と決勝。
- c) 必要な場合に（大陸別ユースシリーズと⁴⁾各選手権大会に限る）1ルートを使用してのスーパー・ファイナル。

不測の事態の場合は、ジュリー・プレジデントはラウンドのうちひとつを省略することができる。1ラウンドが省略された場合、先立つラウンドの結果を省略されたラウンドの順位とする。⁵⁾

4.1.6 予選の成績は以下のように算出する。

$$TP = \sqrt{r1 \times r2}$$

TP = 総合ポイント

r1 = 予選ルート1の順位

r2 = 予選ルート2の順位

数字の小さい方が上位の成績となる。個々のルートについては、以下の方式が適用される。:

2名もしくはそれ以上の選手が同着の場合、各選手には同着になった全選手の平均の成績が与えられる。例えば1位同着が6名いる場合、平均の成績ポイントは3.5 $[1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 = 21 \div 6 = 3.5]$ 、また2位に同

¹⁾原文は"purpose-designed"。

²⁾壁のスケールの規定は'95年のHANDBOOKでは"absolute"で、絶対条件だったが、その後「望ましい」「recommend」という表現に変わり、2002年にさらにこのような表現となった。これは、全ての条件をクリアすると金がかかりすぎるという経済的条件が大きいのだろう。またあるいは、近年のワールドカップの壁が立体的になり、部分的に条件をクリアできないケースが考えられるようになったということもあるのかもしれない。

³⁾かつては「最終ホールドの保持と最終クィックドロウへのクリップをもって完登」と解釈された時期もあるが、現在では最終クィックドロウへのクリップだけが要件と理解されている。もし、選手が最終ホールドの手前から、最終クィックドロウにクリップしたら、完登とせざるを得ない。

これはルールの不備ではなく、最終クィックドロウは、最終ホールドからしかクリップできないところに設置されねばならない、というルート設定上の暗黙の了解を前提としている。従ってもし選手が最終ホールド手前からクリップできたとしたら、それはルートセッターのミスである。

国内大会であっても、壁の形状の制限などで最終ホールド手前でクリップできるようであれば、ローカルルールの適用として最終ホールド保持後のクリップ以外認めない旨を、テクニカル・ミーティングで徹底すべきである。

⁴⁾削除忘れと思われる

⁵⁾原文は" In the case of unforeseen events, the Jury President may decide to cancel one of the rounds. "。屋外の大会で、急に悪天になった場合などを指すと考えるのが妥当だろう。ボルダリング規則の5.1.4後段(P.27)も同じ意味合いと思う。「one of the rounds」と限定している以上、1ラウンドだけの実施ではさすがにドローゲームになるが、2ラウンド実施していれば大会は成立するということなのだろう。今まで"event"="competition"という先入観にとらわれていたため、理解できなかったが、07年の審判講習で参加者の方から指摘を受けて得心した。感謝。

着が4名の場合、平均の成績ポイントは3.5 $[2 + 3 + 4 + 5 = 14 \div 4 = 3.5]$ である。小数点以下は全て順位付けに考慮されるが、公式リザルトには小数点以下2桁までのみ表示する。

4.1.7 特殊な競技会ではこれに替る形式が、IFSC から適用される。⁶⁾

4.2 競技順リスト

4.2.1 予選ラウンドの競技順

a) 予選ラウンド⁷⁾が同一でない2本のルートで行われ、全選手が(両方を)登る場合の競技順は以下の通り:

予選の最初のルートでの競技順はランダムとする。予選の2本目のルートでの競技順は、1本目の競技順と同じとするが、半分のところで入れ替える⁸⁾。

例1: あるカテゴリーの選手が20名の場合、予選の最初のルートを11番目に登った選手が、予選の2番目のルートでは最初に登る。

例2: あるカテゴリーの選手が21名の場合、予選の最初のルートを11番目に登った選手が、予選の2番目のルートでは最初に登る。⁹⁾

こうした競技順は、各ルートで同時進行の場合、また(全選手が)一つのルートを登り終えた後にもう一方のルートを登る場合にも適用される。

最低50分間の休憩が、最初のルートのアテンプト終了から、2本目のルートのアテンプト開始までの間に保証される。

b) 予選が二組のルートでおこなわれ、各選手はその一方のみを登る場合、選手をそのラウンドの各ルート群に、それぞれのその時点の世界ランキングを元にして振り分ける調整が行われる。まず、その時点の世界ランキングでランク付けされている選手は、下の例のように各ルート群に順々に振り分けられる。

世界ランキング順	
ルート群 1	ルート群 2
1st	2nd
4th	3rd
5th	6th
8th	7th
9th	10th
.....etcetc

ランク外の選手は各ルート群に同数ないしは可能な限り同数近くになるように、各ルートに無作為に振り分けられる。この振り分けの後、各ルート群での競技順がランダムに決定される。¹⁰⁾

4.2.2 予選に続く各ラウンドの競技順は、スーパー・ファイナルを除き、先立つラウンドの順位の逆順とする。すなわち最高位の選手は最後に競技をおこなう。先立つラウンドで同順位の選手の場合、競技順は

⁶⁾単に、これ以外の例外的な形式もあり得ると言っているだけだと思う。

⁷⁾the qualification round

⁸⁾原文は”with a stagger of 50%”

⁹⁾この場合2番目のルートの最初は、11番目の選手と12番目の選手のどちらでも良いわけだが、最初のルートでの競技順が、選手数 $\div 2$ を四捨五入/繰り上げた値の選手が2番目のルートで最初に登ることとして固定されている。

¹⁰⁾国内大会でも、必要な場合は過去の戦績を使ってこの方式で振り分けをおこなっている。

- a) 同着の選手が世界ランキングを有する場合、世界ランキングの逆順とする。
- b) 世界ランキングを有する選手、ランク外の選手がともに同着の場合、ランク外の選手が先に競技をおこなう。
- c) 同着の選手がランク外であるか、世界ランキングが同じである場合、その競技順はランダムとする。この場合のランダム順はあらたに作成する。¹¹⁾

4.2.3 スーパー・ファイナルの競技順は、競技会の決勝ラウンドと同じとする。

4.3 フラッシュ

4.3.1 フラッシュのルートについて、アイソレーションに関する 3.5.1、3.5.3、3.5.4 の規定は、ウォーミングアップ・エリアにも適用される。

4.3.2 全てのフラッシュのルートのビデオ記録¹²⁾を、ウォーミングアップ・エリアで各ルート毎に1つのスクリーンを使って、常時再生し続けなければならない。ビデオ記録がない場合は最初の選手の競技前に、各フラッシュによるルートごとに、実地のデモンストレーションがおこなわれなければならない。男子選手用のルートは男性が、女子選手用のルートは女性がデモンストレーションを行わねばならない。¹³⁾

4.4 オブザベーション

4.4.1 3.6 の規定にしたがい、選手（グループ）はその競技するルートを観察することが認められる。

4.4.2 オブザベーション期間はジュリー・プレジデントがチーフ・ルートセッターと相談の上決定するが各ルートについて6分間を越えてはならない。ただし、特別に長いルートの場合には、延長することができる。

4.4.3 選手は出だしのホールド¹⁴⁾に、両足を地面から離すことなく触れることができる。

4.4.4 オブザベーションが終わったら、選手は速やかにアイソレーション・ゾーンに、競技順リストの最初の数名はジャッジの指示でコール・ゾーンに戻らなければならない。いかなる不当な遅滞も「イエロー・カード」の対象となる¹⁵⁾。さらにそれ以上の遅滞は、セクション 11 に従い、ただちに失格となる。

4.5 安全性と確保

4.5.1 競技ルートの各アテンプトの開始時：

- a) 各選手は IFSC の用具に関するルールと規則に従って用具を身につけていなければならない。
- b) 各選手はそのクライミング・ハーネスに、クライミング・ロープを、末端処理をおこなった¹⁶⁾8 の字結びを用いて結ばねばならない。
- c) 選手が登り始める前に（コール・ゾーン内が望ましい）、ビレイヤーは選手がルールにしたがって用具を装着しているか、ロープが選手のハーネスに上記の 4.5.1b) に従ってしっかりと結ばれているか、ハーネスは正しく装着されているかをチェックしなければならない。

¹¹⁾ 前ラウンドとは異なるものにするという意味か？

¹²⁾ 事前にフォアランナーが登るところをビデオに撮影しておいて、それを使用する。

¹³⁾ 男女で体格や身体的特性が異なるので、異性によるデモンストレーションは参考になりにくいということだろう。

¹⁴⁾ 原文では“first holds”と複数である。

¹⁵⁾ 選手をアイソレーションに戻す際に、運営スタッフは選手に触れてはならない。何らかの抗議の対象となる可能性があるからだ。特に男性のスタッフが女性に対する場合は、セクシュアル・ハラスメントとして捉えられかねない。従って、しつこい選手に対しては、ジャッジがイエロー・カードをちらつかせるのだそうである。

¹⁶⁾ 原文は、以前は“which itself is secured with a safety knot”だった。この解釈は不明だったのだが、2005 年頃に“which itself is”が消え、さらに 07 年には“secured with an extra knot;”となった。そうするとこのように解釈する可能性がでてきたが、どうだろうか。

d) 選手とともにルートの開始地点に行く前に、プレイヤーはロープがすぐに使用できる状態に巻いてあるかを確認しなければならない。

e) IFSC ジャッジはチーフ・ルートセッターとの協議の上で、ルートの下部を登る選手に対し、より安全性を確保するために、ルートの出だしで補助（スポット）をおこなうかどうかを決定しなければならない。

4.5.2 IFSC ジャッジは、チーフ・ルートセッターと協議の上、ジュリー・プレジデントの許可を得て、ロープを最初の（そして適当と見なされれば他の）確保支点到、事前に通しておくことを決定できる。可能な限り、ルートはこうした安全対策が不要であるように設定されるべきである。

4.5.3 クライミング・ロープは1名のプレイヤーが操作するが、もう1人から補助を受けることが望ましい。

¹⁷⁾プレイヤーは選手が登っている間、選手の状態に十分に注意を払って以下のことを守らなければならない。

a) ロープをむやみにタイトにして選手の動作を妨げることがないようにする。

b) 選手が確保支点でロープをクリップするとき、それを妨げないようにする。もしロープを確保支点にクリップするのに失敗したら、ゆるめたロープはただちにたぐる。

c) 全ての墜落はダイナミックビレイで安全に¹⁸⁾停止させる。リード競技の特性上、手動型の確保器具のみが使用されることとする。競技会で使用される全ての手動型の確保器具はジュリー・プレジデントの承認を必要とする。¹⁹⁾

d) 選手を必要以上に長く墜落させてはならない。

e) 墜落中の選手が、壁が重なった部分のエッジ²⁰⁾や、その他クライミングウォールのいかなる部分によっても、負傷することがないように十分な注意を払わねばならない。

4.5.4 プレイヤーは常時、ロープを適切にたるませておかねばならない。ロープへのテンションはどのようなものであれ、人工登攀や選手への妨害とみなされ、IFSC ジャッジによって、テクニカル・インシデントと宣言される²¹⁾。

4.5.5 ロープを最後のクィックドロースに通した後、または墜落した後、選手は地面へロワーダウンしなければならない。選手が地面にあるものに接触しないように、十分な注意が払われなければならない。

4.5.6 選手がロープをハーネスからほどいている間、プレイヤーは可能な限りすばやく、かつクィックドロースが不用意に乱されないように²²⁾ロープを引き抜かねばならない。プレイヤーはその責任において、選手を可能な限り早くクライミング・ゾーンから退去させねばならない。

4.6 クライミング中の規定

4.6.1 競技時間の長さ²³⁾は予選ルートにおいて6分間、準決勝と決勝においては8分間とする。²⁴⁾

¹⁷⁾2002年より2名でロープを操作するという記述が加わった。もともとスピードではロープを素早くたぐる必要があるため、2名でロープを操作していたが、リードの場合でも1名が補助が入ることによって、不用意なロープロックや操作ミスによる事故を防ぐということだろうと思われる。さらに2010年で、基本は1名でビレイ、1名の補助がつくことが望ましいということになった。

¹⁸⁾in a dynamic and safe manner

¹⁹⁾不適正な確保器具の使用を防ぐ意味合いだろうが、1つにはどこまで Manual Breaking Device = 「手動型確保器具」とするか、という定義そのものが曖昧だということがあるのだろう。

²⁰⁾原文は”the edge of an overlapping section”。最近のワールドカップの壁の写真をみると、一つの壁に手前に別の壁の上部が張り出しているものがある。その張り出した部分のエッジということだろうか

²¹⁾IFSC ジャッジには、テクニカル・インシデントを発見したら、それに対処する義務がある。例え選手が気づいていなくとも、である。ここで難しいのは、特に些細なものである場合、選手に声をかけることでそれ自身が、選手の集中を乱すものとしてテクニカル・インシデントになりかねない点だ。

²²⁾原文は”without unduly disturbing the quick-draws”。クィックドロースのハンガー側のマイロン・ラピッドが回転したり、クリップ側のカラビナが何かに引っかかったりすると、テクニカル・インシデント (P.22 参照) と見なされる。

²³⁾原文は”The fixed length of the climbing period”。これを、国内では”climbing time”と言うことがあるが、厳密には”climbing time”はスピードそして、リードではスーパー・ファイナルでの時間記録を指すようだ。

²⁴⁾2008年までは、ジュリー・プレジデントの権限で変更可能だったが、2010年にその旨の記述が削除された。競技時間は、完全にこれで固定となる。

4. 6. 2 選手がクライミングウォールの基部の競技ゾーンに入ったところで、アテンプト開始前に 40 秒間の猶予が認められる。この 40 秒間の最終オブザベーションは、競技時間には含まれず、各選手はこの 40 秒が経過後もアテンプトを開始しない場合、すみやかに競技開始するよう指示される。それ以上の遅滞はセクション 11 に照らして制裁の対象となる。40 秒間の最終オブザベーションは、ルートをフラッシュ形式で登る場合にも適用する²⁵⁾。

4. 6. 3 各選手のアテンプトは、両足が地面から離れることをもって開始と見なされ、競技時間の計測が開始される²⁶⁾。選手の競技開始の判断は、ルートジャッジの裁量とする²⁷⁾。

4. 6. 4 選手はそのアテンプト中随時、IFSC ジャッジに競技時間の残りを尋ねることができ、IFSC ジャッジは選手に対してすみやかに残り時間を伝える あるいは伝えるように指示²⁸⁾しなければならない²⁹⁾。競技時間が終了したら、IFSC ジャッジは選手に競技中止³⁰⁾を指示、あるいは終了指示をおこなうよう指示しなければならない。選手が IFSC ジャッジの競技中止の指示に従わなかった場合は、その選手はセクション 11 に従って制裁の対象となる。

4. 6. 5 ルート上でのアテンプト中に：

a) 選手は常にレジティメイトポジションにななければならない。(これには以下を満たさねばならない：)

(i) 選手の身体の全てが未クリップのクイックドローの下のカラビナ越えない、あるいは

(ii) 選手が未クリップのクイックドローに手で(クイックドローを足で引き寄せたりすることなく)触れることができる³¹⁾。

これには一つ例外がある。選手は(特定のクイックドローに)クリップするためにマークされたホールドを、マークされた(特定の)クイックドローにクリップすることなく通過してはならない³²⁾。

このルールへのいかなる違反であれ、そのルートにおける選手の競技は中止となる。IFSC ジャッジによる競技中止の指示を選手が拒否した場合は、セクション 11 に従ってその選手は制裁の対象となる。

b) 選手はクイックドローに、順番にクリップしなければならない。³³⁾

c) 最初のクイックドローに、地面の上からクリップすることが認められる。

d) 選手は直近にクリップしたカラビナから、ロープをはずして再度クリップすることが認められる。³⁴⁾

²⁵⁾ここは 2008 年と 2010 年で完全に逆になった。

²⁶⁾ここで疑問なのは、40 秒を超過して登りだしていない選手についても、同様にこの時点で計時を始めるのか?とすることである。ルール上の規定は現在の所ないが、常識的に考えて 40 秒経過時に計時を始めてしまうのが妥当のように思うので国内ではそうしている。

²⁷⁾2011 年の改訂で加わった。計測開始が早すぎると言うような選手の抗議があったのだろう。

²⁸⁾無論、タイムキーパーに対する指示。

²⁹⁾残り時間 1 分での選手へのコールが、2011 年の改訂で削除された。これは予選が 2 ルート同時進行が多いためと思われる。要は、どちらの選手へのコールであるかがわかりにくく、混乱することがあるということだろう。

³⁰⁾原文は"stop"である。選手がレジティメイト・ポジションからはずれば全て"stop"の対象である。また一部"terminate"を使っているところもある。ジャッジが"stop"をかける行為を、そう呼ぶようだ。またテクニカル・インシデントによる中断は"cease"と表現しているようだ。

³¹⁾2011 年の改訂。この改訂により二つの条件の重複がなくなって、ある意味すっきりした。ここで誤解してはならないのは、これはクイックドローを足で操作することを「直接に」禁止しているわけではない、ということである。そうでないと、ムーブ中に未クリップのクイックドローに足が引っかかったようなケースまで違反になりかねない。あくまで、手でクイックドローに触れることができないところまで行き過ぎてしまったら、レジティメイトポジションからはずれる=競技中止と言うことであり、手が届く範囲にあれば足を使ってクイックドローを引き寄せたとしても問題はないはずである。

³²⁾従来からある、いわゆる「青十字」規定であるが、表現の仕方が変わってわかりにくくなった。要はルート中の特定のクイックドローについて、特定のホールド(及びそれより下のホールド)からクリップするよう指定することができる。この指定が行われた場合、選手はそのクイックドローにクリップしないまま、そのホールドを過ぎて登り続けてはいけない、ということ。なおこのマーキングについては、後段に規定がある。

³³⁾2010 年からクリップ順序は厳密化された。従来はこのあたりがあいまいで、1999 年に神戸で行われたジャッジのトレーニングコースでは、同一ポジションでクリップした場合は「大目に見る」と言われており、国内ではそれを踏襲してきた。

³⁴⁾何を想定しているのが今ひとつはっきりしない。Z クリップへの対処もこれに該当するだろうが、Z クリップについては 4.6.5d に既に以前から規定がある。考えられるのはロープが何かに引っかかった状態でクリップしたような場合だろうか。

- e) 選手が上記の 4.6.5.a) ³⁵⁾に従ってロープをカラビナにクリップしながらも、“Zクリップ”があった場合は、選手はZクリップを直さなければならない。選手は(必要があればクライムダウンして)どのカラビナであれクリップの解除と再クリップをすることができる。直した後は、全ての確保支点にクリップされていなければならない。³⁶⁾

ジュリー・プレジデントが、1つ以上のクィックドローについて特定のホールドあるいはその手前でクリップしなければならないことを定めた場合は、この情報は選手に対しアイソレーション・ゾーンでのテクニカル・ブリーフィングの間に伝達されねばならない。当該のホールドとクィックドローは、青い十字(が望ましい)で明確にマークされ、オブザベーションの間に指示されねばならない³⁷⁾。

IFSC ジャッジはそれ以上の進行が危険であると判断した場合、アテンプトを終了させねばならない。

4. 6. 6 ルート上のホールドは IFSC ジャッジがチーフ・ルートセッターと協議の上で決定した回数、クリーニングされねばならない。ルートのクリーニングまでのアテンプト数は最大 20 人までとし、クリーニング作業はラウンドを通して均等な間隔でおこなわれねばならない。クリーニングの回数と所要時間³⁸⁾は公表し、アイソレーション・ゾーンに掲示される競技順リストに明示しなければならない³⁹⁾。

選手はルート中のいかなるホールドも、クリーニングすることは認められない⁴⁰⁾。

4. 7 テクニカル・インシデント

4. 7. 1 リード競技におけるテクニカル・インシデントとは以下のようなものである。

- a) ホールドの破損または緩み。
- b) クィックドローのカラビナが正しい位置にない。
- c) ロープが張られることで選手の補助、または妨害になった。
- d) その他、選手の動作の結果ではないところのことながら、選手に不利または有利にはたらいた。

4. 7. 2 選手が墜落し、テクニカル・インシデントが墜落の原因であると申しでた場合、選手は直ちに別に設けられたアイソレーション・ゾーンへ⁴¹⁾移され、テクニカル・インシデントに対する調査結果が出るまで待たねばならない。

4. 7. 3 テクニカル・インシデントをこうむった選手は、ウォームアップ設備を利用できる、別に設けられたアイソレーション・ゾーンでの回復期間を認められ、その間 IFSC または主催者役員以外の何者とも接触できない。

選手の次のアテンプトまでの回復期間の最大は、テクニカル・インシデントまでに使用したハンド・ホールドあたりおおよそ 2 分をあてるものとする。当該選手は、最低でも 20 分の回復期間が与えられる。ジュリー・プレジデントは⁴²⁾、選手の最大限度内での回復期間の要求にもとづき、選手の次のアテンプトの時間を確保す

³⁵⁾ここは 2010 年では 2011 年版の 4.6.5b) にあたる「選手はクィックドローに、順番にクリップしなければならない。」を指していた。文脈的にはこの方が自然に思える。おそらく改訂に伴って番号がずれたのを見落としたのではないだろうか。

³⁶⁾Zクリップに対して観客は注意をうながしてもよい。ピレイヤーは特にルートの下部であれば安全上の問題もあるので、個人的な好意でこっそりと伝えられるならそうしても良いが、ジャッジはむしろ注意すべきではない。これはスタッフの職務ではなく、Zクリップを指摘しなかったことで抗議をされることはない。しかし、ある選手では指摘し、別の選手では指摘しなかったような場合は、そのことで抗議を受ける可能性が生じる。

³⁷⁾2010 年の改訂で青十字についての具体的な規定が削除され、ここにある文言のみとなった。従来から青十字はなるべく使うなどと言われており、本当に必要なときのみジュリーが判断して決めることがらとして濫用されないようにした、と見ることができる。

³⁸⁾duration

³⁹⁾2010 年まではテクニカルブリーフィングで通知とあったが、競技順リストへの明示のみになった

⁴⁰⁾2006 年に加わった規定。スタート・ホールドであってもリードではクリーニングは不可なので注意。

⁴¹⁾”a separate isolation zone”

⁴²⁾2008 年に IFSC ジャッジからジュリー・プレジデントに変更。

る。全ての関係する選手⁴³⁾は、再アテンプの時間について告知されねばならない。

競技会の最終ラウンドでは、回復期間は最終選手がそのアテンプを終えてから 20 分を越えてはならない⁴⁴⁾。

競技会のいずれのラウンドであれ、再アテンプが最後の選手の後に行われる場合、テクニカル・インシデントを被った選手がすでにそのラウンドで 1 位となっているのであれば、その選手の再アテンプは認められない⁴⁵⁾。

4. 7. 4 再アテンプ終了後、選手はそのアテンプの中で達成した最も良い結果を記録される⁴⁶⁾。

4. 8 成績判定

4. 8. 1 後の 4.11 の規定に基づき、墜落や IFSC ジャッジの指示によって選手がクライミングを中止したら、チーフ・ルートセッターによって規定されたルートライン上の、保持またはタッチされた最高遠点のホールドで選手の成績が決定される。

4. 8. 2 各ホールドはチーフ・ルートセッターによって、競技会のラウンド開始前に指定され、ルート・ジャッジが判定に使用するルート図⁴⁷⁾に記入されたもの、または競技会のラウンド中に選手によって有効に使用されたものである。

選手がホールド（チーフ・ルートセッターが特定したもの）のないポイントにタッチしても、そのポイントは選手の成績決定には考慮されない⁴⁸⁾。

手で使用したホールドだけが計測の対象となる⁴⁹⁾。

オブジェクト⁵⁰⁾の、クライミングに使用可能な部分だけが選手の成績を測定する際に考慮される⁵¹⁾。

4. 8. 3 IFSC ジャッジの決定により保持されたと見なされたホールドは、タッチしただけのホールドより上位と見なされる。

a) 選手がタッチしたホールドの評価は、ホールド番号にマイナス (-) の末尾符号をつける。

b) 選手が保持した⁵²⁾ホールドの評価は末尾符号のないホールド番号とする。この評価は同じホールドのタッチよりも上位である。

⁴³⁾再アテンプをおこなう選手だけでなく、アイソレーション・ゾーン/コール・ゾーンにいる多くの選手が、その影響を受ける可能性がある

⁴⁴⁾この規定は、2004 年度に大きく改訂された。従来は、最大で 20 分だったので、選手に有利なものに変わった、と言ってよいだろう。

⁴⁵⁾従来も、こうした場合に登り直しをしていたわけではないようだ。古いところでは既に'93 年の第 5 戦（ニュールンベルグ）の女子準決勝で、ロビン・アーベスフィールドのアテンプ中にホールドが回転したが、他選手の記録を上回っていたので登り直しをしなかったと言う事例がある（『岩と雪』162 号）。これまでの慣例を明文化したということだろう。

⁴⁶⁾テクニカル・インシデントが起こったアテンプのリザルトと再アテンプのリザルトの内、上位の方が記録として残る。

⁴⁷⁾原文は"the route sketch"。

⁴⁸⁾ルートマップにないホールドは、保持すればカウントするが、タッチは認めないということである。そのために、ルートセッターはあらゆるムーブの可能性を検討しなければならない。その上で、壁の中で指定したホールド以外の使用できる可能性のあるポイントを全て排除した形でルートを作るか、あるいは有効に使用できる可能性のあるホールドは、全てルートマップに記入しておく必要がある。そうでないと混乱の原因になることがありうる。

⁴⁹⁾'99 年の最大の変更点。それまでは、トゥ・フックやヒール・フックでもそれが手で保持しているホールドより上であれば保持と認めて計測の対象としていた。だが、それでは、ムーブとしては行き詰まっているにも関わらず、リザルトは上位になるというケースが出てくるため、それに対処するための変更である。なお、ルーフ出口でのヒール・フックなどはプラスとして扱う。逆にいうと、こうしたポイントでは、ヒール・フックを決めるか、あるいはそれに匹敵する有効なムーブをしない限り、プラスと認められない場合がありうるようになったということでもある。

⁵⁰⁾ホールド、はりぼてなどを総称してこう表現している。日本語にしにくいのでとりあえずカタカナ語表記とする。

⁵¹⁾ポリウムのあるホールドなどで、保持不能な部分へのタッチは認められない。

⁵²⁾この「保持」を表す動詞も、ボルダーと同様に"hold"から"control"に変わった。

- c) 選手が保持し、ルート上を前進するための動作を起こしたホールドの評価は、ホールド番号にプラス(+)
の末尾符号をつける⁵³⁾。この評価は同じホールドの保持よりも上位である。

選手のその明らかに差違のあるパフォーマンスを、可能な限り区別するための各ホールドへのタッチとホールドの、またホールドと”+”の区別の境界線の決定は、IFSC ジャッジの裁量による⁵⁴⁾。

4.9 ラウンド終了後の順位

4.9.1 各ラウンド終了後、セクション 4.8. に基づいて選手の順位が決定される。

4.9.2 複数の選手が同じリザルトで並んだ場合、先立つラウンドのリザルトを順次⁵⁵⁾考慮してカウントバックが適用される。カウントバックは、先立つラウンドが異なるルートによる 2 組のルート群でおこなわれ、各選手は 1 つのルート群でのみ競技をおこなっている場合には適用されない。⁵⁶⁾

4.9.3 予選ラウンドで、選手を 2 組のルート群に割り振り、各選手はルート群のうち 1 組のみで競技をおこなう必要がある場合、順位付けは各グループ毎におこなわれる。その上でこれらの順位は予選の総合順位を出すために統合される。⁵⁷⁾

4.9.4 2 本の別個のルートを全選手が登る形式の予選ラウンドで、何らかの事情で一方のルートを登らない選手がいた場合、その選手に与えられる順位は、そのルートを実際に登った内で最下位の選手の順位の下位とする。もし選手がどのルートも登らなければ、その選手に順位はつけない。

4.9.5 もし競技会の決勝ラウンド終了後、カウントバックを適用しても、1 位に同着がある時、一部の競技会ではスーパー・ファイナルがおこなわれる (4.1.5 c) 参照)。スーパー・ファイナルは、決勝と同じルートでおこなっても⁵⁸⁾、異なるルートでおこなっても良い。もしスーパー・ファイナル終了後に同着が残っている場合は、選手は、その成績を獲得するのに要した時間⁵⁹⁾をもって順位を決定する、この場合選手は競技時間の少

⁵³⁾ マイナス、プラスの判定は 2000 年代の初めに厳しくなった。大きなホールドなど、保持できるポイントが明確な場合は、保持できないポイントタッチしてもカウントしない。またアンダークリングでしか使えないホールドでは、逆手でホールドの内側をタッチしないと認められない。場合によっては、ショートカットしてタッチしても、フォアランナーがそのムーブではタッチできて保持できないと認定すれば、マイナスは認められない。またプラスも、ランジではアクシスに従った方向へ跳ばないと認められない、といったことがあげられる。

⁵⁴⁾ ”It is at the IFSC Judge’s discretion to set the limit between ‘touched’ and ‘held’, and between ‘held’ and ‘+’ for each hold in order to separate competitors with markedly different performance to the extent possible.”。選手の差違の表現として、タッチ(-)とホールドとプラスしかない。これは現実のジャッジをしてみれば分かるように、選手のパフォーマンスの差違を表現するには少なすぎる。だがこれをあまり細分化しても混乱するだけだろう。その中で、選手の差違のどこを境界にするのが望ましいかを判断するのがジャッジの仕事である。それは時に運営上の都合による場合もある。例を挙げれば、あるホールドについて、ある選手 A は単純にたいただけ、選手 B は一瞬とまったかに見えたがすぐにフォール、選手 C は確実に保持という場合、もし選手 A の順位と選手 B の順位の間クォータがあった場合は、選手 B をホールドとする見なすことが可能である。だが、もし選手 B と選手 C の間クォータだったら、選手 B をタッチとすることがありうる。

⁵⁵⁾ 原文は”the result of the successively preceding rounds”。ラウンドを次々に遡ってカウントバックをおこなう、という意味と考えられる。この部分、2005 年までは丁寧に記述されていたが 2006 年に表現が簡略になって、意味が取りづらくなっている。

⁵⁶⁾ 原文は”The countback procedure shall not be applied to an earlier round having two sets of non identical routes ,where each competitor attempts only one set of routes.”

2004 年度に、同着の選手が同じグループで競技している場合のみカウントバックするとされたが、2010 年にもとに戻された。これが問題になったのは、IFSC が各大会の処理に使用しているウェブアプリケーションが、2004 年改定のルールに沿った処理が出来ていないことが発覚したのがきっかけである。請け負っている業者が意外にロースキルなのに驚かされた。

⁵⁷⁾ この説明だけで具体的な作業を思い描くのは不可能だろうと思う。予選を A、B の 2 ルートで競技したとして、A ルート、B ルートそれぞれで同じ順位になった選手の最終順位が同じになるようにするのだが、具体例をあげて説明しよう。

予選で A、B 各ルートにそれぞれ 30 名参加して、各ルートから上位 13 名ずつが後のラウンドに進んだとする。各ルートの予選に通れなかった選手は 17 名ずつ 34 名。この中で一番順位が上の選手は A ルート、B ルートとも 14 位になる。この 14 位の選手の総合順位はともに、準決勝進出者の人数 + 1 で 27 位になる。以下、15 位は総合 29 位、16 位は総合 31 位となる。

片方のルートに同順位が複数いた場合 例えば、17 位が A ルートに 2 名、B ルートに 1 名いた場合は、この 3 人は総合 33 位になる。この次の総合順位は 36 位だが、これは B ルートの 18 位に割り当てられる。こういった作業を延々とやって行くわけである。無論、通常はコンピュータで計算するが、選手登録後に突然棄権した選手があって、2 ルートの人数差が 2 名以上になると手動で補正しなければならない。

⁵⁸⁾ 2006 年の改訂。スーパー・ファイナルで競技会の終了がむやみに長引くことへの対策だろう。

⁵⁹⁾ 原文は”the time used to achieved result”。すなわち、完登の場合は無論最終クィックドロウにクリップするまでの時間だが、途中でフォールした場合などは、最高到達点に達した時点を計測の対象とする。したがって、競技中の計時は実質不可能で、ビデオを再生しながらの計時になるだろう。

時間で判定するのであれば、スーパー・ファイナルでは計時を厳密に行う必要がある。2008 年に競技時間には最終オプザベーションを含まないことになったが、こうしたスーパー・ファイナルでは従来のように競技エリアに足を踏み入れた時をスタートとするよりは、本当のアテンプトの開始から計時した方が、選手にも観客にもわかりやすい。

ない方から順に順位がつけられる⁶⁰⁾。

4. 10 各ラウンドの定員

4. 10. 1 4.10 は上記の 4.9 を併せて参照のこと。順位付けの処理は 4.10 が適用される前に終了していなければならない。

4. 10. 2 準決勝と決勝の進出枠は、それぞれ 26 名と 8 名とする。

4. 10. 3 予選ラウンドが 2 グループの選手で行われる場合、次のラウンドへの定員は等分され両グループに割り当てられる。

4. 10. 4 定員枠は前のラウンドで上位となった選手で埋められる。

4. 10. 5 進出枠を、同着の選手があるために超過してしまう場合、多い方の人数の選手が競技会の次のラウンドへ進むものとする⁶¹⁾。

4. 11 アテンプットの終了

4. 11. 1 選手は以下の場合、完登と認められない。

- a) 墜落した。
- b) 競技時間を超えた。
- c) 登るための使用が制限されている壁の一部、ホールド、はりぼてを登るために使用した。
- d) クライミングウォールにあけられているボルト・オン・ホールド取り付け用の穴を手で使用した。
- e) 登る壁の左右または上端のエッジを使用した。
- f) ハンガー（そのボルトも含め）、クィックドロローを登るために使用した⁶²⁾。
- g) クィックドロローへの規則に従ったクリップをおこなわなかった。
- h) アテンプット開始後、体のいかなる部位であれ地面に戻った。⁶³⁾
- i) 何らかの人工的補助手段を用いた。

4. 11. 2 4.11.1 の b) ~ i) に関する違反行為があった場合、IFSC ジャッジはクライマーに登るのを止めるよう指示しなければならない。

クライマーまたはチームマネージャーはこの決定に対し直ちに抗議することができる。抗議が行われた場合、選手は別に設けられたアイソレーション・ゾーンに隔離される。抗議はセクション 13 に規定される手続きに従って行われねばならず、条件の許す限り早く審判団は判断を下さねばならない⁶⁴⁾。抗議が認められれば、選手は再アテンプットをすることができる。選手は 4.7.3 に定めるテクニカル・インシデント後の選手の回復についての規定に準じた条件の休憩が認められる。再アテンプット終了後、選手はそのアテンプットの中で達成した最も良い結果を記録される。

⁶⁰⁾原文は”the ranking in such a way that the competitors shall be ranked in increasing climbing time”で、実に（腹が立つほど）婉曲な表現。

⁶¹⁾これまでは、人数によって、切れるポイントの上をとるか下を取るかが変わってきたり（これをフローティングクォータと呼んだ）、場合によっては下で切っても良かったりと、色々変わってきていたが、05 年改訂ですっきりと単純化された。

⁶²⁾05 年改訂で、ボルトが使用禁止になったが、07 年にハンガーを固定するボルトに限定して禁止となった。

⁶³⁾2010 年に、それまでの「地面に触れた=touches the ground」から「地面に戻った=return to the ground」に変更。この変更は微妙だが、スタート後に足が地面に擦る程度は OK になったと見るべきか？

⁶⁴⁾原文は”shall be acted upon as early as circumstances allow by the appeals jury”。最後の”the appeals jury”は、抗議を担当する（した）審判団の意味か？”appeals”は不要と思うが……

4. 12 ビデオ記録の使用

4. 12. 1 IFSC ジャッジが、成績決定前に選手のアテンプトのビデオ記録の検討が適切と考える場合、IFSC ジャッジは規則に従って選手がそのアテンプトを完遂するのを認めねばならない。そのアテンプト終了後直ちに、選手はIFSC ジャッジからそのラウンドの順位はビデオ記録の審査の後の確認の対象となる旨を告げられねばならない⁶⁵⁾この確認は可能な限りすぐに行わねばならない⁶⁶⁾。

4. 12. 2 公式ビデオ記録はジャッジによって、高度計測での”ホールド/タッチ”と、各ラウンド後の選手順位の確定に用いられる。

⁶⁵⁾ やや婉曲な書き方だが、要するに選手からの抗議にともなう手続きをシンプルにするとともに、ミスジャッジの可能性を極力排除するための規定である。

選手のアテンプトにストップをかけた場合、当然選手からの即時の抗議が予想される。仮に判定が誤っていた場合、これは重大なテクニカル・インシデントとなり、競技の進行を大幅に遅らせることになる。ラウンド終了後のビデオ確認を待っての判断であれば、ミスジャッジの可能性は低くなるし、選手の抗議も時間的に一本化されて対応しやすい。何より、テクニカル・インシデントだけは起こる心配がない。一般に、選手の行為が100%絶対でない限り、選手のアテンプトを止めてはならない。とりあえず競技を進行させ、ビデオを確認した上で判断する。そのかわり、アテンプト終了時に選手にその旨を通告しておくということである。

⁶⁶⁾ 従来はビデオ記録の確認はラウンド終了後とされていたが、2011年にこうしたケースの確認については、すぐに行うことに変わった。中途半端なまま選手を待たせないと言うことだろうが、チーム・マネージャーからの不満の声に負けたということだろうか。実際の対応はルートジャッジでは無理なので、おそらくはIFSC ジャッジ、ジュリプレジデント、IFSC デリゲイトのいずれかがおこなうのだろう。

5. ボルダリング

5.1 概説

5.1.1 この規則はセクション3の一般規則を併せて参照すること。

5.1.2 ボルダリング競技はボルダーと呼ばれる一連の短いルートから構成される。全てのボルダーはロープなしで登られねばならない。各ボルダーのハンド・ホールドの最大数は12個、一つのラウンドの各ボルダーのハンド・ホールド数の平均は4個から8個としなければならない。

5.1.3 ボルダリング競技は通常は、予選、準決勝、決勝の各ラウンドから構成され、(選手権大会のみ)必要な場合はスーパー・ファイナルラウンドをおこなう。

やむを得ない場合、 Jury・プレジデントはラウンドの一つを省略することができる。あるラウンドが省略された場合は、先立つラウンドの結果を省略されたラウンドの順位とする。¹⁾

5.1.4 準決勝と決勝ラウンドは同日に実施される。準決勝ラウンドで最後の選手がそのアテンプトを終了してから決勝ラウンドのアイソレーションクローズまでの間は最低2時間を置かねばならない。アイソレーションのクローズ時刻は、決勝ラウンド開始の1時間前より以前であってはならない。

5.1.5 予選ラウンドのボルダー数は5とする。準決勝と決勝ラウンドのボルダー数は4とする。

予選ラウンドのボルダー数は、 Jury・プレジデントの判断で減じることができる。²⁾

5.1.6 安全上、各ボルダーは

a) 着地用マットで安全確保されねばならない。主催者の用意したマットの配置、及び利用できるマットに合わせてボルダーの数と性格を決定する³⁾のは、チーフ・ルートセッターの責任である。マットを結合するのであれば、隙間は選手がその隙間に落ちることがないように、覆わなければならない。

b) クライマーの体の最も下の部位が着地マットから3m以上にならないように設定されるものとする。

c) 下方向へのジャンプは設定してはならない。⁴⁾

5.1.7 各ボルダー担当の審判員はボルダー・ジャッジ1名⁵⁾とし、ボルダー・ジャッジは少なくとも国内ジャッジの資格を有する者でなければならない。

5.1.8 各ボルダーにはそこからアテンプトを開始するスターティング・ポジションとして、少なくとも両手の位置をあらかじめ設定しなければならず、さらに定められた片足または両足の位置を含めることができる。⁶⁾

各スターティング・ポジションは、はっきりとマーキングされなければならない。チーフ・ルートセッターの判断で、スターティングホールドに左右の別を示すことができる。

¹⁾リード規則の4.1.5後段の脚注(P.17)を参照。

²⁾特に予選ラウンドのボルダー数は、この数年で毎年のように減ってきている。結局、いわゆるベルトコンベア方式が冗長であるため、少しでも時間を短くするために、と言う理由からだろう。

³⁾原文は”adjust the number and character of the problems to the mats available.”。多分こういう意味だと思う。ボルダーが用意されたマットに制約されると言うことは考えられるのではないかと思う。

⁴⁾ランジする跳び先のホールドが、もとのホールドより低いようなランジを指すと思われる。

⁵⁾2008年の変更点。マット上にはスタフが多いのは観客から見ると鬱陶しいという理由だと思われる。

⁶⁾最近では両手両足の指定が多いが、両手のみ指定で両足を地面に置いた状態からスタートする課題も設定できるわけである。またスターティング「ポジション」であって「ホールド」ではないことに注意。これは足をスメアリングでスタートする場合、また壁の端のカンテ上の部分などホールドの無いところに手を置いてのスタートを考慮してのことだろう。

5.1.9 一つのボーナス・ポイント⁷⁾が、ボルダー中の特定のホールドの保持によって認定される。このホールドの設定はそのボルダーのルートセッターの判断による。このホールドは、はっきりとマーキングされねばならない。ボーナスポイントは、クライマーがそのホールドを使わずに完登した場合も与えられる。

5.1.10 ボルダーの終了点⁸⁾は、以下のいずれかを指定することができる。

- a) 最終ホールドに両手が到達すること⁹⁾。このホールドは、はっきりとマーキングされねばならない。
- b) ボルダーの上に立ち上がること。

5.1.11 5.1.8、5.1.9、5.1.10 で使われるマーキングは、競技会の全期間を通して統一しなければならない。スターティングポジションと最終ホールドに使われる色は同色とする。ボーナスホールドには別の色を使用しなければならない。いずれの色も 3.2.2 で定めた使用限定を表す色とは異なるものでなければならない。

また凡例をアイソレーション・ゾーンの練習課題に設定しておかなければならない。

5.1.12 観客のために、全てのボルダーは壇上に設置しなければならない。全てのボルダーは、競技場内のどこからでも見えるように並べなければならない。¹⁰⁾

5.2 競技順リスト

5.2.1 予選の競技順リスト

- a) 予選ラウンドは通常、参加締め切りの時点で参加者数が 40 名を下回らない限り二組のボルダー（群）で行われ、各選手は一組のボルダー（群）のみで競技をおこなう。

そのラウンドの各ルート群に、選手をそれぞれのその時点での世界ランキングを元にして振り分ける調整が行われる。

まず、その時点の世界ランキングでランク付けされている選手は、下の例のように各ルート群に順々に振り分けられる。

世界ランキング順	
ルート群 1	ルート群 2
1st	2nd
4th	3rd
5th	6th
8th	7th
9th	10th
.....etcetc

ランク外の選手は各ルート群に同数ないしは可能な限り同数近くになるように、各ルートに無作為に振り分けられる。この振り分けの後、各ボルダー群での競技順が 1.1.1a)¹¹⁾に定められた方法で決定される。

- b) 一組のボルダー（群）の場合には、予選ラウンドの競技順はテクニカル・ミーティング当日の世界ランキング順とする。最も上位の選手が、最初に競技を始める。ランク外の選手は、ランダム順にランクを持つ選手の後に競技をおこなう。

⁷⁾”One bonus point”と、一つであることを強調した表現になっている。

⁸⁾原文は”top of the boulder”。2010 年の改訂で、ニュアンスとして自然の岩のボルダーのトップアウトを意識したと思われる表現になった。日本語に訳す際に、当初は「頂上」としたが、どうしても違和感があるので「終了点」にあらためた。こちらの方が表現としては自然だが、”top”という言葉のニュアンスは失われてしまう。

⁹⁾原文は”the attainment with both hands”。この表現はこれまで、”hold”から”control”へと変わってきたが、2010 年にまた変った。この表現だと、無論両手でタッチしただけでは完登は認められないだろうが、片手で確実に保持していれば、もう一方の手はホールドを叩く程度でも完登を認めても良いと解釈できそうだ。

¹⁰⁾2003 年に加わった規定で、後段は 2008 年までは一部例外を含んだが、2010 年に、完全に全てのボルダーに適用されるようになった。

¹¹⁾5.2.1a) の誤りか？

5. 2. 2 予選に続く各ラウンドの競技順は、スーパー・ファイナルを除き、先立つラウンドの順位の逆順とする。すなわち最高位の選手は最後に競技をおこなう。先立つラウンドで同順位の選手の場合、競技順は

- a) 同着の選手が世界ランキングを有する場合、世界ランキングの逆順とする。
- b) 世界ランキングを有する選手、ランク外の選手がともに同着の場合、ランク外の選手が先に競技をおこなう。
- c) 同着の選手がランク外であるか、世界ランキングが同じである場合、その競技順はランダムとする。この場合のランダム順はあらたに作成する。¹²⁾

5. 2. 3 スーパー・ファイナルの競技順は、競技会の決勝ラウンドと同じとする。

5. 3 オブザベーション

5. 3. 1 予選と準決勝ラウンドにおいて、各ボルダーに割り当てられた競技時間は、オブザベーションも含めたものであり、競技前のオブザベーションはおこなわない。¹³⁾

5. 3. 2 選手はオブザベーションを、定められたオブザベーション・ゾーン内でおこなわなければならない。クライミングウォールに登ること¹⁴⁾や、道具や家具類の上に立つことは許されない。選手は、いかなる方法によっても、オブザベーション・エリア外の何人とも連絡をとってはならない。質問はジューリ・プレジデント、IFSC ジャッジ、そのボルダー担当のルートジャッジとアシスタントに対してのみ認められる。オブザベーション中に、スターティングホールド以外のホールドに手や足で触れる、あるいはチョークをつけること、またティックマーク¹⁵⁾を付け加えることは、そのボルダーの1回のアテンプトとしてカウントされる¹⁶⁾。

5. 3. 3 決勝ラウンドに先立ち、各ボルダー毎に2分間の合同オブザベーションをおこなう¹⁷⁾。

5. 4 競技中

5. 4. 1 予選ラウンドと準決勝ラウンドでは選手は、決められた競技順にボルダーでのアテンプトをおこなう。それぞれのボルダーを終えた後、クライマーは割り当てられたローテーション・ピリオドと呼ばれる競技時間と同じだけの休憩時間が与えられ、それは5分間とする。¹⁸⁾各ボルダーは、クライマーがそこからボルダーを見ることができ、また安全マットをその範囲に含む明確に示されたエリアを含まなければ¹⁹⁾ならない。

5. 4. 2 ローテーション・ピリオド終了時には登っている選手は登るのをやめ、休憩エリアに入らなければならない。このエリアでは、いずれのボルダーのオブザベーションも認められない。その休憩時間の終了した選手は、次のボルダーに移動しなければならない。

5. 4. 3 両カテゴリーの決勝ラウンドは同時におこなわれる。²⁰⁾各ボルダーで全ての選手が競技順に従ってアテンプトをおこなう²¹⁾。両カテゴリーの各ボルダーでの競技は同時に開始される。すなわち、あるカテゴリー

¹²⁾前ラウンドとは異なるものにするという意味か？

¹³⁾原文は”No separate observation period is allowed as the observation period is part of the allocated time for the problem-routes.”。意味がとりにくいが、こうとしか読めないと思う。ボルダリング競技では、アテンプト以外の地上にいる期間は、全てオブザベーションということだ。

¹⁴⁾厳密に言えば、登ればアテンプトを1回行ったものとしてカウントされる、ということだろう。

¹⁵⁾ルートセッターが、オブザベーション時にはわかりにくいホールドの有効な場所を明示したり、ルーフ上の見えないホールドの位置を示すためにルーフ下に付けたりするチョークによるマーキングのこと。

¹⁶⁾従来、これはイエローカードの対象だったが、05年に変更された。この変更で、これらの行為を戦略的に行うことが可能となったわけである。また05年には壁に触れることも含まれていたが、06年にはホールドのみに限定された。

¹⁷⁾決勝のクライミング時間は6分間だったものが2008年に4分に減じられた(競技時間の短縮を意図した変更である)。それと引き替えの形でこの規定が追加された。方法としては決勝に先立って、全てのボルダーを順番に下見する。

¹⁸⁾この競技時間は2006年に6分間に固定となり、2008年に予選は5分に、2010年に準決勝も5分に減じられた。

¹⁹⁾原文は”Each boulder include...”なのでこう訳したが、ボルダーがエリアをincludeするというのは表現としておかしいような気がする。

²⁰⁾The final round for both categories shall be run simultaneously .

²¹⁾原文では最後に”before moving on to the next problem”と続くが、下手に訳出すると誤解を招くのであえて略した。

の全選手があるボルダーでの競技を終えたら、そのカテゴリーの選手は、他のカテゴリーを待って次のボルダーでの競技を始めねばならない。

5.4.4 決勝ラウンドでのクライミング時間は4分間とする。ただし、選手が4分間経過前にアテンプトを開始した場合、そのアテンプトを完了することは認められる。4分間経過以前にそのアテンプトを終えた選手は、トランジット・エリア²²⁾エリア内の第2アイソレーション²³⁾に戻り、次の選手が直ちにそのローテーション・ピリオドを開始する²⁴⁾。

5.4.5 選手の各アテンプトは、5.1.8に定めるスターティング・ポジションから開始されねばならない。²⁵⁾

5.4.6 予選と準決勝の各ローテーション・ピリオドの始め(と終わり)は大きく明瞭な合図²⁶⁾で報されねばならない。残り時間が1分になった時、別の合図でそれが報されねばならない。

5.4.7 全てのホールドはボルダー・ジャッジまたは主催者側スタッフにより、選手がそのボルダーの最初のアテンプト開始前にクリーニングされねばならない。また選手は、いずれのアテンプト開始前でもホールドのクリーニングを要求することができる。選手は地面から届くところのホールドをブラシまたはそのほかの道具類でクリーニングすることができる。使用できるブラシまたはその他の道具類は、主催者が専用を用意したものに限られる。

5.5 アテンプトの開始と終了

5.5.1 アテンプトは選手の身体のあらゆる部位が地面から離れたときに開始したものと見なされる。²⁷⁾

5.5.2 アテンプトは、選手が5.1.10に規定されたボルダーの終了点に達したことをボルダー・ジャッジが認め、"OK"と宣告したときに完登と見なされる。

5.5.3 選手のルート²⁸⁾でのアテンプトは、以下の場合に成功しなかったと見なされる。

- a) 5.4.5にあるスターティング・ポジションに達せられなかった場合。²⁹⁾
- b) 選手が、3.2.1で認められている以外の、あるいは3.2.2にあるところの使用制限された壁の一部分、ホールド、はりばてを登るために使用した場合。³⁰⁾
- c) いずれの部位であれ選手の身体が地面に触れた場合。³¹⁾
- d) 予選と準決勝ラウンドでは、ローテーション・ピリオドの終了までに完登できなかった場合。
- e) 選手がボルダー・ジャッジから指示されたようにスタートしなかった場合。³²⁾

アテンプト数はまた、以下の場合もカウントされる。

²²⁾この"transit"も以前からある用語だが、今ひとつ定義が曖昧。競技前に入るアイソレーションと競技エリアの間にある場所(アイソレーションから競技エリアへの通路など)を総称するようだ。またコール・ゾーンもトランジットに含めて考えられると思う。いずれにせよこのあたりの用語は、厳密に区別して定義/使用されてはならないような節がある気がする。

²³⁾"separate isolation" 競技前に入るアイソレーションとは別のアイソレーション

²⁴⁾2007年までは、このトランジットにもウォームアップ設備を要求していたが、2008年にその文言は削除された。

²⁵⁾原文は"Each attempt of a competitor shall start from the starting position as defined in Article 5.1.8 before climbing on."。末尾の"before climbing on"は不要ではないか? 2008年でもこの表現はあるが.....

²⁶⁾"signal"

²⁷⁾5.1.8のスターティング・ポジションの定義の変更とあわせ、従来のアテンプト開始に関する規定の問題点は解消されたように思う。

²⁸⁾原文が"boulder"ではなく"route"になっているので、そのまま訳してある。

²⁹⁾無論これは、両足のスターティング・ポジションも指定されている場合のみ。

³⁰⁾この表現は、何故がリードでの規定(4.11.1c)と意味は同じようなものなのに異なっている。

³¹⁾従来は"return"だったのが、2010年に"touch"に変更された。従来は"return"だったので、足がマットに擦れる程度はOKだったが、"touch"となるとマットに足が擦っただけでアテンプトは終了とせざるを得ない。その一方でなぜか、リードの対応する部分の表現が、"touch"から"return"に改められている(4.11.1h)。このあたりの整合性は疑問である。

³²⁾原文は"the competitor doesn't start as indicated by the boulder judge."。具体的にどのような状況を指すのか不明。確かに、スターティング・ポジションがわかりにくいような場合は、ボルダー・ジャッジが最初に指示をおこなうが、それを指すのか?

f) スターティング・ホールド (5.3.2 参照) 以外のホールドに、手足で触れる、あるいはチョークをつけた場合。

g) ティックマークを付け加えた場合 (5.3.2 参照)³³⁾。

5.5.4 5.5.3b) ~ c) の違反の場合、ボルダー・ジャッジは選手に登るのをやめるよう通告しなければならない。

5.6 テクニカル・インシデント

5.6.1 テクニカル・インシデントを被った選手の、テクニカル・インシデントが発生したアテンプトの後の、その同じボルダーにおける最初のアテンプトは、そのアテンプト³⁴⁾の継続と見なされる³⁵⁾。

テクニカル・インシデントを被った選手が修復完了後アテンプトを再開する際には、選手は2分を最低として³⁶⁾、インシデント発生時の残り時間が認められる。

5.6.2 予選及び準決勝ラウンド中のテクニカルインシデント

a) 確認されたテクニカル・インシデントが当該ローテーション・タイムの終了前に修復された場合、被害選手はそのアテンプトを継続するかどうかを申し出る機会を与えられる。

(i) 選手が継続することを選択した場合、テクニカル・インシデントは終了し、以後、それ以上の申し立ては認められない。

(ii) 選手が、その当該ローテーション・ピリオド内での継続を選ばない場合、選手はテクニカル・インシデントが発生したボルダーへのアテンプトをジューリ・プレジデントが決定したローテーション・ピリオドにおいて継続しておこなう³⁷⁾。

b) テクニカル・インシデントの修復が当該ローテーション・タイムの終了前に完了しなかった場合、ローテーション・タイム終了の合図の時点で、そのラウンドはテクニカル・インシデントを被った選手、及びそれ以前のボルダーにいた全ての選手について IFSC ジャッジにより停止される。それ以外の全ての選手はラウンドを継続する。テクニカル・インシデントを被った選手が、修復完了後にそのアテンプトのやり直しをおこなった後、競技を中断させられていた全選手の競技がローテーションタイムの区切りの合図で再開される。

5.6.3 テクニカル・インシデントが決勝ラウンドで発生した場合、テクニカル・インシデントを被った選手はトランジット・ゾーン内の別のアイソレーション³⁸⁾に戻り、修復を待たねばならない。修復完了時に、選手はそのアテンプトを再開する。

5.7 各ラウンド後の順位

5.7.1 競技会の各ラウンド後、選手は以下の基準³⁹⁾で順位付けされる。⁴⁰⁾

³³⁾ "see Article 5.3.2" とあるが、正確にはこれらの行為を地面の上から (とすることはアテンプトをおこなっていない時 = オブザベーション中) おこなった場合の話であり、5.3.2 の規定を繰り返し述べているに過ぎない。冗長なだけで不要と思う。

³⁴⁾ テクニカル・インシデントで中断されたアテンプト。

³⁵⁾ ボルダリング競技の場合、完登もしくは、ボーナス・ポイントに達するまでのアテンプト数が少ない方が上位になる。従って、テクニカル・インシデントで中断されたアテンプトと、再開後のアテンプトをともに1回にカウントしたら、その選手は不利になってしまう。そうならないために、例えば、テクニカル・インシデントが2アテンプト目で発生し、再開後の最初のアテンプトで完登した場合、完登までのアテンプト数は2回とカウントするということである。また、ボーナスポイント保持以後にアテンプトが発生し、再アテンプト時には、ボーナスポイントまで達することができなかったとしても、そのアテンプトでのボーナスポイントが認められる。

³⁶⁾ 残り時間が2分を切っていた場合は、2分が与えられる。

³⁷⁾ 2011年の改訂。従来は、他の選手全てが競技を終了した時点でおこなうとされていた。この場合、インシデントを被った選手は、非常に長時間、インシデント用アイソレーションで待たねばならない。それを解消するためにこうした変更が行われたのだろう。だが現実問題として、最初の課題以外は他の選手のローテーションに割り込むことは難しいと思われる。

³⁸⁾ 原文は "separate isolation" で、決勝でそのアテンプトを終了した選手のアイソレーションと同じ表現をしているが、アテンプトを終えた選手と同じアイソレーションと言うわけには行かないだろう。

³⁹⁾ "criteria"

⁴⁰⁾ 理想的には、各ボルダーについて1/3がボーナス・ポイントの下、1/3がボーナス・ポイントまで、1/3が完登となる設定がベストとのことである。

- a) 完登したボルダー数。
- b) 完登までのアテンプト数の合計。
- c) ボーナス・ポイントの数。
- d) ボーナス・ポイントに到達するまでのアテンプト数の合計。⁴¹⁾

5.7.2 同着がある場合、先行するラウンドにさかのぼって、カウントバックを適用する。カウントバックは、先立つラウンドが2セットのボルダー群で競技がおこなわれた場合には適用されない。

5.7.3 カウントバックを適用後も決勝ラウンドで第1位に同着がある時、一つのボルダーでスーパー・ファイナルをおこなう。それぞれの同着の選手は決勝と同じ順番で、ただ1回のアテンプトのみおこなう。競技時間は、チーフ・ルートセッターとの協議によりあらかじめ設定され、アテンプトは40秒が経過する前に始められなければならない。各選手の競技結果は、リード競技規則の4.8.1、4.8.2、4.8.3にしたがって判定される。そのアテンプト後、選手は順位付けされる。複数が完登した場合、引き分けとなり最終順位が公表される。完登がなく1位に同着があった場合、1位の選手は同じ手続きに従い、決着がつくまで最大6回のアテンプトをおこなう。6回のアテンプトの後、同着があった場合は引き分けとなる。

5.8 各ラウンドの定員

5.8.1 5.8は5.7を併せて参照のこと。順位付けは5.8が適用される前に終了していなければならない。

5.8.2 準決勝ラウンドの定員は20名、決勝ラウンドは6名とする。カウントバック適用後も同着があるために、準決勝ラウンドまたは決勝ラウンドの定員を超過した場合、多い方の人数の選手が(次の)ラウンドに進むものとする。

5.8.3 予選ラウンドが2グループの選手で行われる場合、次のラウンドへの定員は等分され両グループに割り当てられる。

5.8.4 定員枠は前のラウンドで上位となった選手で埋められる。

5.8.5 進出枠を、同着の選手があるために超過してしまう場合、多い方の人数の選手が競技会の次のラウンドへ進むものとする。

5.9 抗議手続きとビデオ記録の使用

5.9.1 選手のアテンプトの公式ビデオ記録が作製され、抗議担当ジャッジが公式抗議を判定するのに使用される。

⁴¹⁾したがって、ジャッジ・ペーパーには、完登までと、ボーナス・ポイントの通過/保持までに要したそれぞれのアテンプト数が記入される。

6. スピード

6.1 概説

6.1.1 この規則はセクション3の一般規則を併せて参照すること。

6.1.2 スピード競技会は、通常予選ラウンドと決勝ラウンドからなる。

6.1.3 スピード競技会は、以下のいずれかで行われる：

- a) 同じ長さで、類似した形状¹⁾と難度の2本のルート(クラシック・フォーマット)
- b) それぞれ同一の長さ、形状、構成、難度の2本もしくはそれ以上の並置されたルート(レコード・フォーマット)

6.1.4 クラシック・フォーマットでは、各選手は予選ラウンドと決勝ラウンドの各対戦で両方のルートを登る。レコード・フォーマットでは、各選手は予選ラウンドでは2ルートを登るが、決勝ラウンドの対戦では、1ルートのみを登る。

6.1.5 レコード・フォーマットの競技会では、フラッシュ方式が用いられる。

6.2 安全性

6.2.1 全てのルートは、下方から操作されたトップロープで安全確保されて登られなければならない。使用するロープは、シングルロープとする。

6.2.2 トップロープは、二つの独立した支点²⁾を通さなければならない。それぞれは、公認されたもので適切に閉じられた8mmまたは10mmのマイロン・ラピッドで支点到確保された1枚の安全環付カラビナ付のクイックドロースリングからなる³⁾。

6.2.3 最高点の確保支点は、計時装置またはルートの終了シグナルのスイッチより上になければならない

6.2.4 確保支点が、選手のアテンプト中、その補助や妨害になったり、また危険をもたらすようなことがあってはならない。

6.2.5 クライミングロープは各選手のハーネスに次のいずれかによって結束される。

- a) 末端処理をおこなった8の字結びを用いて(直接)結ぶ⁴⁾。
- b) 横向き加重やゲートからはずれる可能性を最小限にしたタイプの⁵⁾安全環付きカラビナ⁶⁾を使用するか、または二つの安全環付きカラビナを互い違いに用いる。クライミングロープは端処理をおこなった8の字結びを用いて安全環付きカラビナに取付ける。

¹⁾原文は"similar profile"なので、壁の側面から見た形状を指すものと思う。

²⁾原文は"separate protection points"。

³⁾意訳。原文は"The top-rope shall pass through two separate protection points, each consisting of one locking karabiner secured to the protection point by a quickdraw sling and an approved and properly closed 8 mm or 10 mm Maillon Rapide." "each consisting of....."以下は、文章になっていないように感じるが、どうなのだろう。

⁴⁾ここはリードの4.5.1b)と同じ。

⁵⁾カラビナのデザインのことを言っているようだが、具体的にどのようなものかは不明。

⁶⁾"screwgate karabiner"

6. 2. 6 各ロープは2名のプレイヤーによって操作されねばならない⁷⁾。プレイヤーは壁の基部の、クライミング中に発生しうる、選手や破損したホールド、その他の器具の落下による事故を未然に避けられる場所に位置しなければならない。

プレイヤーは選手が登っている間、選手の進行状態に十分に注意を払って以下のことを守らなければならない。

- a) ロープをむやみにタイトにしたり緩めたりして、選手の動作を妨げることがないようにする。
- b) 全ての墜落は安全に停止させねばならない。
- c) 選手を必要以上に長く墜落させてはならない。
- d) 墜落した選手が壁が重なった部分のエッジや、その他クライミングウォールのいかなる部分によっても負傷することがないように十分な注意を払わねばならない。

6. 2. 7 完登後または墜落した後、選手は地面へロワーダウンしなければならない。選手が地面にあるものに接触しないように、十分な注意が払われなければならない。

6. 2. 8 全ての不要な用具類（カラビナ、クィックドロワー、ハンガーなど）はルート上から取り除かれていなければならない。

6. 2. 9 ルートは選手がお互いに、妨害したり、過度に気をとられたりすることのないように設定されなければならない。もしルートのラインが垂直でないときは、反対方向へ向けてそれるように設定しなければならない⁸⁾

6. 3 ルート・タイムの計時

6. 3. 1 クライミング・タイムは機械的電氣的、または手動のいずれかで計時され、小数点以下第2位（0.01秒）までが記録され、リザルトに表示され発表されるものとする。

6. 3. 2 機械的電氣的計時を利用する場合、クライミング・タイムは0.01秒までの精度で測定されねばならない。システムは0.1秒の反応時間を考慮に含めるものとし、スタートの合図後の0.1秒以内のスターティングパッド⁹⁾の信号はスタートの失敗を意味する¹⁰⁾。

6. 3. 3 いかなるアテンプト中であれ、計時システムに問題が生じた場合、手動による計時結果はこの場合、成績決定に使用してはならない¹¹⁾。

6. 3. 4 手動計時を利用する場合、各ルートはスイッチで操作される赤いインジケーター・ランプと、可能な音響信号を備えねばならない。各ルートはジャッジと、それぞれがストップ・ウォッチを操作する2人のアシスタントによって計時される。アテンプトをおこなうそれぞれの選手の完登時間は、計時エラーを排除するために、2台のストップウォッチの記録の相加平均をとってジューリ・プレジデントにより記録される¹²⁾。

⁷⁾1名が確保器具をつけて普通に確保し、もう1名はひたすら選手の動きに遅れぬようにロープをたぐる。

⁸⁾わかりにくいいい回しだが、要するに直上していない場合は、右側のルートが右上ならば左側のルートは左上、ということだと想像する。

⁹⁾6.11.2にある"timing device"を指すのだろうか？

¹⁰⁾原文は"The system shall incorporate a reaction time of 0.1 second, i.e. a starting pad signal within the first 0.1 second after the starting signal implies a false start."。選手のスタート合図からの反応時間は最低でも0.1秒である、という前提で、スタートの合図から0.1秒以内にスターティングパッドから選手の足が離れたら、それはフライングとみなす、ということと思われる。スピードのルールはそれを主導するロシア人が書いているのだろうが、全体に意味不明の英文が多いし、明かな誤字誤植もある。

¹¹⁾ここは、かなり意識した。原文は"Manual timing shall then not be used to determine the result of the attempt."である。

¹²⁾原文は"Each route shall be timed by a judge and two assistants, operating a stopwatch each. The time of each competitor for completing his/her attempt shall be recorded by the Jury President taking into account the average of the stop watches, and eliminating obvious spurious timing errors."。

6.4 ルートの完登

6.4.1 ルートのアテンプトは、選手が規則に従って登り、計時スイッチをその手で叩いたとき完登と見なされる。

6.4.2 選手はスタートに失敗した場合、あるいは以下の場合、ルートを完登したものと見なされない。

- a) 墜落した。
- b) 3.2.2 に従って使用制限された（壁の）一部分、ホールド、はりぼてを使用した。
- c) 壁の両サイドと上のエッジを使用した。
- d) スタート後、体の一部が地面に触れた。
- e) 人工登攀を行った。

6.5 リザルトの提示

6.5.1 競技会の各ラウンドにおける各選手の順位、タイムの速報¹³⁾はリザルト決定後、観客とコーチに対し、提供されねばならない。

- a) 電光掲示（ボードまたはスクリーン）。
- b) a) が不可能な場合は公式の競技会用掲示板。

6.5.2 最終リザルトでは、全てのラウンドの全てのルートにおける選手の所要時間を公表（報告）しなければならない。

6.6 予選ラウンド クラシック・フォーマットの場合

6.6.1 予選と決勝ラウンドを同日中におこなう場合、両ラウンドのルートは同じものを使用する。予選と決勝ラウンドを別の日におこなう場合、各ラウンドのルートは多少異なる¹⁴⁾ものにする。選手はそのことを前もって通知されねばならない。

6.6.2 予選ラウンドの競技順はその時点の世界ランキングの逆順とする。ランク外の選手は、そのラウンドの最初に無作為順で競技する。

6.6.3 各選手は、最初にルート1を登る。これを完登後に、ルート2へ進む。

6.6.4 各選手は両ルートの合計所要時間で順位付けされる。

6.6.5 もし選手がルートのうち1本を完登できなかったら、そこで敗退¹⁵⁾となり、成績は最下位になる。

6.7 予選ラウンド レコード・フォーマットの場合

6.7.1 予選ラウンドの競技順はランダムとする。選手は（ほぼ）同数の2グループに分けられる。

¹³⁾原文は”Information on the preliminary ranking place and climbing times of each competitor in each round of the competition”。

¹⁴⁾原文は”slightly different”。

¹⁵⁾原文は”eliminate”。これはリードの”stop”とも、罰則規定でいう失格（”disqualify”）とも違う概念。”eliminate”の場合、記録はゼロとして扱われる。ここがリードの”stop”との違い。失格ではないので順位は出るが、記録がゼロなので、順位は各ラウンド、各セットにおける最下位となる。

6. 7. 2 両ルートは並行して登られる、選手は常にペアになって競技をおこなう。選手は一つのルートでの競技を修了したら、他方のルートの競技順の最後に入る。

例

選手数が偶数（8名）	選手数が奇数（7名）
1 5	1 5
2 6	2 6
3 7	3 7
4 8	4 1
5 1	5 2
6 2	6 3
7 3	7 4
8 4	

6. 7. 3 各選手は2ルートのうち、良い方の所要時間¹⁶⁾をもとに、順位付けされる。

6. 7. 4 もし選手が両方のルートを完登できなかったら、そこで敗退となり、成績は最下位になる。

6. 8 決勝ラウンド クラシック・フォーマットの場合

6. 8. 1 決勝ラウンドの選手数は

- a) 予選ラウンドの完登選手が16人以上であれば、16選手が決勝ラウンドに進む。
- b) 予選ラウンドの完登選手が15～8人であれば、8選手が決勝ラウンドに進む。
- c) 予選ラウンドの完登選手が7～4人であれば、4選手が決勝ラウンドに進む。¹⁷⁾
- d) 予選ラウンドの完登選手が4人未満であれば、4選手が決勝に進めるまで予選をやりなおす。

決勝ラウンドは、以下のステージからなる：

8th・ファイナル、クォーター・ファイナル、そして常に行われるものとして準決勝と決勝¹⁸⁾。

6. 8. 2 決勝ラウンドは両ルートの合計時間で競う、勝ち抜き戦（"knock-out"方式）でおこなう。

エイト（1/8）・ファイナル（9位から16位）とクォーター・ファイナル（5位から8位）での敗者の最終リザルトはそのヒート¹⁹⁾のタイムによって決定する。

6. 8. 3 決勝ラウンドの最初のステージ²⁰⁾の組み合わせと競技順は、予選ラウンドの最終順位に従って以下のように設定される。

¹⁶⁾原文は"climbing time"。

¹⁷⁾このb)とc)の原文はそれぞれ"between 16 and 7"、"between 8 and 3"であるが、この数字をいかして日本語に訳すのは難しい。"未満"は良いのだが、超過する場合で未満に対応する表現が日本語にはない。また日本語の「15と8の間」は、15及び8を含むかどうか曖昧で、文脈によって異なるように思われる。

¹⁸⁾原文はそれぞれ"eighth final"、"quarter final"、"semi final"、"final"。

¹⁹⁾敗者となったヒート。

²⁰⁾ここでいう「ステージ」("stage")は、決勝ラウンドの中のクォーター・ファイナル(quarter final)なり準決勝(semi final)なりを指す。このステージ中の個々の対戦はヒート("heat")と呼ばれる。

その 1) 選手 16 名の場合

対戦番号	選手順位	対	選手順位
1	1 位		16 位
2	8 位		9 位
3	4 位		13 位
4	5 位		12 位
5	2 位		15 位
6	7 位		10 位
7	3 位		14 位
8	6 位		11 位

その 2) 選手 8 名の場合

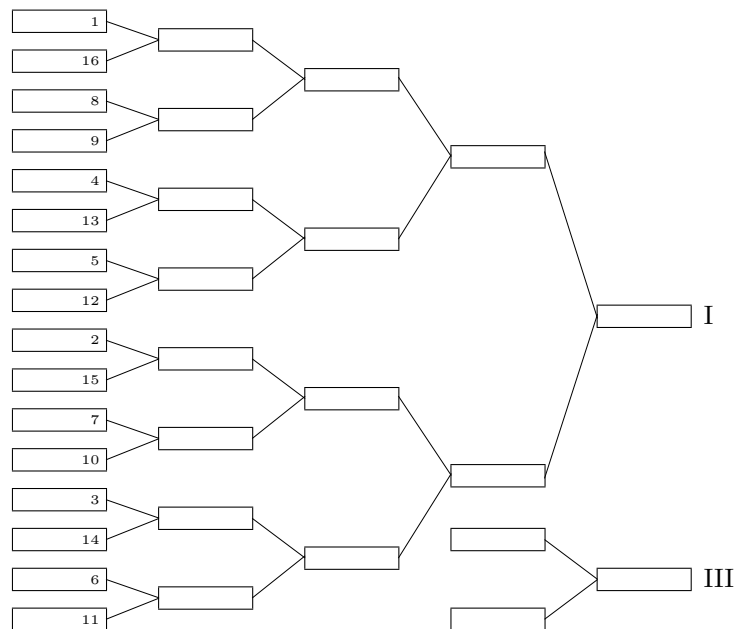
対戦番号	選手順位	対	選手順位
1	1 位		8 位
2	4 位		5 位
3	2 位		7 位
4	3 位		6 位

その 3) 選手 4 名の場合

対戦番号	選手順位	対	選手順位
1	1 位		4 位
2	2 位		3 位

決勝ラウンドの他のステージの競技順は次に示す図 1 による。

選手 16 名の場合



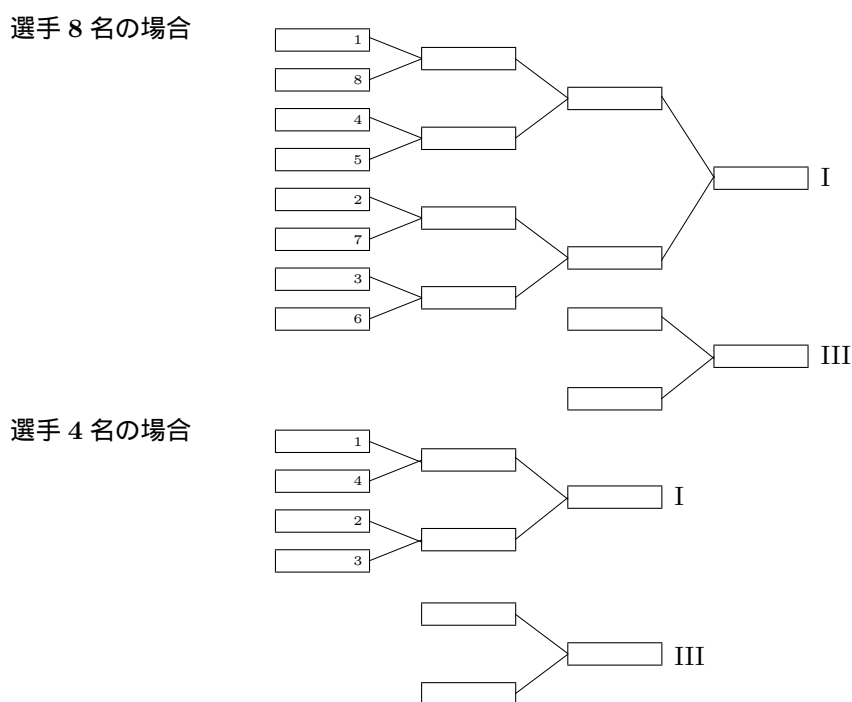


図 1：選手が 16 名、8 名、4 名の場合それぞれの決勝ラウンドの各ステージでの競技順
(ローマ数字は選手の最終順位を示す)

枠の中の順位が上位の選手が(クラシック・フォーマットの場合は)ルート 1 からスタートし、(2 レーンのレコードフォーマットの場合は)ルート 1 を登る。

6. 8. 4 選手がルートの 1 本を完登できなかった場合、そのステージの最下位となり、他方の選手がその対戦の勝者となる。両方の選手がルートの 1 本を完登できなかった、あるいは選手の 1 人がルートの 1 本を完登できず、他方の選手が 2 回スタートを失敗した場合は、ただちに勝者が決するまで再試合を行なわなければならない。

注意：選手が墜落しても以下の場合、敗退とはならない。

- a) 決勝ラウンドで両方の選手が墜落した場合(両名とも再スタート)
- b) 選手の 1 人がルートの 1 本を完登できず、他方の選手が 2 回スタートを失敗した場合
- c) 準決勝ステージの場合(3 位/4 位決定戦(スモール・ファイナル)へ進む)

6. 8. 5 3 位/4 位決定戦(スモール・ファイナル)は、1 位/2 位を決定する対戦の前に実施する。

6. 9 各ラウンド後の順位付け

6. 9. 1 競技会の各ラウンド終了後、選手は 6.6.4、6.7.3、6.8.2 に従い、順位付けされる。

6. 9. 2 同着の選手の扱い

- a) 決勝ラウンドへの進出ライン上同着の選手がいて、予選通過選手数が 6.8.1. に定める定員を越えている場合、これら同着の選手は決勝に進出できない。その選手の順位は同順位とする。
- b) 予選ラウンドで 2 名以上の同着の選手が、決勝ラウンドへの進出者の中の最下位以外のいずれかの順位にいる場合は、それらの選手の決勝ラウンドの競技順は無作為に割り振られる。
- c) 2 名の選手が決勝ラウンドの準決勝か決勝のステージで同着となったら、その 2 名で決定戦²¹⁾をおこなう。

²¹⁾原文は"additional elimination heat(s)"。

- d) 決勝ラウンドの上記以外のステージで同着があったら、勝者は決勝ラウンドの先立つステージの結果によって、もしそれが決勝ラウンドの最初のステージの場合は、予選ラウンドのリザルトで勝者を決定する。

6. 10 競技順と順位 - レコード・フォーマット、4 レーン

6. 10. 1 予選と決勝ラウンドは、グループでおこなわれる。各 2 名から 4 名の選手からなる各グループで競技をおこなう。グループの数は、選手数に基づいて下の表のように決定される。

選手数	グループ数
4	決勝のみ予選は該当せず
5-8	2
9-12	3
13-16	4
17-20	5
21-24	6
etc.	etc.

6. 10. 2 予選ラウンドの競技順は、以下の手順で作成される。

- a) 選手の配分リスト²²⁾をその時点の各選手の世界ランキングの順位に基づいて作成し、ランク外の選手はリストの後半に無作為に追加する。
- b) 選手は、配分リスト順に下の表の例のようなやり方で、ジグザグにグループに割り当てられる。

グループ	割り当て順			
A	1	10	11	
B	2	9	12	
C	3	8	13	18
D	4	7	14	17
E	5	6	15	16

18 名を 5 グループに振り分ける例

グループ	割り当て順			
A	1	8	9	16
B	2	7	10	15
C	3	6	11	14
D	4	5	12	13

16 名を 4 グループに振り分ける例

- c) グループ内の競技順はランダムに決定される。

6. 10. 3 予選ラウンドでは、各選手は 2 回登る。全てのグループが 1 回目を登り終えたら、同じ競技順でルート A を最初に登った選手はルート D を (ルート D を登った選手は、逆にルート A を²³⁾) 登る。ルート B を最初に登った選手はルート C を (ルート C を登った選手は、逆にルート B を²⁴⁾) 登る。

最初のアテンプトの後、ルート A の選手はルート D を登る (ルート D を登った選手がいた場合は、逆にルート A を登る²⁵⁾)。ルート B の選手はルート C を登る (ルート C を登った選手がいた場合は、逆にルート B を

²²⁾原文は"seeding list"

²³⁾原文は単に"and vice versa"とある。

²⁴⁾原文は単に"and vice versa"とある。

²⁵⁾要するにルート A とルート D の選手が入れ替わると言うこと。原文は"visa versa if applicable"。前段の"visa versa"は正しくは"vice versa"で、この表現は、"consequently misspelt as visa versa"だそう。後段の"if applicable"は、訳出したようにルート D に選手がいればそれができるが、いなければそれはできないので、そういう表現になっているのだと思われる。

登る)。

各選手の成績は、2回の競技のうちより良い方の所要時間で決定される。

予選の順位は選手の予選ラウンドの成績に基づき、最も所要時間の短かった選手が1位になる。

6.10.4 2名以上の選手が決勝ラウンドへの通過線上で同着の場合²⁶⁾、これらの選手は誰も決勝に進むことはできない。

6.10.5 予選ラウンドで選手が、両方のアテンプトで完登できなかった場合、その選手は敗退となり、成績は最下位となる。

6.10.6 決勝ラウンドへの進出選手数：

- a) 参加選手数²⁷⁾が、16名以上ならば、16名が決勝ラウンドに進出する。
- b) 参加選手数が、8名から15名ならば、8名が決勝ラウンドに進出する。
- c) 参加選手数が、5名から7名ならば、4名が決勝ラウンドに進出する。²⁸⁾

6.10.7 決勝ラウンド

決勝ラウンドは以下のステージから構成される：

クォーター・ファイナル、準決勝、決勝(必ず実施)。各ステージは選手数に応じて、先に示した1つもしくはいくつかのヒートから構成される。

6.10.8 決勝ラウンドの最初のステージの競技順は、以下の手順で作成される：

- a) 選手は予選の順位にしたがい、以下の方法で、ジグザグに各ヒートに割り当てられる。

選手16名 / クォーター・ファイナル・ステージ

ヒート	予選順位			
A	1	8	9	16
B	2	7	10	15
C	3	6	11	14
D	4	5	12	13

選手8名 / 準決勝・ステージ

ヒート	予選順位			
A	1	4	5	8
B	2	3	6	7

²⁶⁾原文は”If two or more competitors are tied for the last places or places to qualify for the final round”。あまりにまだらっこしい表現なので、あきらめて意訳。

²⁷⁾”number of registered competitors”

²⁸⁾この部分の原文は、6.6.6b)、c)と同様”between 7 and 16”、”between 3 and 8”である。

選手 4 名 / 決勝・ステージ

ヒート	予選順位			
A	1	2	3	4

予選ラウンドで選手がルートを完登できず、上の表にあるより少ない人数しか決勝に進出しないことがある。それでも、進出した選手についての競技順作成手順は変更されない。

6. 10. 9 各ヒートで、より少ない所要時間で完登した 2 名が、決勝ラウンドの続くステージに進出する。残りの選手は、決勝ラウンドのそのステージの成績で順位が決定される。

6. 10. 10 準決勝では、クォーター・ファイナル・ステージのヒート A から準決勝・ステージに進出した選手は、ヒート D から進出した選手と対戦し²⁹⁾、ヒート B から進出した選手は、ヒート C から進出した選手と対戦する。

6. 10. 11 決勝ラウンドの決勝・ヒートでは、選手はそのヒートの所要時間で順位を決定される。

6. 10. 12 もし選手が、決勝ラウンドで完登できなかつたら、決勝ラウンドのそのステージの最下位となり、以後のヒートには進出できない。全ての選手が完登できない、または 2 回スタートに失敗した場合、そのヒートはただちに勝者が決定するまで繰り返されねばならない。

6. 10. 13 2 名もしくはそれ以上の選手が、決勝ラウンドの決勝・ヒートで 1 位同着になったら、同着になった選手の間で決着がつくまで、1 回もしくは数回の決定戦を行って、勝者を決定する。

2 名もしくはそれ以上の選手が、決勝ラウンドのそれ以外のヒートで同着になったら、その順位は決勝ラウンドの先立つステージの結果によって、もしそれが決勝ラウンドの最初のステージの場合は、予選ラウンドの結果で勝者を決定する。それでもなお同着がある場合は、続いて先行するステージ³⁰⁾でカウントバックを適用する。

6. 11 競技順および順位付け レコード・フォーマット 他のレーン数の場合

6. 11. 1 IFSC はレーン数が 2 及び 4 以外の場合の記録形式の規定を別途公表する。

6. 12 デモンストレーションおよびオブザベーション

6. 12. 1 チーフ・ルートセッターまたはルートセッター・チームのいずれかにより、ルートのデモンストレーションが行われる。

6. 12. 2 各ルートでは 2 回デモンストレーションをおこなう。1 回はゆっくり、もう 1 回は競技の際の速さで登る。各デモンストレーション後、続いて各ルートについてオブザベーションタイムが取られる。

6. 12. 3 レコード・フォーマットが適用される場合、デモンストレーションは 1 本のルートのみで行われる。

6. 12. 4 オブザベーション期間の長さは 4 分間で、 Jury・プレジデントはこれを延長することができる。

6. 12. 5 選手は、出だしのホールドに地面から足を離すことなく触れることが許される。

²⁹⁾原文は”Competitors qualifying for the semi final stage from heat A in the quarter final stage shall be placed in the same semi final heat as the competitors qualifying from heat D”。良くもこう、持って回った言い回しを思いつくものだ。

³⁰⁾”successively earlier stages”

6. 13 クライミングの手順

6. 13. 1 開始が宣言されたら、選手は壁の前、約 2m の位置に来なければ³¹⁾ならない。

6. 13. 2 スタートの合図の場所は、両方/もしくは全ての選手から等距離になければならない。スターター³²⁾は IFSC 役員以外とする。

6. 13. 3 両方/もしくは全ての選手がポジションに入ったら、スターターは「At your marks」と指示する。”At your marks”の指示で、それぞれの選手は片足を地面または計時機器（使用される場合）³³⁾に、もう一方の足を最初のホールドに置き、片手または両手を壁にかけて、スターティング・ポジションに入らなければならない。選手がスターティング・ポジションに入り静止したらただちに、スターターは「Ready?」と声をかける。いずれの選手からも、準備ができていない旨の明確な申告がなければ、スターターは「Attention」と声をかけ、わずかに（2 秒未満）置いて、短く（0.2 秒未満）大きく明瞭なスタート信号か、手動計時の場合は「Go!」と合図をする。全ての肉声による指示は、大きく明瞭に発せられねばならない。スタート信号前³⁴⁾にあける間は、競技会の進行の中で変化しても良いが、2 秒未満で³⁴⁾なければならない。

6. 13. 4 スタートの合図が指示があったら、各選手はそのアテンプトを開始しなければならない。スターターが「Ready?」と尋ねた時に準備ができていないことを明瞭に告げた場合を除き、スタートの指示に対する抗議は一切許されない。

6. 13. 5 スターターがスタートの指示を肉声で発する場合は、あらゆる雑音その他の、注意をそらせスタートの合図を明瞭に聞き取ることを妨げるものは、選手によっても、ジャッジによっても立てられてはならない。

6. 13. 6 スタートに失敗した場合、スターター³⁵⁾は双方の選手を直ちに停止させなければならない。この指示は、大きく明瞭に発せられなければならない。一人の選手が予選ラウンドまたは決勝ラウンドの同一ヒートで 2 回スタートに失敗したら、敗退となる。

6. 13. 7 各選手はルートの終了点に達したら、スイッチを手で叩いて計時装置を停止させねばならない。

6. 13. 8 フラッシュ形式で行う場合を除き、予選ラウンドで完登後、選手は別のアイソレーション・ゾーン³⁶⁾にもどり、ルートジャッジから要請があるまでとどまらねばならない。

フラッシュ形式で行う場合を除き、決勝ラウンドの対戦の終了後、以後の対戦に勝ち残った選手は、別のアイソレーションに戻らなければならない。

6. 14 テクニカル・インシデント

6. 14. 1 スピード競技におけるテクニカル・インシデントとは以下のようなものである。

- a) ホールドの破損または緩み。
- b) ロープが張られることで選手の補助になった。
- c) ロープが緩められることで選手の妨害になった。

³¹⁾原文は”take up”

³²⁾スタートの合図をおこなう係。2008 年までは IFSC ジャッジの担当だったが、2010 年の改訂で何故か IFSC 役員「以外」(= The starter shall not be one of IFSC officials.) になった。

³³⁾選手のフライングを判定するためのデバイスだと思われる。P.34 参照。

³⁴⁾shorter than 2 seconds

³⁵⁾これは 2008 年まではルートジャッジの仕事だった。スターターは IFSC 役員ではないということだが、ここまでやらせるとなると、国内審判などの資格は必要ないのだろうか？

³⁶⁾”a separate isolation zone”

d) 計時システムの故障。

e) その他、選手の動作の結果ではないところのことがらが、選手に不利または有利にはたらいた。

6. 14. 2 選手が、テクニカル・インシデントによってそのアテンプトが中断された場合、修復完了後、直ちにあらたにアテンプトをおこなう。

選手が、クラシック・フォーマットの予選ラウンド以外のいずれかの対戦で、テクニカル・インシデントによってそのアテンプトが中断された場合、他の選手は登り続けるものとする。テクニカル・インシデントが確認された場合は、全選手で再競技をおこなう。

フラッシュ形式で行う場合を除き、テクニカル・インシデントをこうむった選手は、修復が完了するまで別のアイソレーションで待機しなければならない。これはクラシック・フォーマットの予選ラウンドで、テクニカル・インシデントが発生しなかった方のルートを完登した選手が、まだもう一方のルート³⁷⁾のアテンプトを行っていない場合、同様に適用される。³⁸⁾

最低 5 分の回復時間が、テクニカル・インシデントを被った選手に認められる。

6. 15 スピード世界記録

6. 15. 1 IFSC スピード世界記録は、IFSC が別途発行する”the IFSC Homologated Speed Wall”の仕様に従ったクライミングウォールに設定された、IFSC が公式に標準化し認定したスピード競技ルートでのみ認められる。こうした壁は高さは 10m または 15m、ルートあたりの幅が少なくとも 3m で、5 度前傾したものである。

6. 15. 2 10m の壁で男女別に一つの世界記録が、また 15m の壁で男女別に一つの世界記録が認定される。さらにユースの全年齢別グループごとに男女各カテゴリーの世界記録が認定される。

6. 15. 3 世界記録の計時は IFSC の機械的/電氣的計時システムで測定されねばならない。

6. 15. 4 世界記録は、IFSC の公式日程表に記載され、IFSC が指名したジューリ・プレジデントのいる大会でのみ認定される。

6. 15. 5 世界新記録は、ジューリ・プレジデントにより IFSC に報告されねばならない。

³⁷⁾ =テクニカル・インシデントが発生したルート

³⁸⁾ わかりにくい表現だが、テクニカル・インシデントが発生した場合、選手 A が競技中断、選手 B が競技続行となる。テクニカル・インシデントが発生したのが後に登る方のルートであれば、選手 B はアテンプト終了後、テクニカル・インシデントが修復され選手 A の再アテンプトが終わるまで、アイソレーションに入ることになる。テクニカル・インシデントが発生したのが先に登る方のルートの場合は、この必要はない。

7. チーム・スピード

7.1 概説

チーム・スピードに固有の規則はセクション 7¹⁾に記載されている。(スピードと)共通の規則はセクション 7にはなく、セクション 6 で規定されるところを参照されたい。例えば 6.2~6.5 などである。

7.1.1 チーム・スピードに使用する壁は、4本のレコード・フォーマット用のもので、左から右にルート A1、A2、B1、B2と呼ぶ。ルート A1とB1は二つの独立した確保システムを備え2組の確保チームが置かれねばならない。ルート A2とB2は一つの確保システムを備え一つの確保チームが置かれねばならない。確保システムと確保の方法は 6.2 にしたがうものとする。

7.1.2 チーム・スピード競技会は通常、予選ラウンドと決勝ラウンドから構成される。

7.1.3 チームは3名の選手で構成される。3名の内、最低1名は女子でなければならない。

7.1.4 チームの各選手は、予選ラウンドでは1回のみ登り、決勝では各ヒートで1回ずつ登る。

7.1.5 各加盟団体は、2チームまでを参加登録することができる。

7.2 競技順と順位付け

7.2.1 予選ラウンドの競技順はランダムとする。

7.2.2 予選ラウンドでは、各チームはそのチームの時間記録の合計で順位付けされる。

7.2.3 予選ラウンドでチームの1人が完登できなかった場合、そのチームは敗退とされ最下位となる。

7.2.4 決勝ラウンドのチーム数

a) 予選ラウンドで完登したチーム数が8以上の場合、8チームが決勝に進む。

b) 予選ラウンドで完登したチーム数が8未満で3より多い場合、4チームが決勝に進む。

c) 予選ラウンドで完登したチーム数が4未満の場合、2チームが決勝に進む。

d) 予選ラウンドで完登したチーム数が2未満の場合、最低2チームが決勝に進めるまで予選ラウンドをやり直す。

決勝ラウンドは以下のようなステージから構成される：準々決勝ステージ、準決勝ステージ、決勝ステージ²⁾。

7.2.5 決勝には、予選ラウンドでより少ない時間記録を出したチームが進出する。

7.2.6 決勝ラウンドは、チームの時間記録で決する勝ち抜き戦でおこなう。

5位から8位は、準々決勝ステージでの敗者の時間記録で決定する。

決勝に3チームより多く進出した場合は常に3位/4位決定戦をおこない、必ず勝利チームを決定しなければならない。

¹⁾原文は"Chapter 7"だが、他では"Section"と表記されているので整合性をとるために、こう訳している。以下も同様。

²⁾それぞれ"a quarter final stage"、"a semi final stage"、"a final stage"。ここはカタカナ表記の方が良いかも知れない。

7. 2. 7 決勝ラウンドの最初のステージの競技順は、予選ラウンドの順位に基づき以下のように決定する。

その1：8チームの場合

対戦番号	チーム順位	対	チーム順位
1	1位	対	8位
2	4位	対	5位
3	2位	対	7位
4	3位	対	6位

その2：4チームの場合

対戦番号	チーム順位	対	チーム順位
1	1位	対	4位
2	2位	対	3位

その3：2チームの場合

対戦番号	チーム順位	対	チーム順位
1	1位	対	2位

決勝ラウンドの各ステージの競技順を以下の図2に示す。

その1) 選手16名の場合

対戦番号	選手順位	対	選手順位
1	1位		16位
2	8位		9位
3	4位		13位
4	5位		12位
5	2位		15位
6	7位		10位
7	3位		14位
8	6位		11位

その2) 選手8名の場合

対戦番号	選手順位	対	選手順位
1	1位		8位
2	4位		5位
3	2位		7位
4	3位		6位

その3) 選手4名の場合

対戦番号	選手順位	対	選手順位
1	1位		4位
2	2位		3位

決勝ラウンドの他のステージの競技順は次に示す図1による。

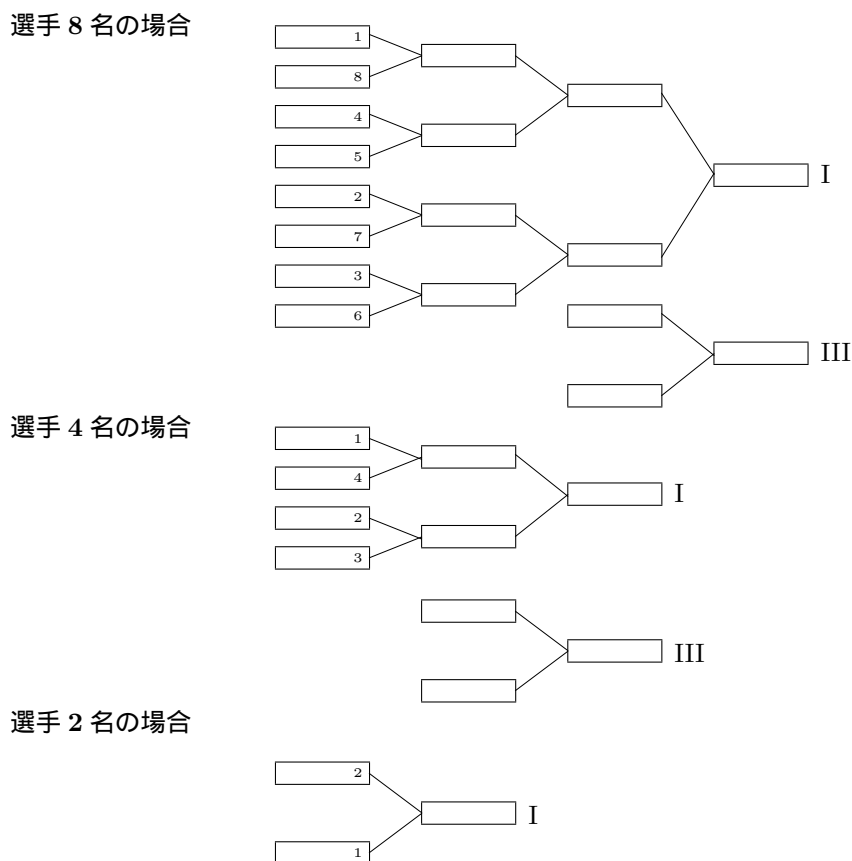


図 2：選手が 8 名、4 名、2 名の場合それぞれの決勝ラウンドの各ステージでの競技順
(ローマ数字は選手の最終順位を示す)

枠の中の順位が上位のチームがルート A1 と A2 を登り、枠の中の順位が下位のチームがルート B1 と B2 を登る。

7. 2. 8 決勝ラウンドで完登できなかった場合

- a) チームの内 1 名の選手が決勝ラウンドの対戦で完登しなかった場合、そのチームは敗退となり相手チームが両者の間の勝者と宣言される。
- b) 両チームの選手が完登しなかった場合はただちに、その対戦を勝者が決定するまで繰り返しおこなう。

7. 2. 9 同着のチーム

- a) 決勝ラウンドへの通過線上に同着のチームがあって、決勝進出チーム数が 7.2.3 に定める定数を超える場合、これらの同着のチームを決勝に進めることはしない。これらのチーム（の最終成績）は同順位として扱う。
- b) 予選ラウンドで、2 もしくはそれ以上のチームが、決勝ラウンド進出の最後以外で同着だった場合、その競技順はランダムに決定される。³⁾

³⁾原文は”If two or more teams are tied in the qualification round for any other place in the final round than the last, then they shall be separated at random for placement in the starting order;”. 混乱しており分かりにくい。決勝に通過したチームの中に、通過線上以外のところで同着があった場合は、決勝ラウンドでの対戦組み合わせの振り分けはランダムに決定する、ということだと思ふ。

- c) 決勝ラウンドの準々決勝ステージで2チームが同着になった場合、勝利チームはそれらのチームの予選ラウンドの成績で決定される。
- d) 決勝ラウンドの準決勝ステージ及び決勝ステージで2チームが同着になった場合、勝利チームは2チーム間の追加対戦で決定される。

7.3 デモンストレーションとオブザベーション

7.3.1 ルートセット・チームのメンバーがデモンストレーションをおこなう。

7.3.2 1本のルートでのみデモンストレーションを行なう。デモンストレーションは2回行ない、1回目はゆっくりと、次に競技と同じようなスピードで行なう。これに続いて、各ルートのオブザベーションを行なう。

7.3.3 オブザベーションの長さは通常4分間とし、ジュリー・プレジデントはこれを延長もしくは短縮することができる。

7.3.4 選手は出だしのホールドに、地面から両足を離すことなく触れることができる。

7.4 競技中

7.4.1 競技開始⁴⁾の呼び出しがかかったら、各チームの全選手は壁の前方約2mの位置につき、6.2.5.に従ってロープを結束しておかねばならない⁵⁾。

7.4.2 全ての選手が正しくロープをつけ終わった、スターターは「At your marks」と指示する。"At your marks"の指示で、それぞれの選手はルートA1、B1それぞれで、片足を地面または計時機器（使用される場合）に、もう一方の足を最初のホールドに置き、片手または両手を壁にかけて、スターティング・ポジションに入らなければならない。選手がスターティング・ポジションに入り静止したらただちに、スターターは「Ready?」と声をかける。いずれの選手からも、準備ができていない旨の明確な申告がなければ、スターターは「Attention」と声をかけ、わずかに（2秒未満）置いて、短く（0.2秒未満）大きく明瞭なスタート信号か、手動計時の場合は「Go!」と合図をする。全ての肉声による指示は、大きく明瞭に発せられねばならない。

7.4.3 スタートの合図を発する場所は、各選手から等距離でなければならない。

7.4.4 スターターが「Ready?」と尋ねた時に準備ができていないことを明瞭に告げた場合を除き、スタートの指示に対する抗議は一切許されない。

7.4.5 スターターがスタートの指示を行う時には、あらゆる雑音その他の、注意をそらせスタートの合図を明瞭に聞き取ることを妨げるものは、選手によっても、ジャッジによっても立てられてはならない。

7.4.6 スタートに失敗した場合、スターターは全ての選手を直ちに停止させなければならない。この指示は、大きく明瞭に発せられなければならない。チームは以下の場合に敗退となる。

- a) チームの最初の選手が、予選ラウンドまたは決勝ラウンドの同一ヒートで2回スタートに失敗した場合。
- b) チームの最初の選手以外が、スタートに失敗した時。

7.4.7 各選手はルートの終了点に達したら、スイッチを手で叩いて計時装置を停止させねばならない。

⁴⁾原文は"the start of a route"

⁵⁾原文では"all competitors shall be pre-clipped in accordance with Article 6.2.5."。スピードの場合ハーネスにロープをカラビナで結束することもできる（その方が主流）なので"pre-clip"と表現しているのではないかと思う。

7.4.8 最初の選手が登っている間、各チームの2番目の選手はルート A2 またはルート B2 のそれぞれのスターティングポジションに、上記 7.4.2. に示されたように入らねばならない。チームの最初の選手が上端の計時機器を叩くのに成功したらただちに、チームの2番目の選手はそのアテンプトを開始しなければならない。その後3番目の選手はルート A1 またはルート B1 それぞれのスターティングポジションに、上記 7.4.2. に示されたように入らねばならない。チームの2番目の選手が上端の計時機器を叩くのに成功したらただちに、チームの3番目の選手はそのアテンプトを開始しなければならない。

2番目もしくは3番目の選手が、その前の選手が上端の計時機器を叩く前に、そのアテンプトを開始したら、スタート失敗が記録される。

7.5 テクニカル・インシデント

7.5.1 スピード競技のテクニカル・インシデントは、次のように定義される。

- a) ホールドの破損または緩み。
- b) ロープが張られて、選手の動作の助けに、または妨げになった。
- c) 計時システムの障害。
- d) その他、そのチームの選手の行動によるものではない何らかの事象によって、あるチームに不利または不公平な結果が生じた。

7.5.2 予選ラウンド：選手がテクニカル・インシデントを被り、そのアテンプトが中断された場合は、もう一方のチームは登り続けなければならない。テクニカル・インシデントが確認されたら、被ったチームは新たにアテンプトを開始する。

決勝ラウンド：選手がテクニカル・インシデントを被り、そのアテンプトが中断された場合は、もう一方のチームは登り続けなければならない。テクニカル・インシデントが確認されたら、両チームは対戦を再開する。

少なくとも5分間の回復時間が両チームに与えられねばならない。

8. ワールドカップ・シリーズ

8.1 イントロダクション

8.1.1 IFSCの「本則」に従い、ワールドカップの国際シリーズ戦は、毎年開催される。

8.1.2 IFSCは、各種目について毎年最大10戦までのワールドカップ大会を公認する。

8.1.3 IFSC公認の各ワールドカップ大会は、男子と女子のカテゴリーからなる。その年に16歳に達する選手のみが、ワールドカップ大会に出場する資格を有する。

8.1.4 各ワールドカップ大会は、各種目の内の一つ、あるいは3種目のうちいくつかを含むものとする。それぞれの種目の形式については、セクション4、5、6、7に規定する。

8.1.5 ワールドカップ大会は通常、週末に開催される。ワールドカップ大会の最大日数は、1種目の場合は2日間、2種目の場合は3日間、全3種目の場合は4日間とする。

8.1.6 各ワールドカップ大会の最後に、男女の、リード、スピード及びボルダリング競技の優勝者は主催連盟/協会からトロフィーが授与される。

8.1.7 年間シリーズ最終戦の終了時に、ワールドカップはこれらの規則に従い、最高得点を獲得した選手を表彰する。

8.1.8 ワールドカップ・シリーズ戦の完了時、男女双方のカテゴリーの優勝者に、ワールドカップのトロフィーが授与される。さらに、1位、2位、3位の選手に、それぞれ順に金、銀、銅のメダルが授与される。

8.2 ワールドカップ・ランキング

8.2.1 各ワールドカップ大会の最後に、男女それぞれのカテゴリーの、上位30位までの選手に以下のようにポイントが与えられる。

順位	ポイント	順位	ポイント	順位	ポイント
1位	100	11位	31	21位	10
2位	80	12位	28	22位	9
3位	65	13位	26	23位	8
4位	55	14位	24	24位	7
5位	51	15位	22	25位	6
6位	47	16位	20	26位	5
7位	43	17位	18	27位	4
8位	40	18位	16	28位	3
9位	37	19位	14	29位	2
10位	34	20位	12	30位	1

表 1: 与えられる大会ポイント

ある競技会で同着になった各選手が獲得するポイントは、同着になった各順位に対応する全ポイントの平均となる。¹⁾。ポイントは、小数点以下を四捨五入する²⁾。

¹⁾Rules2008-2009のAmendment 2(2009/3/21)での追加。原文は“The points gained by tied competitors in a competition will be the average of points for the tied rank positions.”。要するに、予選で2ルートの成績の総合で順位を決める場合の同着の扱いと同じ考え方。無論この場合は、順位そのものではなく、順位に対応するポイントの方を平均する。

²⁾原文は“The points will be rounded off to whole numbers.”

8.2.2 各ワールドカップ大会で与えられたポイントは次の8.2.3に定める方式で集計される。集計ポイントは各ワールドカップ大会ごとに再計算され、ワールドカップ・ポイントを持つ選手は保有するポイントの降順でランク付けされる。各種目のワールドカップ・ランキングは、各ワールドカップ・シリーズ戦の終了後に発表される。

8.2.3 選手のワールドカップの最終ランク決定で、集計に使うポイントの最大数は以下の通り

- a) 5戦以下の場合：全てのポイントを加算
- b) 5戦を越えて開催された場合：IFSCが集計する大会数を公表する。

8.2.4 ワールドカップ・シリーズの総合ランキングは、7.2.1に基づいて各選手がシリーズを構成する各競技会で獲得した上位のポイントを加算して計算される。この計算に使用される各種目の競技会の最大数は、5とする。³⁾総合ワールドカップ・ランキングポイントの対象となるのは、少なくとも2種目においてランキングポイントを保有する選手に限られる。⁴⁾

8.2.5 もしその年のワールドカップ最終戦終了時に、ワールドカップの1位に、2名の選手が同着の場合、それを分けるために、同着の選手が同時に出場した大会での成績を、一つずつ比較し、同時に出場した大会で相手より上位となった回数で決定する。この計算後なお同着の場合、1位から始めて次は2位と言うように、上位の成績の獲得数で1位を決定する⁵⁾。

8.2.6 ワールドカップ・シリーズの国別の順位⁶⁾は、各国選手団が3.13.3に基づいてシリーズに含まれる競技会で獲得したポイントを加算して計算される。この計算に使用される競技会の最大数は、7.2.3に基づいて数えた結果とする。⁷⁾

8.3 選手の登録

8.3.1 加盟連盟/協会はIFSCの公式登録書式で以下の選手を登録することが認められる。

- a) 各国選手団の定員 主催国以外：
各加盟連盟/協会は男女それぞれのカテゴリーで各種目ごとに、3名ずつの正選手が認められる。

- b) 各国選手団の定員 主催国：
ワールドカップ大会の受け入れと開催をおこなう連盟/協会は、それぞれのカテゴリーで、6名ずつの正選手が認められる。加盟連盟/協会が同一種目につき二つ以上の競技会を組織する場合、この規定は二つの競技会に限って適用される。(適用される)大会はシーズンに先立って、加盟連盟/協会が選択することができる。さもなければ、この規定(二倍定員)は自動的にその国で開催される最初の二つの大会に適用される。

- c) 特別枠⁸⁾
当該競技会締め切り段階での、当該種目の世界ランキングの男子上位10名、女子上位10名と、直近の世界選手権及び、ユース、成年の大陸別選手権⁹⁾の優勝者で8.1.3の年齢要件を満たす者が、特別枠の資格を有する。加盟連盟/協会は、これらの選手を上記の8.3.1.a)、8.3.1.b)の規定にある選手に加えて、参加させることができる。

³⁾原文は”The maximum number of competitions in each discipline to be used in this calculation shall be 5”。

⁴⁾原文は”Only competitors who have accumulated ranking points in at least two discipline are eligible for the combined World Cup ranking.”。

⁵⁾2006年の改訂。05年までは、この段階で引き分けだった。

⁶⁾”the national team ranking”

⁷⁾原文は”The maximum number of competitions to be used in this calculation shall be the number of counting results in accordance with Article 7.2.3.”

⁸⁾”Extra quota”。2005年までは”Pre qualified”。

⁹⁾削除忘れの可能性もあるが、ワールドカップへの出場権を、大陸別選手権の優勝者に与えても不思議はない。

d) 追加名簿

加盟連盟/協会は、IFSCの公式登録書式で、各カテゴリーの各種目について6名までの追加選手を「追加名簿」¹⁰⁾に登録することが認められる。これらの選手の登録は、選手の総数が主催連盟/協会が計画した人数に満たない場合に、正規に確定される。こうした場合、各国選手団として登録された選手と特別枠該当者で埋められた枠を越えた部分は、希望する連盟/協会の間に均等に割り当てられねばならない。

主催者は全ての公式選手団のメンバーと特別枠該当選手を受け入れなければならない。

各主催者が受け容れねばならない選手の最少人数は、男子100名、女子100名とする。

8.4 賞金

8.4.1 賞金の最低額は各期毎にIFSCの財務委員会¹¹⁾で決定される。

この最低額を下回る場合の賞金リストは、組織委員会¹²⁾にとの協議によりIFSC評議会¹³⁾が決定する。

¹⁰⁾原文は”Supplementary lists”。従来はこの上限が定められていなかったが、2011年の改訂で6名に限定された。

¹¹⁾原文は”the IFSC management Copmmittee”で直訳すれば経営委員会

¹²⁾the Organisation Committee

¹³⁾”the IFSC Board”

9. 世界選手権規則

9.1 インTRODクシヨN

9.1.1 IFSCの「本則」に従い、世界選手権大会は2年に1度、奇数年¹⁾に開催される。

9.1.2 IFSC公認の各世界選手権大会は男子と女子のカテゴリーからなる。その年に少なくとも16歳となる選手だけが、世界選手権大会の出場資格を有する。

9.1.3 各世界選手権大会は、全ての種目から構成される。IFSCが特に別の形式を指定しない限り、大会の形式はセクション4、5、6、7に個々に規定されたものに従う。

9.1.4 世界選手権大会は通常、週末に開催される。世界選手権大会の最大日数は、5日間とする

9.1.5 各種目の、男女双方のカテゴリーの1位、2位、3位入賞者に、順位に応じて金、銀、銅のメダルが授与される。さらに、優勝者に、世界選手権のトロフィーが授与される。²⁾

9.1.6 世界選手権ではその大会の総合順位を用意しなければならない³⁾。総合大会ランキングにおける男女各カテゴリーの1位、2位、3位に、それぞれ金、銀、銅のメダルが授与される。さらに、1位の選手には総合世界選手権トロフィーが授与される。

9.2 選手登録

9.2.1 加盟連盟/協会は以下の選手をIFSCの公式登録書式に従って登録することができる。

a) 各カテゴリーで各種目毎に各5名ずつの正選手。

b) 全ての世界及び大陸別選手権の成年およびユースの現チャンピオンで9.1.2⁴⁾の年齢要件を満たす者は、その優勝した種目の特別枠選手⁵⁾とする。加盟連盟/協会はこれらの選手を、上記9.2.1a)に定めるところに追加して登録することができる。

¹⁾原文は“every second, odd-numbered, year”。

²⁾以前からおかしいと指摘してきたが、05年版でようやく訂正された。

³⁾原文では“prepare”を使っている。「決定する」では意味合いがずれる。要するに大会の中に、系統的に総合順位が位置づけられていなければならないということだろう。

⁴⁾原文は9.1.3、だが、年齢要件の規定は9.1.2.である。

⁵⁾the status of extra-quota competitors

10. 世界ユース選手権規則

10.1 インTRODクシヨN

10.1.1 IFSCの「本則」に従い、世界ユース選手権大会は毎年開催される。

10.1.2 IFSC公認の各世界ユース選手権大会は男子と女子¹⁾のカテゴリからなる。

10.1.3 各世界ユース選手権大会では、リードとスピードの両種目をおこなう。

10.1.4 世界ユース選手権大会は通常、週末に開催される。世界ユース選手権大会の日数は4日間とする。開催日の決定に当たっては、学校への出席の問題を最小限にするよう、特に考慮しなければならない。

10.1.5 リード、スピードの各種目の、男女双方のカテゴリの1位、2位、3位入賞者に、順位に応じて金、銀、銅のメダルが授与される。さらに、優勝者に、世界ユース選手権のトロフィーが授与される。

10.2 年齢別グループ

10.2.1 世界ユース選手権大会では、リード、スピード両競技に、以下の年齢別グループを設定する。

- a) ユース B: このカテゴリに登録する資格がある選手は、14または15年前に生まれた者とする。2010年の世界ユース選手権参加者については、1995または1996年に生まれた者である。
- b) ユース A: このカテゴリに登録する資格がある選手は、16または17年前に生まれた者とする。2010年の世界ユース選手権参加者については、1994または1993年に生まれた者である。
- c) ジュニア: このカテゴリに登録する資格がある選手は、18または19年前に生まれた者とする。2010年の世界ユース選手権参加者については、1992または1991年に生まれた者である。²⁾

開催年	生年					
	ユース B		ユース A		ジュニア	
2011	1997	1996	1995	1994	1993	1992
2012	1998	1997	1996	1995	1994	1993
2013	1999	1998	1997	1996	1995	1984
2014	2000	1999	1998	1997	1996	1995
2015	2001	2000	1999	1998	1997	1996

表 2: 世界ユース選手権の年齢区分

10.3 形式

10.3.1 リード及びスピード競技は、10.3.2、10.3.3に定めることがらを除き、IFSCの認める形式に従って組織される。

10.3.2 リードは3ラウンドから構成される。

a) 2本の異なるルートによる予選ラウンド

b) 準決勝と決勝ラウンド

¹⁾原文は他の大会が“men and women”であるのに対し、“male and female competitors”になっている。

²⁾日本人の感覚からするとややこしい方に思えるが、ほぼ原文のままの表現とした。その年に何歳になるかではなく、何年に生まれたかに注目して考えれば問題はない。早生まれが関係しない分、この方式の方が、日本の年度で区切る考え方よりもわかりやすい。

10.3.3 スピードでは全ての年齢別グループと両カテゴリーの、決勝ラウンドに先立つステージのヒート（8th ファイナル、クォーターファイナル、準決勝、3位/4位決定戦）は次のステージ開始前に完了していなければならない。³⁾

10.4 加盟連盟/協会による選手登録

10.4.1 加盟連盟/協会は以下に該当する選手を、IFSCの公式登録書式に従って登録することができる。

- a) 各カテゴリー、各年齢別グループの各種目について各4名ずつの正選手。
- b) 全ての世界及び大陸別選手権の成年およびユースの各カテゴリーの現チャンピオンで、10.2.1の年齢要件を満たす者は、その優勝した種目の特別枠選手とする。加盟連盟/協会はこれらの選手を、上記10.4.1a)に定めるところに追加して登録することができる。

³⁾決勝の各ステージは全カテゴリー、全年齢別グループの前のステージが全て終わらなければ開始しない、ということらしい。例えばユースBのクォーターファイナルヒートを開始できるとしても、ジュニアの8yhファイナルが終わっていないならば始められないことになる。

11. 競技中における罰則規定

11.1 インTRODクシヨN

11.1.1 ジュリー・プレジデントは競技会場内において、競技会に影響を及ぼす全ての活動と決定に、全面的な権限を有する（1.4.1aを参照のこと）。

11.2 選手

11.2.1 ジュリー・プレジデントとIFSCジャッジはともに、選手の競技会規則に対する違反と、品行上の問題に関して以下のことをおこなう権限を有する。

- a) 非公式の、口頭での警告。
- b) イエロー・カードの提示による公式な警告。

11.2.2 上記11.2.1.b)のイエロー・カードによる警告は以下の規則違反に対しておこなわれる。

ジュリー・プレジデントまたはIFSCジャッジの指示に関すること

- a) ジュリー・プレジデントまたはIFSCジャッジからの指示に従わない。
 - (i) IFSCジャッジまたはジュリー・プレジデントによるアイソレーション・ゾーンへ戻るようにという指示に対する不当な遅滞。
 - (ii) コール・ゾーンから競技エリアに入る指示を受けた後の不当な遅滞。
 - (iii) IFSCジャッジのスタートの指示に対する不服従。

用具及び式典に関すること

- b) IFSCの規則に用具と衣服に関する規定に対する不服従。
- c) 競技会主催者から供与された競技順ゼッケンの着用に関する不服従。
- d) 選手の開会式への不参加。
- e) 決勝の上位3名の表彰式への不参加。

品行に関すること

- f) 猥褻な、または好ましくない言動¹⁾。
- g) スポーツにふさわしくない行動²⁾。

これらの決定に対する抗議は、セクション12に定める手続きによる。

11.2.3 ある競技会で2回目のイエローカードを受けたら、その選手は当該競技会で失格となる。同一シーズンに2枚のイエロー・カードを受けた場合は、以下のいずれかとなる。

- a) その選手がすでに世界ランキングにカウントされる次のIFSC競技会に登録している場合、その競技会への参加資格を失う。
- b) a)が適用できない場合、世界ランキングにカウントされる次のIFSC競技会の、3枚目³⁾のイエローカードが発行された種目への登録資格を失う。

¹⁾原文は”Use of obscene or abusive language or behaviour of a relatively mild nature.”。 ”of a relatively … ”の意味が不明。

²⁾原文は”Unsporting behaviour of a relatively minor nature.”。 ”of a relatively … ”の意味が不明。

³⁾原文は”the third yellow card”。 ”second”の誤りか？

11. 2. 4 ジュリー・プレジデントだけが、選手を競技会から失格させる権限を持つ。失格はレッド・カードの提示にともなう。

それ以外の制裁を伴わない失格

以下の規則違反は、レッドカードの提示と選手の競技会での即時の失格となり、それ以外の制裁は伴わない。

- a) 認められたオブザベーション・ゾーンの外からルートを観察した。
- b) 認められていない用具の使用。
- c) アイソレーション・ゾーンまたはその他の制限された場所での、連絡手段の不法な使用。

これらの決定に対する抗議は、セクション 12 に定める手続きによる。

IFSC 懲罰委員会への即時の提訴を伴う失格⁴⁾

以下の規則違反は、レッド・カードの提示と、選手のその競技会での即時の失格となり、さらに IFSC の懲罰委員会に即時に提訴される。

選手または選手団員による競技エリアでの規則違反

- d) 当該競技会のルールで認められている範囲を越えて選手が競技するルートの情報を収集した。
- e) 当該競技会のルールで認められている範囲を越えて情報を収集し、また他の選手に伝えた。
- f) 準備中またはアテンプト中の選手の攪乱または妨害をした。
- g) ジャッジ、主催者役員、IFSC 役員の指示に従わなかった。
- h) 選手の衣服における広告に関する規定の違反。
- i) スポーツにふさわしからぬ問題行動、またはその他の重大な競技会の妨害。
- j) IFSC 役員、主催者役員、選手団員（選手を含む）あるいは何人であれその他の人々に対する悪口、無礼な、暴力的な言葉あるいは行動。

違反行為が、競技エリア外であっても、公共の競技場⁵⁾、競技会場、あるいは競技に関連して選手や選手団員によって使用されている宿泊施設や施設設備でおこなわれた場合⁶⁾。

- k) スポーツにふさわしからぬ深刻な問題行動、またはその他の重大な妨害。
- l) IFSC 役員、主催者役員、選手団員（選手を含む）あるいは何人であれその他の人々に対する悪口、無礼な、暴力的な言葉あるいは行動。

IFSC の懲罰委員会に提訴された場合の以降の手続きは、「IFSC の懲罰と抗議に関する規則」⁷⁾に別途定める。

⁴⁾ 「懲罰委員会」の原文は”Discipline Commission”。

⁵⁾ 原文は”public arena”。”public area”の誤りか？

⁶⁾ 原文は”Infringements committed outside the competition area but in the public arena or at the competition venue or at any accommodation or facilities used in connection with the competition by a competitor or team member”

⁷⁾ ”the IFSC Disciplinary and Appeal Rule”

11. 2. 5 イエロー・カードまたはレッド・カードの提示後、できる限り早い時点で、ジューリ・プレジデントは、以下のことをおこなわねばならない。

- a) 違反についてそして、ジューリ・プレジデントが規則に基づいたそれ以上の懲罰行動を考慮した、問題の提訴を、規則に従って提議するかどうかについての陳述書を作成し、選手のチーム・マネージャー（あるいはチーム・マネージャーが不在のときは当該選手）に提出する。⁸⁾
- b) この陳述書のコピーを、規則違反の詳細な報告書、証拠、IFSCの懲罰委員会への提訴による追加懲罰の考慮を求める勧告とともにIFSCに提出する。⁹⁾

11. 3 選手団役員

11. 3. 1 選手団役員は選手と同様に考えられ、それに応じた取り扱いを受ける。

11. 4 その他の人々

11. 4. 1 ジューリ・プレジデントは、誰であれ規則に違反した者の、競技エリアからの即時の退去を求め、必要であれば、その要求がいれられるまで競技の進行を中断する権限を有する。

⁸⁾原文は”Submit a written statement to the competitor’s team manager (or in the absence of a team manager ,to the competitor concerned)regarding the offence and whether the Jury President proposed to refer the matter for consideration in respect to further disciplinary action in accordance with the rules.”。今ひとつ、意味が取りにくい。

⁹⁾原文は”Submit a copy of this written statement together with a detailed report of the offence against the regulations ,any evidence ,and any recommendations regarding consideration of additional sanction to the IFSC for referral to the IFSC’s Disciplinary Commission.”。これも、意味が取りにくい。

12. 抗議

12.1 概説

12.1.1 全ての口頭あるいは文書による抗議と、公式の抗議に対する回答は、英語によっておこなわれなければならない。

12.1.2 抗議は公定の供託金¹⁾をとみなわなければ、受け付けられない。

12.2 抗議審査団

12.2.1 文書による抗議あるいは、下記の 12.3.1、12.4.2.b) にある口頭での抗議があった場合、ジュリー・プレジデントは、ジュリー・プレジデント、IFSC デリゲイトからなる抗議審査団²⁾を召集しなければならない。抗議審査団のメンバーはジュリー・プレジデントと IFSC デリゲイトとする。ジュリー・プレジデントが、もとの決定³⁾に関与し、かつ IFSC ジャッジが関与していない場合、IFSC ジャッジがジュリー・プレジデントにかわってメンバーとなる。もし審査団がアペールに対して全員の意見の一致による決定を行えない場合、もとの決定が有効となり供託金は返金される⁴⁾。決定は条件が許す限り素早くおこなわれなければならない。文書による抗議の場合、抗議審査団の決定は文書に作成し、ジュリー・プレジデントが、抗議を公式に提出した者に手渡さねばならない。下記の 12.4.2.b) に規定のある抗議の場合、チーム・マネージャーまたは選手に通知しなければならない。

12.2.2 以下の 12.3、12.4 に定める所についての抗議審査団の決定は絶対で、それ以上の抗議の対象とならない。

12.3 選手のアテンプトに関するジャッジの決定に対する抗議

12.3.1 選手のアテンプトに関する抗議⁵⁾は即座に IFSC ジャッジに対して行なうことができ、(IFSC ジャッジは)ただちにそれを、上記の手続きに従って処理するために、速やかにジュリー・プレジデントに報告しなければならない。

12.4 公表されたりザルトへの抗議

12.4.1 決勝及びスーパー・ファイナルラウンド以外の全てのラウンド終了後の、そして公式の成績発表後の選手の順位に対する抗議は、成績発表後 20 分以内⁶⁾におこなわれなければならない。決勝及びスーパー・ファイナルラウンドにおいては、リザルトの公表後 10 分以降であってはならない。抗議は競技会の各ラウンド後の公式成績発表に基づいておこなわれなければならない⁷⁾。抗議は文書として、チーム・マネージャーまたは公式のチーム・マネージャーがいない場合は選手によって、ジュリー・プレジデントに対しておこなわれなければならない。抗議審査団は、他の選手の抗議によって順位の下がった選手に、確実にその旨が通知されるようにしなければならない。

12.4.2 スピード競技

- a) 公表されたりザルトに対する抗議の場合は、上記の 12.4.1. の規定に従って抗議がおこなわれなければならない。

¹⁾”the official appeal fee”

²⁾”Appeals Jury”

³⁾抗議の原因となった決定。

⁴⁾抗議内容に同意はしないが却下ではないので返金する、ということだろう。

⁵⁾選手のアテンプトが強制的に終了させられること、すなわち使用限定されたホールドを使った、エッジを使用した……etc を選手が行ったと見られる場合である。

⁶⁾2007 年にそれまでの 30 分から 20 分に変更。

⁷⁾競技の進行中に会場内で暫定的に発表されるリザルトに対する抗議は行ってはならないということと思われる。

- b) 勝ち抜き戦の間の抗議の場合、抗議は対戦の結果が放送された後、直ちにおこなわれねばならない。IFSC ジャッジは直ちに、問題を Jury・プレジデントに付託しなければならない。競技会の次の対戦は、Jury・プレジデントがその決定を放送するまで、開始できない。こうした抗議においては、供託金を支払う必要はない。

12.5 抗議後の抗議

12.5.1 ある抗議に対して抗議審査団のおこなった決定に対する抗議は、抗議審査団の決定発表から 10 分以内に提出されねばならない。決勝とスーパー・ファイナルの両ラウンドにおいては、発表後ただちに行われなければならない。

12.6 安全性に関する問題

12.6.1 少なくとも 3 名のコーチが安全性に深刻な問題があると判断した場合、ただちに Jury・プレジデントに交渉することができる⁸⁾。Jury・プレジデントは問題を検討し、(アピールが) 妥当であれば必要な措置をとらねばならない。

12.7 懲罰委員会への申告

12.7.1 Jury・プレジデントが、規則違反が IFSC の懲罰委員会の考慮すべき事柄に値すると査定した場合、その問題は、Jury・プレジデントの報告書、Jury・プレジデントと関係するチーム・マネージャーまたは選手間の通知文書、関係する全ての証拠とともに懲罰組織⁹⁾ に付託されねばならない¹⁰⁾。

12.8 懲罰委員会

12.8.1 懲罰委員会の構成と手続きは、「IFSC の懲罰と抗議に関する規則」を含む IFSC の関連文書に定める。

12.9 供託金

12.9.1 支払わねばならない供託金は、IFSC が毎年発行する諸経費一覧¹¹⁾ の通り。

12.9.2 抗議が受け入れられれば、供託金は返還される。抗議が却下された場合、供託金は返還されない。

⁸⁾原文は”they should immediately contact the Jury President.”なので、ニュアンスとしてはもう少し弱い表現になっている。

⁹⁾”the disciplinary body”

¹⁰⁾「抗議」、「申告」と使い分けたが、原文では選手からジャッジへの異議申し立ても、ここで規定されている、Jury・プレジデントによる懲罰組織への書類送致とともに”appeal”になっている。

¹¹⁾”the list of fees”

13. アンチ・ドーピング

13.1 採用

13.1.1 IFSC は世界アンチ・ドーピング規定¹⁾(The Code) を採用する。

13.2 適用

13.2.1 この規定は、IFSC の権限において開催される全ての競技会に適用される。こうした競技会に参加、準備あるいはどのような形にせよ関与する者は全て、選手、コーチ、トレーナー、役員、医療担当者、準医療担当者はこの規定に同意し、この規定ならびに競技規則の 13.4.1 に定めるところを遵守することを承諾しているものとみなされる。

13.3 IFSC 内部の管轄部門

13.3.1 この規定の競技クライミング リード、ボルダリング、スピードから構成される への IFSC 内での適用は、アンチドーピング及び懲罰委員会²⁾が管轄する。

13.4 違反と制裁

13.4.1 ドーピングへの違反は、「IFSC アンチドーピング指針と手続き」³⁾と「IFSC の懲罰と抗議に関する規則」に基づいて処理される。

¹⁾”the World Anti Doping Code”

²⁾”the Anti-Doping and the Disciplinary Commissions”

³⁾the IFSC Anti Doping Policy and Procedure

IFSC WORLD RANKING (WR) について

IFSC ルール本文に何回か世界ランキング (WR) という言葉が登場する。これについては IFSC のウェブサイト に解説がある……と IFSC ルールにはあるのだが、どうも見つからない。おそらくは従来の CUWR (Continuous Updating World Ranking) が名称を変えただけと思われるので、ここでは従来のものを用語だけ変更して紹介する。

これはワールドカップに限らず IFSC 公認国際大会のポイントシステムである。ワールドカップのポイントは、IFSC ルールの P.49 に一覧表があるように、1 位が 100 ポイント、2 位が 80 ポイント、3 位が 65 ポイントとなっている。ところが、IFSC のサイトのリザルトをご覧になった方はお気づきと思うが、どの大会を見ても 1 位のポイントは 100 になっていない。大体が 60 ポイント台だ。これが世界ランキングをベースにしたポイントなのである。

こうした方法を使用する理由は、出場選手の顔ぶれも参加人数も異なる大会に一律にポイントを出したのでは、選手の年間ランクが適切なものにならない、と言う理由による。たまたま、有力選手が欠場した大会の優勝と、フル・エントリーした大会の優勝では、同じ優勝でも重みが違う。そこで、各大会の出場選手の顔ぶれによって、その大会で獲得できるポイントに差をつけて計算したポイントを各大会毎に計算。過去 1 年以内に出場した全大会のポイントの合計に基づいたランキングが世界ランキングである。

さて、ある大会でのポイントの計算法だが、まずその大会に出場している選手の、その時点での世界ランキングから "field-factor" という係数を算出する。

- 1) その大会に出場する世界ランキングを持つ全選手の内、その時点の世界ランキングが 30 位までの選手について、その順位に対応するワールドカップのポイント表のポイントに 15 を加えた数値を計算する。世界ランキングが 1 位の選手は $100+15=115$ 、2 位は $80+15=95$ ……30 位は $1+15=16$ という具合である。仮に同着があった場合、例えば 10 位に 2 人が並んだ時は

$$\frac{(\langle 10 \text{ 位のポイント} = 34 \rangle + 15) + (\langle 11 \text{ 位のポイント} = 31 \rangle + 15)}{2} = 47.5$$

と言うふうに計算する (この数値をまとめた表が下の表である)。

このように計算した全出場選手のポイントを合計する。

順位	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.
ポイント	115	95	80	70	66	62	58	55	52	49
比率	9.1%	7.5%	6.3%	5.5%	5.2%	4.9%	4.6%	4.3%	4.1%	3.9%

順位	11.	12.	13.	14.	15.	16.	17.	18.	19.	20.
ポイント	46	43	41	39	37	35	33	31	29	27
比率	3.6%	3.4%	3.2%	3.1%	2.9%	2.8%	2.6%	2.4%	2.3%	2.1%

順位	21.	22.	23.	24.	25.	26.	27.	28.	29.	30.	合計
ポイント	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	1268
比率	2.0%	1.9%	1.8%	1.7%	1.7%	1.6%	1.5%	1.4%	1.3%	1.3%	100%

- 2) 世界ランキングを持つ全ての選手 (その大会に出場していない選手も含め) について、ポイントを計算し合計すると上の表にあるように $(100+15) + (80+15) + (65+15) + \dots + (3+15) + (2+15) + (1+15) = 1268$ となる。
- 3) 1) で得られた値を 2) の 1268 で割ったものがその大会の "field-factor" であり、その大会の各選手の順位が決定後に、各選手の順位に対応するポイント (P.49 の表) に "field-factor" を乗じた値が、各選手のその

大会での世界ランキングに基づく獲得ポイントになる。なお、小数点以下の端数については、全て小数点以下 3 桁目を四捨五入し小数点以下 2 桁までとしている。

”field-factor”は、世界ランキングを持つ全ての選手が出場すれば 1 になる。仮に、世界ランキングを持つ選手が一人も出場していない場合は 0 になる (そんな大会はワールドカップとして意味がないのは確かだが、仮にそんな大会があったらどうなるんだろう?)。と言うわけで、有力選手=世界ランキング保有者がたくさん出場しているほど、”field-factor”は大きく (1 に近く) なる。世界ランキングを持つ全ての選手が出場すれば、P.49 の表のポイントがそのまま獲得ポイントになるし、有力選手が少ないほど、獲得できるポイントは少なくなるわけだ。

さてここで問題なのは、ある大会の世界ランキングのポイントを算出するためには、過去の戦績に基づく世界ランキングのランキングが必要と言うこと。そうすると最初の世界ランキングの算出はどうやったのか? 卵と鶏である。

現実の世界ランキングのシステムではリードの場合で、1991 年の 5 大会 (ワールドチャンピオンシップと 4 回のワールドカップ) について”field-factor”を 0.6 として計算したものを出発点にしていると言うことである (と言うことは 1992 年からこのシステムが使用されているということだろうか?)。

そしてもう一つ。”field-factor”算出の際に、何故ポイントに 15 を加えるか、と言うことがある。これはあくまで推測だが、ワールドカップのポイントの差が上位ほど大きいことによるのだろうと思われる。仮に、ワールドカップの各順位に与えられるポイントが等差で並んでいるようであれば、そんな必要はなくなるだろう。つまり 1 位 100 ポイント、2 位 80 ポイント、3 位 65 ポイント……と差が 10~20 ポイントもあるために、仮に 15 を加えずに計算すると、世界ランキングが上位の選手が欠場した場合に”field-factor”が必要以上に小さくなってしまふのだ。

試しに、世界ランキング 1 位の選手以外は全員出場した場合を試算してみよう。15 を加えた場合の”field-factor”は $(1268 - 115)/1268 = 0.91$ であるが、15 を加えない場合、 $(818 - 100)/818 = 0.88$ となる。実際には出場する世界ランキングのポイント保有選手はもっと少なくなるため、影響はさらに大きくなるだろう。いかに世界ランキングで首位の選手とは言え、その選手が出ないだけで”field-factor”があまりに低くなってはまずい、と言うことだろう。

なおこのシステムは 1999 年に手直しがあったとのことで、それ以前と以後で合計する大会数やポイントを付与する人数などに違いがあるようだ。

リード競技でのホールドの番号付けについて

Wim Verhoeven

(Herman Engbers によるコンセプトに基づく)

この文書はタイトルの通り、リード競技の実際の高度判定でホールドの番号付けをどのようにするか、についての指針を示した文書である。当初は 2006 年の”ジャッジセミナー” (Seminair とフランス綴り?) で合意された事柄として IFSC のサイトで公開されたが、ミーティングの内容のメモに近い体裁で、整理された文書とは言いがたかった。その後 2009 年になって、ここに訳出したものが発表されたのである。

この文書を読む前に、ヨーロッパ(と言うよりも日本以外)と日本のルート図の作成に関する違いを知っておく必要がある。国内ではルート図はルートセッターが作成し、ホールド番号もセッターがつけるのが普通だ。これに対してヨーロッパでは、セッターがルート図までは作成しても、ホールド番号はジャッジが付けている。ジャッジに細かい手順の判断が 100% 可能であるとは思えない。セッターがやった方が話が早いと思うのだが、そうはなっていない。レギュレーション上は、確かにチーフ・ルートセッターの役割として「リード・ルートにおけるルート図の作成を補助し」とあるのみで、「作成」とは書いてないがジャッジの仕事としてルート図の制作があるわけでもない。そういう曖昧な中で、どういう訳かジャッジがルート図を作ることになっているのが日本以外の状況なのだ。

はっきり言ってしまえば、この資料は 場合によっては自分ではクライミングをしたことのないジャッジでもルート図にホールド番号をつけられるようにするための指針として出されたものと考え、理解しやすいだろう。

ハンド・ホールドの定義と番号付けは、2 段階のプロセスであり、それは固定的なものではなく¹⁾競技会中にトポ²⁾が変更されることもある。

1. ハンド・ホールドの定義

ルートジャッジは(インターナショナルルートセッター³⁾及び IFSC ジャッジの補助のもとに)選手が各ルートで使用すると予想したハンド・ホールドを、特定⁴⁾する。

注: いかなるオブジェクト(クライミング・ホールド、はりぼて、エッジ……)であれ、ハンド・ホールドとして定義することができる。オブジェクトの使用可能な部位のみを有効なハンド・ホールド⁵⁾とする。一つのオブジェクトは、複数のハンド・ホールドを持ちうる。これは、大きなはりぼてのみでなく、異なる箇所を保持しうる 1 個のクライミング・ホールドにおいても同様である(例: 説明図の No.1 と 2、No.5 と 6)。ただこのように、一つのホールドを両手で使用するだけでは、この後に出てくるデュオ・ホールドにはならない。

¹⁾原文は”dynamic”なのだが日本語のニュアンスとしては、「変化/変動する」より「固定的でない」と表現した方が自然であると考えられる。

²⁾”topo”。ルート図のこと。2007 年まではルール本文でもこの表現だったが、2008 年から”the route sketch”となっている。

³⁾現在のルールでは”chief routesetter”が正しいのではないと思う。

⁴⁾原文の動詞は”mark”。「記録する」、「明示する」、「選別する」、「位置を示す」と、様々な訳語が可能で、どれでもそれなりにあてはまりそうだ。だが、「選別」以外の意味で使用する場合、「どこに」が問われるはずだろう。”on the topo”があれば良いが、原文にはそれがない。とすると、ルート図への記入の意味合いは薄いと考えられるのでこのように訳出した。

⁵⁾”the actual handhold”

定義：

クライミング・ホールド：合成樹脂の造作物で、クライミングウォールに（手と足、両方のために）ネジまたはボルトで固定されるもの。

ハンド・ホールド：クライミング・ホールド、及びクライミング・ホールドの一部分、はりぼて⁶⁾その他の一部分で、手で保持（クライミングに使用）しうるもの。

あらゆるハンド・ホールドは、他のハンド・ホールドと明瞭に区別することができて初めて、独立した⁷⁾ハンド・ホールドと見なすことができる。

注：全体にわたって似たような形状の大きなはりぼて（「コルネ」など）の場合では、しかしながら外見上の判断（例えばボルトより上であるか下であるか、など）をもってハンド・ホールドを分けることができる。

2. ハンド・ホールドの番号付け

原則 1：ルートのラインに沿って、より遠方にあるハンド・ホールドには高位の番号を与える

あらゆるホールドはルートのラインに沿った距離に基づいて番号付けされる。ルートセッターによって最良と推定された手順は、デュオ・ホールドとされた場合を除き、考慮されない⁸⁾。

注：ルートのラインは、角ばったものではなく滑らかなものである。それはトボ上に、ハンド・ホールドをおおまかにつなげて引かれるものである。ルートのラインは、輪になったり細かく迂回することはない⁹⁾。

選手が未定義のオブジェクト（フットホールドや、オブジェクトの一部分）を手でクライミングに使用した場合、そのオブジェクトはその瞬間からハンド・ホールドと見なされる。そのハンド・ホールドは、番号付けに含まれることになる。説明図のナンバー 14.5 のハンド・ホールドを参照されたい。

2 個のハンド・ホールドがルートのライン上において等距離にあり、そのいずれか一方のみで登れる場合、両ホールドは同じナンバーを与えられる。

注：例えば、選手が説明図のナンバー 20 のハンド・ホールドと同高度にある”フットホールド”（事前にはハンド・ホールドとはされていない）を使用したら、このフットホールドはハンド・ホールドとなり、ナンバー 20 が与えられる。

原則 2：デュオ・ホールド

デュオ・ホールドには 3 つの場合が存在する：

1. 持ち替え（説明図の 8/9 を参照）

このタイプのデュオ・ホールドは、必ず両手で使わなければ登れない、大きめのクライミング・ホールドの場合に指定される。

注：両手で保持しうる大きめのクライミング・ホールドでも、そうする必要の無いものはデュオ・ホールドとは見なされない。また両手で保持することが必須であっても、1 保持する部位が明確に区別され、2 その位置関係がルートのラインに沿って異なる高さ/距離にあり、3 高い/遠いホールドを先に保持する可能性がない場合はデュオ・ホールド指定することなく、単に保持するそれぞれの部位に異なるホールド番号を振るのみである（例：説明図の No.1 と 2 のホールド）。説明図の No.8/9 のホールドの場合は、左右の手で保持する部位が連続的で区別できないため、デュオ・ホールドとなる。

2. 同高度にある 2 つのホールド（説明図の 16/17 を参照）

⁷⁾”unique”

⁸⁾これはかなり大胆な話のように、私たちには感じられる。ここには割り切りがある。つまり「手順は関係ない。とにかく物理的により高く/遠くまで登ったものが上位になる」ということである。

⁹⁾”The line of a route can not contain any loops or small detours.”後者は、例えば 1 手右にトラバース、1 手直上、1 手左トラバースというような箇所であってもラインとしてはなめらかに直上するものとして扱う、ということだろう

このタイプのデュオ・ホールドは、2つの異なるハンド・ホールドがアクシス¹⁰⁾に沿って地面から等距離にあり、その両方ともを必ず使用しなければ登れない場合に指定される。

3. 2つのハンド・ホールド（例：一つは順ホールドで、もうひとつはアンダークリング、説明図の16/17を参照）。このタイプのデュオ・ホールドは、以下の二つの条件が重なった場合に指定される：

- a. 近接して（隣り合って、または上下に）ハンド・ホールドが設置され、選手は登るために必ず両方のハンド・ホールドを使用する必要がある。
- b. クライマーの何人かはおそらく（あるいは確実に）ルートのアクシスに沿った距離に基づくホールドの番号付けとは相容れない手順で登ると思われる時。（例：より高い/遠いハンド・ホールドを最初に、その後低い/近いハンド・ホールドを使う）¹¹⁾

注：デュオ・ホールドは、ハンド・ホールドの順序を改変する¹²⁾方策である。このルールは十分に注意して使用すること。上に挙げた「必ず」とされている基準が満たされていることが肝要である。

デュオ・ホールドの成績判定の方法

デュオ・ホールドの2つのハンド・ホールドのいずれかを片手でとれば、最初の番号が与えられ、もう一方のハンド・ホールドを残りの手で取れば、2番目の番号が与えられる。

デュオ・ホールドの表記の方法

ルートジャッジは通常、デュオ・ホールドの2つのホールドの周囲を丸で囲み、「/」を間に挟んで2つの数字を記入する（説明図の11/12を参照）。

原則 3：トポは固定的なものではない

競技中に、（何人かの）クライマーが競技会前に予期されたものとは異なる手順で登ったことが明らかになった場合、ルートのラインと、デュオ・ホールドの適用は見直されねばならない¹³⁾。その結果、ホールドの番号付けも変更が必要になることがありうる¹⁴⁾。

例：選手がデュオ・ホールドの2つのハンド・ホールドの一方のみで、あるいは片手のみでそのセクションを通過できることを示した場合は、デュオ・ホールドの適用は見直されねばならない¹⁵⁾。

¹⁰⁾ "axis"。"the line of the route"と同じ意味。これも2007年までのルール本文で用いられていた表現。

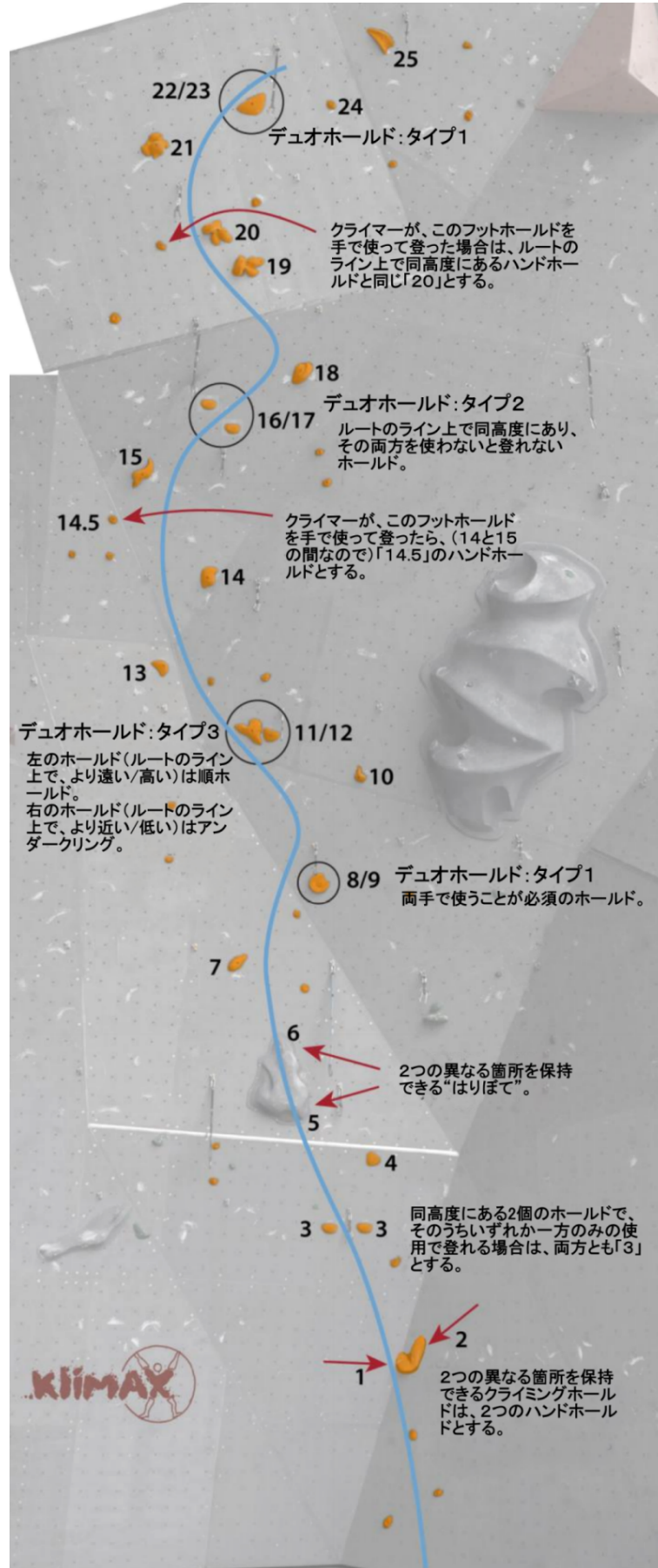
¹¹⁾ この部分。原文は右カッコのみで左カッコがない。"Example:"以下がカッコにくくられるものと推測した。

¹²⁾ 原文は"A duohold is a way to reflect the sequence in the handhold numbering."。この"reflect"は通常の「反射」ではなく、「他にそらせる」の意味合いで用いられていると解釈するのが、文脈上、自然だと考える。つまり、ルートのライン上に並んだ順番とは異なるものとする、という意味合いだろう。

¹⁴⁾ 原文は"Consequently the numbering of the handholds might need to be changed."の"might"のみがボールド。

¹⁵⁾ これはやり過ぎではないだろうか。極めて特異な身体能力を持つ特定の個人にのみ、それが可能なこともあるのではないか。そうした場合にデュオ・ホールドの指定を解除することは、逆に混乱させるように思われる。

説明図：



INTERNATIONAL CLIMBING COMPETITIONS RULES 2011

暫定日本語版 (2012/02/12)

監 修 北山 真、安形 康

訳・注 山本 和幸

発 行 (社)日本山岳協会競技委員会